

愛知学院大学

語研紀要

第30巻 第1号 (通巻31号)

論 文

- ボードレール、悔恨の迷宮……………堀 田 敏 幸 (3)
- ディケンズ作品における父と息子……………近 藤 浩 (31)
- 因子分析を用いた大学入試センター試験
『英語』の妥当性検証……………伊 藤 彰 浩 (47)
- 「旅」と「地図」を視点にした新たな日系アメリカ文学の研究
——カレン・テイ・ヤマシタの作品を通じて——
……………山 本 茂 美 (61)
- 男女共同参画社会における
言語とジェンダーに関する一考察……………相 川 由 美 (83)
- ユルスナールの思考における東洋的要素
——『目を見開いて』を中心に——……………坂 本 久 生 (103)
- メトニミーとしてのコピュラ文……………金 子 輝 美 (121)
- 『嵐が丘』における登場人物の形容……………戸 谷 鉦 一 (143)
- 『マイ・フェア・レディー』におけるヒギンズとイライザの
語尾-ing の g の脱落現象について……………矢 野 矢 容 衣 (173)
- 与动词搭配的补语“上来、上去”的分类……………神 谷 博 (205)

研究ノート

- 韓国と北朝鮮における言語規範の比較
——「分かち書き」を中心に——……………文 嬉 眞 (227)

資 料

- A memoir of two pioneers :
Leon Pettitt and Margarette Gale……………Daniel DUNKLEY (247)

2005年1月

愛知学院大学語学研究所

FOREIGN LANGUAGES & LITERATURE

Vol. 30 No. 1 (WHOLE NUMBER 31)

ARTICLES

- Baudelaire, labyrinthe du remords..... Toshiyuki HOTTA (3)
Fathers and Sons in Dickens's Novels Hiroshi KONDO (31)
A Factor Analysis on the English Language Test in a Japanese
Nationwide University Entrance Examination Akihiro ITO (47)
A New Study of Japanese American Literature From
Viewpoint of "Trip" and "Map"
—Throughout The Works Written By Kren Tei Yamashita—
..... Shigemi YAMAMOTO (61)
A Perspective to Language and Gender in a Gender-equal Society
..... Yumi AIKAWA (83)
Des éléments orientaux dans la pensée de Marguerite Yourcenar
— À propos de « Les yeux ouverts » — Hisao SAKAMOTO (103)
Copulative Sentences as Metonymic Expression .. Teruyoshi KANEKO (121)
Modifiers of Characters in *Wuthering Heights* Koichi TOTANI (143)
A study of the *g* Dropping of Higgin's and Eliza's Speeches
in *My Fair Lady* Yayoi YANO (173)
The category of "ShangLai" and "ShangQu" as verb complements
..... Hiroshi KAMIYA (205)

NOTES

- A Study of Language Standard in North and South Korea:
For Focus in Writing with a Space between Words Hi Jin MOON (227)

MATERIALS

- A memoir of two pioneers:
Leon Pettitt and Margarette Gale Daniel DUNKLEY (247)

目 次

論 文

- ボードレール、悔恨の迷宮……………堀 田 敏 幸 (3)
- ディケンズ作品における父と息子……………近 藤 浩 (31)
- 因子分析を用いた大学入試センター試験
『英語』の妥当性検証……………伊 藤 彰 浩 (47)
- 「旅」と「地図」を視点にした新たな日系アメリカ文学の研究
——カレン・テイ・ヤマシタの作品を通じて——
……………山 本 茂 美 (61)
- 男女共同参画社会における
言語とジェンダーに関する一考察……………相 川 由 美 (83)
- ユルスナールの思考における東洋的要素
——『目を見開いて』を中心に——……………坂 本 久 生 (103)
- メトミーとしてのコピュラ文……………金 子 輝 美 (121)
- 『嵐が丘』における登場人物の形容……………戸 谷 鉦 一 (143)
- 『マイ・フェア・レディー』におけるヒギンズとイライザの
語尾-ing の g の脱落現象について……………矢 野 矢 容 衣 (173)
- 与动词搭配的补语“上来、上去”的分类……………神 谷 博 (205)

研究ノート

- 韓国と北朝鮮における言語規範の比較
——「分かち書き」を中心に——……………文 嬉 眞 (227)

資 料

- A memoir of two pioneers :
Leon Pettitt and Margarette Gale…………… Daniel DUNKLEY (247)

ボードレール、悔恨の迷宮

堀 田 敏 幸

—

ボードレールは「夕べの諧調」や「夕べの薄明」という題名の詩が示すように、夕陽を歌うことの多い詩人である。前者の詩では、「夕空は仮祭壇のように悲しくも美しく、／太陽は己の凍る血潮の中に沈みはて⁽¹⁾」という二行の詩句が、全十六行の中でそれぞれ二度ずつ繰り返される詩形により、ワルツのような軽妙感のもとで夕陽を表現している。しかし、ボードレールが夕陽ばかりを歌っていた訳ではなく、『悪の華』初版では昼間の強い光線を発する太陽がその最初の幾篇かで描かれている。例えば1番の「祝福」では少年が太陽の光に酔いしれると歌い、2番の「太陽」ではそれが詩人に薔薇のような詩句をもたらし、心配ごとを空へと蒸発させると歌ってその働きを称える。3番の「飛翔」では太陽の光あふれる野へと飛び出す者の幸福を語り、そして5番の無題の詩では冒頭の二行をこう歌った。

「太陽神」が石像を黄金に染めるのを好んでいた
あの裸の時代の思い出を私は懐かしむ。⁽²⁾

一行目の「太陽神」Phœbusは初版では「太陽」soleilと表現されていたもので、「太陽神」に変更されたとしても意味上の大きな変化は生じないが、それが「黄金に染める」ことから、真昼の太陽なのか夕陽なのか判断に迷うかもしれない。しかし、この後の詩句において「大空が人の体を愛撫し鍛える」という太陽光の恵みを表現していることから、西空の太陽を想像することは困難であるだろう。従って、ボードレールは太陽が燦々と輝いていた時代を追懐していることになる。

このように、ボードレールは『悪の華』初版において、最初の数篇を連続して真昼の太陽を称揚することに当てている。これ程の太陽礼讃を知ると、彼が単に太陽の末期の輝きを愛好する詩人というに留まらず、太陽全般に対する嗜好を持っていたと思えてくる。ただここで、ボードレールの全的な太陽崇拜を肯定してしまうことには、やはり行き過ぎがあると言うべきであろう。というのも、引用した先の無題5番の詩句においても見られるように、詩人は彼が生存している日々の太陽を愛好している訳ではなく、彼は太陽の雄々しく照りつけた「裸の時代の思い出」を惹き立てるに過ぎないからである。この詩の後半で、ボードレールは「今日」^{こんにち}の状況に立ち戻って男女の裸の様や自然の偉大さを眺めようとしてみても、そこには「黒々とした寒け」を覚えるばかりだと告白せざるを得ないのである。現在の状況が汚辱に満ちた不快なものであるがゆえに、放縦な開放感を古代の太陽に求めているに過ぎないとは言えるであろう。

ボードレールの太陽への嗜好が血のように凝血する落日であろうと、ルビーのように燦然と輝きを放射する夕陽であろうと、また夜の苦悶を終わらせて新たな「理想」を告げる朝日（「霊のあけぼの」）であろうと、そして古代の豊穡を約束する真昼の太陽であろうと、厚い雲にさえぎられて姿を隠してしまった冷たい太陽（「憂愁」78）であろうと、この詩人は彼自身の存在からは距離を取り、近づこうとしても決して手の届か

ない太陽に詩の中で絶えず語りかけようとする。それは太陽の朝、昼、夕と見せる千変万化な姿が詩人の情感と適度に同調するためであるとはいえ、なぜこれ程にもボードレールは太陽に興味を示すのであろうか。彼が『悪の華』の出版以前に美術批評を刊行して画壇にも精通していたことは周知の通りだが、『一八五九年のサロン』の中で小説家としても知られるウージェーヌ・フロマンタン（1820～76年）がアルジェリアの太陽の輝く風景を文章と絵画で表現した紀行文について語った箇所は、ボードレールの太陽に対する感性をよく示している。

太陽の方へと私を向かわせる郷愁に、私自身、幾分なりとも魅了されているのかもしれない。というのも、これらの輝くような画布から私を酔わせるような酒気が立ちのぼり、間もなく欲望と後悔とに凝縮⁽³⁾していくからである。

太陽に対する「郷愁」とはどのようなものであるのか。ボードレールはこの文章に続いて、木陰で横になっている男たちが「広大な光がかもしだす休息の楽しみと幸福な気持ちを表現している」と述べて、南国の太陽の下に暮らす怠惰な生活を羨望している。フランス北部の曇天の多い寒冷な気候のもとに育った詩人にとっては、北アフリカの焼けつくような太陽は安穩とした生活の象徴のように思えたことであろうし、こうした暑さのある環境は「裸の時代を懐かしむ」と歌った「古代の太陽」とも直結したものと映ったことであろう。また二十歳の時に、文学者になるのを断念させようとする家族の思惑のもとにインド洋へと向かった八ヶ月余りの船旅は、アフリカの強烈な太陽の印象をボードレールに植え付けたことであろう。彼にはこうした体験が重なって、南国の太陽に対する「郷愁」が育成されていったと考えられる。郷愁とはその人にとって精神的根源となるほどの親愛を覚えるものでありながら、それが

その人自身にとっては欠落したものであり、はるか彼方に必ずや存在すると思ひ描くところの切実なる思慕である。従つて、それは未来に対する強烈な憧憬であると同時に過ぎ去つた時間への懐古であり、失われたものへの追慕となつて人の精神に湧出してくるのである。

ボードレールは郷愁が二つに分離して凝縮されると言う。それは「欲望と後悔」であつて、欲望なら暑い太陽の作りだす怠惰な生活や幸福を求める積極的な気持ちへと向かい、後悔なら、それが叶えられない現実生活の失望感へと結びつく。元々、郷愁とはこうした二律背反的な性質を持っているものであつて、遠い彼方に存在する理想への止むことなき憧憬が希望と共に自覚されるとき、それは欲望としての性質を帯びるのであるし、反対にあまりに遠すぎる理想への憧憬が実現不可能なものとして認識されるとき、後悔の念を人に引き起こす。郷愁とはそれが始めから見も知らぬ彼方の存在であり、過去の幸福な時代には保有していたかもしれないが、今となつては失われたものであり、その存在を感じ取ることだけが許されたものとして人間に与えられている。郷愁の念に駆られることはこの遠く離れたものを手の届かぬものとして、なおも絶望に陥ることなく、明日への望みとして無傷のままに保存しておくことを意味するのである。

郷愁に対し思慕するものがその人間にとって本質的であつ親愛の持てるものとすれば、それは人間がうまく機会を得さえすれば入手可能と思えるようなものであるだろう。失われたものでありながら、なおも眼前にその存在を彷彿とさせるものといえば、太陽はその筆頭にあげられる。夜の闇を打ち破つて出現する朝日、万天に光と熱の恵みをもたらす中空の太陽、空を真紅に染めて別れの饗宴を催す夕陽、そしてその姿を強烈に示しながらも決して人間の手中には落ちない、強運と悲哀を兼備した彼方の存在、こうした変容の姿が太陽に対して人間の郷愁を誘つて止まない理由である。詩人ボードレールもこの誘惑から逃れることはできな

いが、これらの様々な容貌を示す太陽の中でも彼が強く興味を示すのは、「後悔」へと落ち込んでいく太陽、つまり夕陽ではなからうか。怠惰と自由をむさぼることを許容する昼間の太陽への愛着も抑えがたいとする一方で、理想追求の後に後悔へと導かれていかざるを得ない詩人として、彼は夕陽に哀惜を覚え、夜への不安を察知するのである。ボードレールは散文詩「二重の部屋」の中で、日没時の状態を次のように描いた。

魂はそこで悔恨と欲望により芳香を付けられた、怠惰の湯浴みをする。——それは何か黄昏のようなもので、青みと薔薇色がかったものである。陽光の失われていく間の悦楽の夢。⁽⁴⁾

これは詩人が部屋の中に籠もって怠惰に身を任せつつ夢想到に浸り永遠の気分を味わっていると、悪魔が現れて時間を思い出させ労働へと駆り立てるという話であるが、その冒頭の部分において、夢想のさなか彼は「悔恨と欲望」を抱くと言う。しかも、その雰囲気は「黄昏」どき、つまり夕陽が西に傾き薄闇が迫ってくる時の状況に似ていると説明づける。ただしここでは「黄昏」crépusculaire 自体に悔恨と欲望が内包されると語っている訳ではないので、フロマンタンのアルジェリアの絵を論じた時とは同等に比較できないが、それでも夢想における怠惰な状態と「黄昏」とが同じ状況を呈し、その両者に共通するものとして「悔恨と欲望」が発生するわけである。そうすると、ボードレールにおいて悔恨（後悔）と欲望という一見対立するものがよりよく共存可能なのは、昼間の太陽と黄昏の夕陽とのどちらかと問えば、後者の方に手が挙がるであろう。この判断は何もボードレール一人に限らず一般的に言えることで、どんなに夕陽自体がその真紅の華麗な姿を見せようとも、西の端へとすべからく没する運命にある以上、人の太陽に対する欲望を失墜させて後悔へといざなう要因を有しているのである。宇佐美斉はボードレール

ルの落日に関して、「デカダンスの詩学は、こうしてつねに二重性を帯びる。『憂鬱と理想』、『高翔と墜落』、『陶酔と恐れ』、『滅亡と再生』、これらは、〔……〕 矛盾関係でも対立関係でもなく、欠如の関係にあるのだ⁽⁵⁾」と述べた。ここに挙げられたそれぞれの二項の要素が互いを排除せず、反対に相手を誘導するものであるとすれば、欲望と悔恨、欲望と後悔もまたこの分類に従うことになる。ジャン＝ピエール・リシャールは散文詩「二重の部屋」を論じた箇所、「後悔と欲望は意識に対して両方へと揺れさせ、その生命を一段とよく感じ取らせる⁽⁶⁾」と述べた。後悔と欲望はボードレールにおいて、同盟を組んで事態に対処するものなのである。

二

欲望と後悔を同時に誘引するものとして、ボードレールは華麗さと末期の美学を演じる夕陽を好んだ。また南国の怠惰と古代の自由を彷彿とさせる太陽は、彼に彼方の理想としての郷愁を引き起こした。郷愁としての太陽は人間に根源的なものへの欲望と、そしてその入手不可能性ゆえの後悔をもたらすが、この後悔は欲望との協調により幸福の地への穏和な思慕へと変わる。太陽に対峙するときの詩人は、それが人間に自然の恵みを約束するという日常的な役割も手伝って、たとえ労働を強いる太陽や曇天の隠れた太陽に恨みの念を抱くことがあるとしても、平穏な感情に包まれているのである。

それでは、人間の手の及ばない自然界の太陽とは別れて、詩人自身が直接的に体験できることで後悔と欲望の関係を考察してみることにした。ボードレールは二十歳に達して実父の遺産が入り、セヌ川の中州サン＝ルイ島のピモダン館に住居を移すと、同じくこの館に住んでいた

画家のフェルナン・ボワサールの部屋でアシーシュを服用した。この遊興の会には他にゴーチエやバルザック、ネルヴァルなどの文学者も参加している。ボードレール自身はこれに心酔することはなかったが、この体験を生かして「人工の理想について——アシーシュ」と題する評論を一八五八年に発表した。この中で薬物と後悔の関係について語っている。

快樂の奇妙な要素である後悔は、ほどなく後悔による心地よい瞑想、一種の享樂的な分析の中にかき消されてしまう。〔……〕人は自分の自由を失いつつも、自らの後悔を〈尊び〉、己を称えるのである。⁽⁷⁾

この引用した文章だけを読むと、アシーシュを服用すること自体が悪徳であり、この行為を「後悔」していると理解されかねないけれども、そうではなく、後悔の対象は過去の何かの不幸な体験を想定している。アシーシュの服用中に思い浮かぶ苦い経験への反省が、「享樂的な」快樂へと変じることをボードレールは主張しているのである。そうすると、なぜこのような不幸の意識から快樂へ、そして「後悔」という苦悩が人の中で賞讃へと変化することになるのであろうか。この理由を引用文の直前でこう述べている。

これらの苦い経験が、この場合には楽しみへと変わり得る。つまり、謝罪の必要性によって想像力がより巧妙で切望感の強いものになるのだし、後悔それ自体が長い独白によってのみ語られるこの悪魔的な劇においては、刺激物として作用し、心の熱情を力強く高めることがあり得る。⁽⁷⁾

要するに、ボードレールは後悔自体が根本的に内包している「謝罪の

必要性」により想像力がより熱を帯びるために、反省行為であるはずのものが快樂へと変化すると述べている訳である。このことは前の引用文の最初で、「快樂の奇妙な要素である後悔」というように語っていることから明らかなように、後悔すること自体が元々快樂を含んでいることをボードレールは見抜いていることになる。後悔とは過去の苦い失敗に対する反省に他ならないが、この失敗とはすでに終結してしまったことであり、反省に身を任せる人間はこの失敗にもかかわらず、現在の時点においては反省するだけの時間的かつ生命的な余裕が与えられている。過去の失敗は確かに苦渋と損失をもたらすものであった。しかし、後の時点で反省行為に従事している人間は、この失敗を原資にして再度、過去の物語を構成しなおすことができる。過去の現場においては、本人だけでなく様々な他人や状況が作用して彼の目的を失敗へと追いやったが、新たにその過程を再現して、どこに敗北の原因があったのかを探りつつ軌道修正を可能にする反省行為は、彼を真の目的地へと導くであろう。たとえ成功しなくとも、彼の行使する想像力は惨敗の淵へと彼を突き落とすことはなく、彼はまさに物語の主人公として栄光の座へと突き進むのである。

そして、彼の想像力は過去の過ちに対し「謝罪」しなければならないことを知っている。この失敗への理由付けが想像力の技巧と熱意を盛り上げていき、彼に再び過去の轍を踏まないようにというゲームにも似た快樂へと誘うのである。マルセル・リュフはボードレール論の中で、「支払い期日が間近にせまっていようとも、後悔という最後の宿舎に避難するだけの時間は残されている⁽⁸⁾」というように、間違いに気付いた時点での後悔について述べているけれども、物事が決着した後であろうとも、ボードレールの「後悔」には再挑戦としての時間が与えられる。しかも、謝罪の気持ちが消滅することはないであろう。謝罪があるところ、そこには必ずやその過失に対する理由付けが為されねばならない。たとえそ

れが自分自身の過失に対する糾問であろうとも、失敗を問う以上はその原因が正しく説明されねばならない。このとき自己反省する者はそれがたとえ言い逃れであろうと、当時の状況を詳細に追跡しようとして想像力を奮起させることになり、理由付けの正当性を追って彼は探偵の立場へと自らを置き、享樂を獲得することになるのである。

ここで、後悔が快樂に変わるのは詩人がアシーシュを服用し、この幻覚作用により不都合な出来事さえもが意志の薄弱のもとで壮快な気分をもたらすのではないか、という疑念が生じるかもしれない。当然、こうした薬物の幻覚による精神の高揚感はあるであろう。ボードレル自身この薬物論の中で、アシーシュが詭弁を使って人を楽天主義へと導くことを述べた後で、その重大な原因として、それが「欲望を現実に移し変えてしまう」⁽⁹⁾からだと論じた。欲望が現実として映るということは、欲望の未だ結果へと到っていない状態が時間の全てだと思い込んでしまうことを意味する。ここには当然、結末が生じず、失敗のない状態が続くことになる。⁽¹⁰⁾ただしボードレル自身はこの直後で、アシーシュの場合この楽天主義が強く働くが、日常生活においても同様のことが起こりうることを記している。

後悔とはすでに結果が表明されたことに対して反省を行うのであるから、その失敗に対する理由付けを逆算して再構成を行うとしても、人は一旦結果を保留にして、まるでそれが生じなかったかのように想像力を働かすことができる。結果の変更が不可能なものである以上、また不可能であればこそ、薬物の幻覚による想像途中において、それに知らぬ振りをして忘却の淵へ放置しておくことは可能だろう。ボードレルは結果へと到達することのない夢想、つまり実行に移されることのない計画を称揚した。散文詩「計画」で、彼は散歩の途中住んでみたいと思う三つの場所を順次思い描いていく話を語る。最初は大理石の宮殿、そして海辺の静養できる家、最後に目の前にあって笑い声の聞こえるホテルへと

至り、ここにこそ幸福があると判断する。こうして夢想の描きだす住居はどれも素晴らしいが、結局、「計画とはそれ自体十分満たされた享樂である以上、その計画を実行してみたところで何になろう⁽¹¹⁾」と述べて、計画を夢想することの享樂こそが一番の幸福であると結論づける。そうすると、失敗の結果を保留して後悔の夢想に浸ることと、計画を立てながら実行へと移すことなく思案をめぐらすこととで、どれだけの相違があることになるであろうか。両者とも現実生活における決着を避けて、夢想の世界こそが快樂の館であることを主張している。従って、ボードレールにおいて後悔とは、悔い改める必要を持たぬ計画として悅樂の世界を獲得するのである⁽¹²⁾。

後悔がボードレールにおいてどんな場合にも実行されなくても構わない「計画」であるなら、これ以上の幸福をこの詩人は望まないであろう。しかしながら、後悔が単に夢想に留まっている時間はそれほど長くはない。アシーシュヤや阿片により幻覚に浸っている間は快樂としてそれも許されるが、翌日には迷妄と化し、肉体は虚脱感に捕らわれて、興奮剤を使用したこと自体が激しい後悔を詩人に引き起こすことになる。この興奮剤によらない場合、ボードレールの後悔は悅樂の表情を垣間見せることがあるとしても、より複雑な陰影を帯びることになる。

死すべき者たちの卑しい群れが、
あの情け知らずの刑吏、「快樂」の鞭のもと、
卑屈な酒盛りに悔恨を捕えようとする間に、
わが「苦惱」よ、手を差し出してこちらへ来るがよい、(第二連)

あの者たちから遠くへ。過ぎ去った「年月」が天の露台に、
古ぼけた衣服で屈み込んでいるのを見るがよい、
微笑み浮かべた「後悔」が水底より浮かび上がるのを。⁽¹³⁾ (第三連)

「内省」と題した詩の第二連と第三連である。これは『悪の華』の再版が一八六一年の二月に刊行されたあと雑誌「欧州評論」に発表されたもので、詩人にとっては晩年に近い方の作品であり、四十年間の「年月」が盛り込まれていると見なすことができる。まず第二連、この詩句はやや複雑なので注意して読む必要がある。「快樂」と「悔恨 remords」の関係が表現されていて、死すべき者である人間は酒盛りの「快樂」において「悔恨を捕えようとする」と言う。この「捕える」と訳した動詞 cueillir は、一般的に花などを摘むという意味で幸福などを手に入れるという好条件に用いると同時に、悪事に対しては話し言葉ではあるが、「盗人などを捕える」という意味も含んでいる。ここではこの後の意味に解釈するのが、「わが苦悩」との対比において順当であると考えられる。卑しい人間は快樂によって悔恨を捕え忘れてしまおうとするのに対し、詩人であるボードレーは「わが苦悩」を引き寄せて手放さないと主張するのである。

第三連に移ると、苦悩を捨てきれない詩人は、彼の人生四十年の「水底」より「微笑み浮かべた後悔 Regret souriant」が出現してくると言う。他人と同様、快樂のもとで後悔など捨ててしまえばよいものを、ボードレーはこれを慈しんで「微笑み浮かべた」という皮肉を加えながら彼の苦悩を賞味する。この二連の中で皮肉の棘が置かれているのは、詩人自身の側だけでなく卑しい人間たちも同様である。それは「あの情け知らずの刑吏、快樂の鞭のもと」という一行で、悔恨を忘れるための快樂も決して安穩としたものではなかった。人間が「悔恨」を払拭するためには、「鞭」の吠え立てる下を通らなければならなかったのである。ボードレーは悔恨を忘れることが一見簡単そうで、実際のところ詩人自身にとってそれを放棄することが不可能なように、他の人間にとっても完全に捨て去るには困難が伴うことを暗示している。

引用した二連の中で同義語に当たる単語「悔恨 remords」と「後悔」

Regret が使用されているが、ジョルジュ・ブランは別の詩の説明の中でこの二語を使い分けた。「悔恨は私を現在に閉じ込め、私の罪を残酷にも追体験させ、過去を消滅させようとする。そして、その過去とは悲哀に満ちた喜びのために、後悔が復活させているものなのである⁽¹⁴⁾」。ブランによれば、悔恨とは過去を「追体験」させるものであるのに対し、後悔とは過去を「復活」させる、つまり想起するためにあることになる。引用の直前では後悔が「不可逆的なものの報告」であると述べて、過去の事実を有りのままに再現するものとして捉えている。ただここでは、悔恨とは詩人によって何度となく反復された後悔である、という程度の意味に理解しておけば十分であろう。そうすると、後悔が待望されたものであるという当面の主題に戻って考えるなら、「微笑み浮かべた後悔」が果たして待望された喜びとして機能しているであろうか。また同様に「快樂の鞭」によって捕えられる悔恨が、この鞭を奪取して危害なき快樂を取り戻すことが可能であろうか。アシーシュの興奮剤により幻覚に浸っている間は、後悔の対象となる過失がその幻覚の起爆剤として働いた。しかし今、過去の出来事が「古ぼけた衣服」を着込んでいる状態で、後悔が目にするものは「微笑み」が作りだす弱々しい喜びに他ならない。それは水面下の大きな苦渋の上に浮上した、かすかな安堵にしか過ぎないのである。

卑しい者の「悔恨」であれ詩人の苦悩をまとった「後悔」であれ、それはすでに敗北を知った者の復活を狙った挑戦であることに変わりはない。ボードレルはこの「内省」の詩の第四連で「瀕死の太陽」を登場させているが、太陽なら夕陽となってやがて西の端に死を迎えるとしても、その死は再生が約束された「眠り」の状態に入ったことを意味する。どんなにその末期が苦しみの血を流そうとも、昼間の豊穡へと郷愁を誘う太陽であることを放棄したりはしないのである。太陽が再生としての眠りに入るとすれば、夜の闇の中に残された詩人は後悔によって過去の

失敗をあがなえるであろうか。それは恐らくこの詩人の資質にかかっていて、「夕べの薄明」が「焦心の男は野の獣へと姿を変える⁽¹⁵⁾」と歌うように、犯罪者や野獣となって夜中に活躍の場を求められるなら可能であろう。しかしながら、後悔のもたらす「微笑み」がこのような野生の生命力を詩人に喚起することは稀でしかない。

ボードレールは悔恨を『悪の華』の中で何度も歌っている。挨拶代わりに詩集の最初に置かれた「読者に」の詩では、すでに第一連で「いとしい悔恨」aimables remords を我々人間は養っていると告げる。過失や敗北に無縁な人間は存在しない以上、過去を修復するための「悔恨」は詩人一人に限らず万人にとって必要なものとなる。これが万人のものとなれば悔恨を深刻に考える必要もなく、日常の必需品であれば「いとしい」ものであるのも当然となろう。しかし、これは過去の責任を忘却へと放置した言葉であって、それを償おうとすると苦渋が湧き上がってくる。

長くて古い「悔恨」を押殺することができようか、
それは生き、這いずり回り、のたうつ、
死人に群がる蛆虫か、柏の葉を食う毛虫なのか、
私たちが餌食にして生きのびる、
執念深い「悔恨」を押殺することができようか？⁽¹⁶⁾

これは「取り返し得ぬ」という抽象的な題をもつ詩の第一連である。一八五五年の雑誌発表の時には「金色の髪の美女に」という題であったことから、マリー・ドブランが主役を演じた同名の劇から着想を得て創作されている。十連五十行からなるこの詩の最後で劇場で恋人を待つ場面が歌われることになるし、また王女に恋する魔法使いが過去の罪ゆえに愛を告白できない苦悩が、ボードレールの悔恨と結びついている。しかし、引用した第一連からはこうした物語を知らなくとも、詩人の悔

恨に対する苦渋は蛆虫や毛虫の「這いずり回り、のたうつ」という比喻からよく伝わってくる。悔恨とは過去においてすでに決着のつてしまった敗北に対する追想なのであるから、これを成功物語へと台本を書き換えることは容易には許されない。もし仮に相手に謝罪が受け入れられたなら悔恨の出番はなくなるのだから、悔恨とは失意の淵を永久に歩むことになる訳である。それは詩人も言う通り「執念深く」て、過去の事件に人が関心を寄せる限り、消滅させることは不可能なのである。まさしく悔恨とはその対象とするものを「取り返し得ぬ」ものとしてこそ、成立する想念に違いない。もしこの条件を詩人が望まないならば、「死」をもって応えるしか方法はないであろう。「時計」の詩はこう判決を下した。

「悔恨」さえもが、（ああ、これが最後の宿！）

口を合わせて言うだろう、死ね、臆病な老いぼれめ！ 遅すぎる
のだ！⁽¹⁷⁾

もう一つ、ボードレールにおける悔恨の様態を見てみよう。『悪の華』刊行時に風俗壊乱の罪で削除を命じられた六篇のうちの一つ、「忘却の河」の第三連である。

私は眠りたい、生きるよりもむしろ眠りたい！

死のように穏やかな眠りの世界で、

悔いのない口づけを注いでいたい、

銅のようになめらかなお前の美しい体に。⁽¹⁸⁾

「悔いのない口づけを注いでいたい」と詩人は歌う。悔恨を否定するにしる、それ自体を想定する気持ちには、当然それを誘発するだけの過

去の苦い経験があったことを意味している。それは引用の直前で語られるように「過ぎ去った恋」*amour défunt* に他ならないが、一体詩人は恋人との愛を忘れてしまいたいと思っているのか、それとももう一度再燃させたいと願っているのか、そこが微妙なのである。引用連においても彼は死のような眠りに逃避したいと言いつつ、恋人の体に触れる願望を隠そうとしない。一体、破綻した恋に「悔恨」なしで向き合うことが可能なのであろうか。可能なら未練を残さなければよいが、それがあの上、悔恨は生き残って「無実」*innocent* の罪に懊悩することになる。ボードレールは詩句の中で「何々なしに」という表現をしばしば用いる。例えば「寓意」の詩では、「彼女は『死』を真正面から見つめることだろう、／まるで赤ん坊のように——怨みもなければ悔いもなく⁽¹⁹⁾」と歌う。これなどは悔恨の念を抱かないでいたいという願望を告げているだけで、実のところ悔恨は詩人に絶え間なく襲ってくるのだし、死の恐怖は消滅しない。不幸に終わった恋なら、苦い口づけしか許されない。「悔いがない」とはボードレールにおいて、悔恨に取り付かれていることへの反照として置かれた裏返しの欲望なのである。

三

ボードレールの悔恨、それは一日の太陽が見せる変化に似て多様な側面を見せる。昼間の陽気と古代の勇壮をもつ太陽に対して郷愁を抱き、それへの欲望と悔恨に分解していく心情、夕陽の真紅に彩る饗宴と夜の闇への不安、朝日が告げる労働の憂鬱、曇り空の凍り付くような太陽の無情、こうしたものが詩人の悔恨をも形成していたのである。そして、悔恨が一方的な劣性に常に甘んじている訳ではなく、ボードレールはアシージュによる薬物の力を借りて幻覚に浸り、悔恨が生み出す夢想の中

に快楽を見出しこれを賞讃した。過去の結果はそれを追想することにおいて忘却され、実行されない計画にも似て、理想を追求する夢想の時間こそが詩人の至福を保証した。しかし、悔恨とはすでに結果の表明されてしまった不可逆なるものへの反省であって、敗北の苦悩から脱却することは叶わない。詩人に祈願可能なこととして残されているのは、悔いのない愛と死を遠望してみることなのである。

このように悔恨が作りだす理想への追慕とその挫折の失意にあって、ボードレールが描き出す詩的世界とは迷宮と呼べるのではないだろうか。人間は誰でも挑戦と苦杯の中で生きている。この敗北に対して理由付けの反省をし、それを忘却に流して新たな目標へと転換できるなら、その者は恐らくボードレールの気質とは反対の方向において人生を歩むことができよう。ところが、ボードレールとは現在の時点を闊歩して進む詩人ではあり得ず、過去の思うに任せなかった苦い経験を何度も反芻して後悔に浸る者である。すでに失敗へと帰した事件に対し、それを元へ戻そうとする試みはボードレールの想像力に強烈なモチベーションを用意するであろうが、一方、夢想の劇の上演される時間は限られていて、彼は憂鬱な日常へと舞い戻る。野望と失墜、哀惜と憎悪の間で彼は焦燥に駆り立てられ、その困惑した感情は迷宮の術策へとハマっていく。

ボードレールに進路の見出せない迷宮を進むための指針があるとすれば、それは彼の皮肉の精神であろう。皮肉は詩人にとってその時々の場合において、彼の詩という武器庫の中から自由に使用可能な道具となる。それは単に自由というに留まらず、彼が敵対するものに対し自分の側には所有していて攻撃可能であるのに、相手には決して渡ることのあり得ない武器なのである。詩人は「内省」の詩で卑しい者が悔恨を「快楽の鞭」のもとに退治すると言い、返す刀で「微笑み浮かべた後悔」と皮肉を投げつけた。こうした皮肉の不条理は、詩人の哀惜と憎悪という矛盾に満ちた迷宮世界と連鎖し釣合を確保している。ウラディミール・ジャ

ンケレヴィッチは『イロニーの精神』の中で、「イロニーとは錯誤の多産性であり、イロニーとは摂理の矛盾、失敗の目的論、それに運命の気紛れな一致である⁽²⁾」と述べた。ボードレールの愛好する皮肉がジャンケレヴィッチの言うように「失敗の目的論」を含んでいるとすれば、この失敗からの挑戦とはまた詩人の悔恨にこそ相応しいものであろう。ボードレールとは、悔恨の迷宮を皮肉の刀を手にして前進する者なのである。

忍び語り

あなたは美しい秋の空、明るく薔薇色をして！
 だが私の中に悲しみは海のように満ち、
 そして潮が引けば、私の憂鬱な唇には
 苦い泥土の焼けつくような思い出が残る。

——君の手が息あえぐ私の胸の上を虚しく滑る、
 それの探るものは、恋人よ、女の爪と
 残酷な歯によって荒らされてしまった土地。
 もう私の心を探してはいけない、獣が食べてしまったのだ。

私の心は暴徒に破壊された宮殿、
 奴らはここで酔いつぶれ、殺し合い、髪をつかみ合う！
 ——一つの香りがあなたのあらわな胸のあたりに漂って！——

おお「美しき人」、魂を無情にも打ちつける鞭、君が望むのだ！
 祭りの時のように輝き放つ君の焰の目でもって、
 獣の食い散らした残骸を焼きつくしてもらいたい！

CAUSERIE

Vous êtes un beau ciel d'automne, clair et rose !
 Mais la tristesse en moi monte comme la mer,
 Et laisse, en refluant, sur ma lèvre morose
 Le souvenir cuisant de son limon amer.

— Ta main se glisse en vain sur mon sein qui se pâme;
 Ce qu'elle cherche, amie, est un lieu saccagé
 Par la griffe et la dent féroce de la femme.
 Ne cherchez plus mon cœur; les bêtes l'ont mangé.

Mon cœur est un palais flétri par la cohue;
 On s'y soûle, on s'y tue, on s'y prend aux cheveux !
 — Un parfum nage autour de votre gorge nue ! ...

Ô Beauté, dur fléau des âmes, tu le veux !
 Avec tes yeux de feu, brillants comme des fêtes,
 Calcine ces lambeaux qu'ont épargnés les bêtes !⁽²¹⁾

この「忍び語り」は、先に引用した「取り返し得ぬ」の詩が『金髪の美女』を演じた女優のマリー・ドーブランを歌っていたのと同様、彼女との恋愛を語っている。詩の配置もこの二篇は連続して並べられているが、「忍び語り」はマリーの演じる劇作品とは関係なく、もっぱら彼女と詩人との情愛を会話体風に歌い上げている。しかし、この詩が恋人同士の親密な様子を描写しているかといえば、読んですぐさま分かるように、美しい女性の姿態は第一行目を終えると急転直下して、ラスト

シーンから始まるドラマのように、読者は経過を一切知らされずに迷宮の中へと放り込まれるのである。詩の初句は言う、「あなたは美しい秋の空、明るく薔薇色をして！」と。これだけを読めば、上演劇のポスターに書き込まれた心躍るようなフレーズに魅せられて、芝居小屋への入場券を買ってしまうことになる。ところが、そこは劇場の室内というよりも映画館のように暗くて、目がその暗室に順応するためにはしばらく時間を要するであろう。「秋の空」の明るい野外から「悲しみ」の室内へ入れば、そこには迷宮が拡がっている。

二行目以下は、恋人との「苦い泥土の焼けつくような思い出」が支配する世界へと転換する。思い出が幸福に見放された「苦い」ものである以上、それは悔恨として詩人に復活する。彼は恋人との過去の成り行きを想起してみるだろう。恋人の「手」が詩人の胸に置かれる。しかし、その男の胸は「女」という獣の「爪と歯」によって食い荒らされてしまったものなのだ。しかも、肉体だけでなく詩人の「心」までが破壊されてしまったと嘆く。ここでは殺人行為までもが起きたというのに、再び舞台は恋人との現実世界へ戻って表面的な宥和を告げる。男の胸は女の凶器によって傷つけられたのに対し、女性の胸には欲望を誘う「香り」が振りまかれている。詩人である男は悲痛を深くするばかりであるのに、恋人の女性は陽気で誘惑的である。しかし、男の悲痛がもたらされるのは女性が所持する爪や歯の凶器によってであり、この女性の示す二重性が詩人を快樂と苦痛の混成した迷宮へといざなう。ここから脱出するための方策は恋人の「焰の目」でもって傷ついた体を「焼きつくして」もらい、皮肉にも詩人を蘇生させることだけであろうか。

この詩は幾つかの対比から構成されている。美しい秋の空と破壊された宮殿、憂鬱な唇とあらわな胸、香りと鞭、美しい人と苦い泥土、過去の思い出と現在の愛欲というように、詩人である男性と恋人である女性との逐一なる対照である。それに、女性自身も「あなた」vousと「君」

tu に親密感を二分する。こうした中でも対比された肉体は、詩が歌っている食い荒らされた「残骸」のように散乱している。男の肉体では唇、胸、心、女では手、爪、歯、胸、目というように出現してくるが、こうした人体の切断された断片がボードレールのバロック的な傾向を覗かせている。詩人が女性の肉体を求めるといった一般的立場とは逆転して、恋人の爪や歯によって攻撃を受けるという状況は、詩人の情愛をどこへ向けたらよいか分からなくさせるような不安感を与えるのである。

この「忍び語り」と同じように、女性の肉体が断片的に歌われる詩に「美しい船」がある。ここでは首、肩、頭、乳房、乳首、足、腕などを登場させて、愛する恋人の美しさを強調していく。しかも、こうした女性の肉体を一つに統括する象徴として、沖合に出航する「美しい船」⁽²⁾ un beau vaisseau を描き出している。この詩においては女性の肉体の部分と美しい船との間に断絶感がなく、幸福な恋愛感情が披露される。しかしながら「忍び語り」では、詩人の悔恨の中で恋人が見かけの「美しい秋の空」であると共に「魂を打ちつける鞭」であるなら、彼の逃れるべき「宮殿」はどこまで進んでも全体を表すことのない断片ばかりの迷宮へと変貌する。悔恨とはそもそも過去の失敗に対する修復の不可能性からの再構築である以上、その不可能性の中であって終わることなき反省の苦渋として企てられる。この不可能性の囲いを除去し得ない限り、悔恨は迷宮の中を奔走し懊悩するのである。

ボードレールの韻文詩で、牢獄に幽閉された詩人を歌った「『牢獄のタッソー』に寄せて」という作品がある。これは画家のウージェーヌ・ドラクロワが一八四三年の美術展に出品した「気違い病院におけるタッソー」⁽³⁾の絵を元にして創作したもので、ボードレールの原稿は一八四四年に完成していた。しかし、これは活字にならず、結局一八六四年に改稿されて雑誌に載り、一八六六年の『漂着物』に編入された。また、タッソーというのは一五四四年に生誕し九五年に没したイタリアの詩人で、

フェラーラ公の宮廷に仕えたが、公の姉妹に恋をしたのを咎められ狂気に陥ると、その後七年間投獄された人物である。それでは、詩の第二連を読んでみるとしよう。

心酔わせる笑い声が牢獄にこだまして、
 怪奇へ、不条理へと詩人の理性を手招く。
 「疑い」が彼を取り囲み、馬鹿げた「恐怖」が、
 忌まわしく千変万化し、彼の横を走り回る。⁽²⁴⁾

この一連分からだけでも分かるように、ボードレールは十六世紀の詩人タッソーが「牢獄」に幽閉されている場面を直接的に描いている。彼は狂気に陥り精神病院に入れられたあと、牢獄へと移された。恐らく彼は自分がこのような境遇に置かれることになった理由を考えているのであろうが、その解答は彼に納得のいくものとしては得られず、「疑い」という悔恨にさいなまれる日々が続くのみである。しかし、ここでタッソーが狂気に陥ることになった実際の原因と、ボードレールが描いている状況では多少の食い違いが生じている。ボードレールは、タッソーがフェラーラ公の姉妹に恋をして罰せられた経緯を何ら語ってはいない。詩では第一連において、タッソーが足元の「原稿」を踏みつけている状況から、彼が詩作の苦悩に捕えられていることは分かる。タッソーの詩作の内容が許されぬ恋を描こうとしていることは彼の史実から推測できるとはいえ、ボードレールはこれには言及せず、タッソーが創作をする人間、つまり詩人として人生の不条理を言葉にして表現しなければならぬ苦渋を語ろうとしている。

小説『ラ・ファンファルロ』の中で、ボードレールはコスメリ夫人に詩人の恋愛観をこんな風に語らせている。「創作をなさる方たちの悲しみや恋心といえますのは、他の一般の男の方たちの悲しみや恋心とはあ

まり似ていないように思えますの⁽²⁵⁾」。詩人の恋愛が一般男性のものとは相違する点があるとすれば、それは必ずしも許されぬ身分違いの恋をするということではないだろう。詩人が恋愛観を異にするのは、彼が作品にそれを語ろうとするときに起こる。道ならぬ恋は実際の事件として生じる。ところが、創作はその恋愛事件を人間の道理に適った情愛とするのか、社会慣習に照らして不道德とするのか、改めて判断を詩人に強いる。詩人がその恋愛の当事者であるなら尚のこと、彼は自身の行為に決着をせまられ、創作苦の地獄へと追いやられる。しかし、ボードレールは詩の中でタッソーの具体的な苦悩を語らずに、詩人として創作することが彼を「疑いと恐怖」の迷宮へと招いていることを強調するのである。

『『牢獄のタッソー』に寄せて』の詩は先に記したように、後の決定稿では書き改められている。その一番重大な変更は第四連にある。まず、一八四四年の原稿。

つねに闘い寝ずの番をする屈強な詩人は、

「可能性」が四面の壁に閉じこめた
未来の夢、一つの魂の象徴なのだ！⁽²⁶⁾

続いて、一八六四年の「新評論」に載った決定稿。

おのれの住居の恐ろしさに目を醒ます夢想家、
これぞお前の象徴となる姿、陰鬱なる思いの「魂」よ、
「現実」が四面の壁に息詰まらせる「魂」！⁽²⁷⁾

最初の原稿による詩句では、「可能性」le Possible が詩人の夢を牢の壁に閉じこめると歌うことにより、幽閉されているタッソーが詩の創作に意欲を失わず思案を重ねるといった希望的状況が語られる。詩人とは創作

の可能性であり、未来の詩句の母体なのである。ところが後の決定稿になると、そこにはボードレール自身の二〇年の歳月からくる労苦が積み重なったためか、「現実」がタッソーという詩人を牢獄に幽閉しているという現状を語るに留まる。創作への可能性は散失し、彼は四面の壁が作りだす孤立の中にうずくまってしまうのである。彼は「現実」le Réelという言葉が示している状況、つまり牢獄にいて無抵抗であるという悲観的状況を、この言葉を使用することによってすでに容認していると受け取れる。だから、もしボードレールが、タッソーが恋愛事件の罪により狂気を発症し、投獄されたにもかかわらず詩作に情熱を失わない気力を歌いたいのであれば、最初の原稿に書かれた詩句が輝かせている「可能性」の文字を放棄すべきではなかっただろう。ボードレールは第二連で狂人が見せる抵抗心を「心酔わせる笑い声」というように表現し、笑い声のもつ現実否定の精神を「心酔させる」という皮肉を込めて賞讃したのではないか。「可能性」があつてこそ、詩人が幽閉された迷宮の中で詩的精神が高まるという価値が生まれる。迷宮には信仰に確信を持ってない人物に対し、幾重にも取り巻いた輪の中を通して人間の個我を超越した世界へと導くという本来的な目的があつた。ジャック・アタリはその迷宮論の中で脅威としての迷宮を挙げたあと、「道の果てに苦悩への報酬として与えられる約束の地⁽²⁾」があると書いた。「約束の地」を求めるとはボードレールの場合、牢獄の迷宮の中で詩句の「可能性」を追求することに他ならないのである。

ここでもう一度、「忍び語り」の詩に戻ってみたい。詩の中で狂気に陥り投獄されている十六世紀の詩人タッソーを歌う場合と、ボードレール自身の恋の痛手を悔恨するという「忍び語り」とで、どちらがその迷宮的な謎の世界に深く進入しているであろうか。勿論、許されぬ恋を罰せられたタッソーの方が肉体的にも精神的にも苦痛は大きかったであろう。しかし、これを表現芸術としての詩の観点から捉えてみると、ボー

ドレール自身の恋愛を歌った詩ではすでに考察したように、匂やかで美しい秋の空と、爪と歯とをむき出して鞭をふるう恋人とのかけ離れたイメージが、悔恨の振幅をより大きくして迷宮の錯綜感を強めている。恋人の女性を「美しい秋の空」と称えた第一行は、迷宮への誘惑として置かれた畏に過ぎないことが読み取れるのである。そして、断片的に置かれた女性の肉体の各部は、迷宮の遮断された空間の中で行き当たりばつたり遭遇する目印であり、第三連でグッシュを入れて挿入された「香りの漂うあらわな胸」とは、悔恨の追慕の中からふと垣間見ることのできた現在の確認なのである。悔恨は過去の時間へ入り込んで、恋の物語を再構築するのに余念なく思案している。しかし、悔恨の迷宮は詩人を全く身動きの取れない袋小路へと追い込んでしまうのではなく、時に現在時における外部の様子を詩人に垣間見せて警戒心をそぎながら、迷宮の深みへと誘導することを忘れないのである。

悔恨に対してこれを取り返し得ぬもの、償い得ぬものとして苦悩の淵へと陥っていくボードレールがいるかと思えば、反対に悔恨を想像力の活力源としてこれを愛好する詩人がいる。髪をつかみ合って憎しみ合うかと思えば、他方で女性の香気に安堵を見出すのである。ジャン・プレヴォーは愛情と憎悪の対比がボードレールに詩のインスピレーションを喚起していると言い、「愛した人を憎むというのはかなり一般的なことである」⁽²³⁾と述べて、ミュッセの場合を挙げた。しかし、この愛憎の併存が他の文学者に見られるとしても、ボードレールの場合にはこれだけに終わるものではなく、更に愛の迷宮を生き抜くために行く手を照らす手段として皮肉が用意される。「忍び語り」の第四連は、恋人の「焔の目でもって獣の食い散らした残骸を焼きつくしてもらいたい」と歌う。この場合、「獣」とは当の女性なのであるから、詩人は苦しめられたはずの恋人に更に彼の全存在を消滅させて欲しいと願うことになる。しかも、女性の「焔の目」で焼いて欲しいという焼尽に対する皮肉の言葉は、な

おも恋の焰で燃え上がりたいとする詩人の尽きることなき悔恨の念を語って止まないものである。ボードレールとは、悔恨という迷宮の誘惑に取り付かれた詩人である。

注

ボードレール作品からのフランス語引用は、すべてクロード・ピシヨワ編、プレイヤード版『ボードレール全集』及び同『ボードレール書簡集』に拠っている。また日本語訳に関しては、既訳のあるものは参照するに留め、すべて筆者自身の訳を当てた。なお、プレイヤード版によるボードレール作品の出典を以下のように略記する。

OC, I, II: Baudelaire, *Œuvres complètes*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 1975, t. II, 1976.

CPI, I, II: Baudelaire, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois avec la collaboration de Jean Ziegler, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, II, 1973.

- (1) *Harmonie du soir*, *OC*, I, p. 47.

なお、宇佐美育は『悪の華』の初版、第二版、第三版及び『漂着物』に

収められた全詩「一六一篇中三二篇に落日ないし夕暮れへの言及が見られ、その割合はほぼ二〇パーセントである」と、落日論の中で述べている。

「落日——あるいはデカダンスの詩学」、多田道太郎編、『ボードレール詩の冥府』、筑摩書房、一九八八年、二六七頁。

- (2) (*V J'aime le souvenir ...*), *OC*, I, p. 11.
- (3) *Salon de 1859*, *OC*, II, p. 650.
- (4) *La Chambre double*, *Le Spleen de Paris*, *OC*, I, p. 280.
- (5) 宇佐美斉、「落日——あるいはデカダンスの詩学」、『ボードレール詩の冥府』、三一―一頁。
- (6) Jean-Pierre Richard, *Poésie et profondeur*, Seuil, col. Points, 1955, p. 142.
- (7) *Les Paradis artificiels*, *OC*, I, p. 434.
- (8) Marcel A. Ruff, *L'Esprit du mal et l'esthétique baudelairienne*, Slatkine Reprints, Genève, 1972, p. 340.
- (9) *Les Paradis artificiels*, *OC*, I, p. 432.
- (10) ボードレールは韻文詩「毒」において、アシーシュと同じ薬物、阿片の悦楽について歌っている。
阿片は境界なきものを更に広げ、／ 無限のものを引き延ばす、
時間を深め、悦楽を掘り進む、／ 黒く陰鬱な快楽で
魂をその器以上に溢れさす。 Le Poison, *OC*, I, p. 49.
- (11) *Les Projets*, *OC*, I, p. 315.
- (12) ただし、計画が日常生活の義務である場合、これを実行に移さないことは相応の苦痛と損害を受けることになる。「すべての義務を翌日へと遅らせることは、どんな人間にとっても恐ろしい悪徳です」と、書簡は訴えている。
Lettre du 11 [mai] 1862 à Madame Alphonse Baudelaire, *CPI*, II, p. 242.
- (13) *Recueillement*, *OC*, I, p. 141.
- (14) Georges Blin, *Baudelaire*, Gallimard, 1939, p. 41.
- (15) *Le Crépuscule du soir*, *OC*, I, p. 94.
- (16) *L'Irréparable*, *OC*, I, p. 54.
- (17) *L'Horloge*, *OC*, I, p. 81.
- (18) *Le Léthé*, *OC*, I, p. 156.
- (19) *Allégorie*, *OC*, I, p. 116.
- (20) Vladimir Jankélévitch, *L'Ironie*, Flammarion, col. Champs, 1964, p. 162.
- (21) *Causerie*, *OC*, I, p. 56.
- (22) ひろがるスカートを風になびかせて進むとき、

君は沖合へと向かう美しい船のよう、

帆高く掲げては方々へと進む

うっとりとももの憂げに緩やかな速さで。 Le Beau navire, *OC*, I, p. 52.

- (23) ドラクロワの絵には詩人タッソーを描いたものがもう一枚あり、それは「フェラーラの聖アンナ病院におけるタッソー」（一八二四年出品）と題されたが、一八五五年の万国博覧会では「牢獄のタッソー」と改題された。
- (24) Sur Le Tasse en prison d'Eugène Delacroix, *OC*, I, p. 168.
- (25) *La Fanfarlo*, *OC*, I, p. 559.
- (26) *OC*, I, p. 1151. この一八四四年の作品は詩題が付いていない。
- (27) Sur Le Tasse en prison d'Eugène Delacroix, *OC*, I, p. 169.
- (28) Jacques Attali, *Chemins du sagesse, Traité du labyrinthe*, Fayard, Le Livre de Poche, 1996, p. 18.
- (29) Jean Prévost, *Baudelaire, Essai sur la création et l'inspiration poétiques*, Mercure de France, 1964, p. 213.

ディケンズ作品における父と息子

近 藤 浩

作品について述べる前に、チャールズ・ディケンズと父ジョンの關係に触れておきたい。ディケンズは1812年に、イギリス海峡に臨む港町ポーツマスで誕生した。一家は1815年にロンドンに引越し、1817年にはケント州のメドウェイ川河口の町チャタムに移った。それ以後、ディケンズは9歳までその町に住み、そこで終生忘れることのない幸せな時期を過ごした。陽気な父親は彼の良い遊び相手になってくれたし、牧師の経営する寺子屋のような学校へ彼を通わせもした。この頃に生涯続く父親への愛情の土台が出来上がるのである。ここで次の資料を見ておきたい。ディケンズは、友人ジョン・フォースターに、父親の性格について、次のように説明している。

「私の知る父は無類の親切心と寛大さを持った人です。病気になったり悩んだりしている妻や子供たちや友人たちに対する父の振る舞いは、どれを思い出してみても賞賛しつくせないほど立派なものなのです。私が子供の頃病気になると、父は何日間でも、疲れを知らず忍耐強く、昼も夜も、傍らにいて看病してくれるのです。父は仕事でも責任でも義務でも引き受ければ必ず熱心に、良心的に、期限を守って、立派に果たしました。父の勤勉さは常に疲れを知らぬものでした。」(Forster,

I, 13)

しかし、こうした父親への思いに傷をつける事態が生じてくる。父ジョンは海軍経理局に勤め、それなりの収入はあったのだが、経済観念がしっかりしていなかった。そのため家計が次第に苦しくなり、1822年に再びロンドンに転居してからは、借金の重みが一家を圧迫するようになる。生活に追われて、父親はディケンズを学校へ通わせてやることさえ忘れてしまい、当の息子はほったらかしにされているという気持ちを強く感じるようになる。そして1824年に、家計の事情により、12歳のディケンズはウォレン靴墨工場へ働きに出されてしまうのである。この出来事は彼にとって中流階級から労働階級への転落を意味し、向上心あふれるこの少年は屈辱と将来に対する絶望感を味わうことになる。また同じ1824年には、父親が破産してマーシャルシー債務者監獄へ投獄されるという事件が起きる。父親が囚人になったという事実が、ディケンズにとって、計り知れないほどの恥辱となったことは疑いない。彼はこの頃の体験を、1847年にフォスターに打ち明けるまで、自分の妻にさえ話さず、自分の胸の中にだけ閉じ込めておくことになるのである。

父親は約3ヶ月後に監獄から釈放されるが、息子の靴墨工場勤めは、もうしばらく続く。ディケンズは、父親が工場を訪れたとき、あくせく働く子供の姿を見てよくも平気でいられるものだと思ったそうである(Forster, I, 32)。その後、父親は彼に仕事を辞めさせ、ウェリントン・ハウス・アカデミーという私立の学校へ通わせるが、この後も父親と息子の関係は順風満帆とはならない。ディケンズは1827年に学校を離れ、弁護士事務所で働きながら、新聞記者になるべく速記を勉強する。この速記術は『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50)の中の記述によれば、「難しさの点では6ヶ国語を習得するにも等しい」(DC, 527) とのことであるが、ディケンズは独学でマスターする。そし

て1828年に民法博士会の速記者、1832年には議会報道紙『ミラー・オヴ・パラメント』と夕刊紙『トゥルー・サン』の議会報道記者になり、猛烈な仕事ぶりを見せる。そして1833年に小品が『マンズリー・マガジン』に掲載され、作家として第一歩を踏み出すことになるのである。しかし、ディケンズが『モーニング・クロニクル』という新聞の記者になった1834年に、父ジョンがまたしても負債のために拘束され、債務者監獄へ送られる一つ前の段階である債務者拘留所に送られてしまう。この時のディケンズの気持ちは察してあまりある。人生これからというときに、少年時代の屈辱感を蒸し返されたような気持ちがしたであろうし、父親が再び監獄の囚人となれば、自分の経歴に大きな影響があるはずである。彼は急いで父親にお金を渡し、そのすぐ後に、家族と離れ、ファーニヴァルズ・インと呼ばれる所に住まいを移す。父親と距離をおきたいという気持ちが、彼にはあったことであろう。彼は1836年に作家一本で生きていく決心をし、着々と地歩を固めていくが、父親は経済面の足かせとなり続ける。1839年にディケンズは、父親からの金銭の要求や彼の借金癖に我慢ならず、両親をロンドンから離れたデボン州のアルフィントンに移す。そして、ピーター・アクロイド著の伝記によれば、ディケンズは父親に、ロンドンに戻らないという条件で、4半期ごとに7ポンド10シリングの小遣いを与えたそうである (Ackroyd, 297)。ただし、彼は決して父親を見捨てるようなことはしなかった。1846年に父親を日刊新聞『デイリー・ニュース』のスタッフに採用して仕事を与えたことも、一つの証拠になる。しかし、父親への援助の背後には、父親を債務者監獄から遠ざけ、父と自分を過去の辛く惨めな時代から切り離したいという気持ちもあったことは否定できないであろう。

ディケンズと父親の話が長くなってしまったが、以上の点を踏まえて作品に登場する何組かの父と息子の関係に目を向けてみたい。ディケンズにとって常に父親が悩みの種であったことを考慮すると、作品の中に

父と息子の理想的な関係がめったに描かれないことも納得できる気がする。『オリヴァー・トゥイスト』 (*Oliver Twist*, 1837) では、オリヴァーは父親の不倫によって誕生した子供という設定である。母親は未婚のまま、救貧院でオリヴァーを出産し、死んでしまう。父親は、生まれてくる子供が男の子なら、「その子が未成年の間に不名誉、卑劣、臆病、あるいは不正という社会的行為によって自分の名を汚すことがなかったらという条件」 (*OT*, 396) で、財産を譲るという内容の遺書を残していた。その父親には、その子が母親の寛大な心と気高い性質を継承するという確信があったからである。そのため、その父親の実の息子モンクス (本名エドワード・リーフォード) はオリヴァーへの憎悪を深めることになる。そしてモンクスは、盗賊集団の首領フェイギンを使って、オリヴァーをスリに仕立てようとする。モンクスの目的は、「町中のあらゆる監獄へ [オリヴァー] をぶち込むことによって」 (*OT*, 303)、「父の遺言に込められた誇り」 (*OT*, 303) を傷つけることである。オリヴァーは、父親が原因となって、危うく牢獄への道を歩ませられそうになるのである。

『オリヴァー・トゥイスト』に続く作品『ニコラス・ニクルビー』 (*Nicholas Nickleby*, 1838-39) には、自分の息子と気づかずに、その息子を苦しめる父親が登場する。主人公ニコラス・ニクルビーを憎む伯父のラルフ・ニクルビーは、ニコラスが目をかけて世話をしているスマイクをニコラスの手から奪い取り、以前にスマイクを虐待していた学校長スキアーズに渡そうとする。そしてラルフは、病に倒れたスマイクがニコラスに看取られて死んでしまったから、駆り立てていた獲物が自分の実の息子であることを知る。痛恨の極みに達したラルフは、かつてスマイクが幼かった頃に暮らした部屋で、首吊り自殺を遂げることになるのである。

次に『バーナビー・ラッジ』 (*Barnaby Rudge*, 1841) を見てみたい。この作品には3組の父と息子が登場するが、いずれも良い関係にはない。居

酒屋兼宿屋のメイポール亭を営むジョン・ウィレットは、友人たちから「古き良き時代のイギリス的父親」(BR, 228)と呼ばれているが、息子ジョーに対する支配欲、征服欲が強く、子供の自由意志をまったく尊重しない。そのため、ジョーは父親を賛美する友人を殴り飛ばして家出し、軍隊に入ってアメリカへ行ってしまふ。また、貴族のジョン・チェスターは息子エドワードに愛情を持たず、息子を自分の道具とみなして財産目当ての結婚をさせようとする。その計画を成功させるために、この父親は策を弄してエドワードと彼の恋人エマ・ヘアデルとの仲を裂いてしまふ。そして父親に愛想の尽きたエドワードは、父親と縁を切ってしまうのである。残ったもう一組の父と息子の場合も見ておく。「白痴」(BR, 29)と呼ばれるバーナビー・ラッジは、よく理解できぬまま、カトリック教徒を弾圧するプロテスタント信者のグループに入って、そのグループの暴動に加わってしまい、ニューゲート監獄へ投獄される。同じ監獄内に28年前の殺人の罪で逮捕された父親も拘留される。息子がそのような事態に陥ったことについて、バーナビーの母は夫に次のように言う。

「人殺しに呪いを下す神様の御手が今私たちに重くのしかかっているのです。それを疑うことはできません。生まれる前から神様のお怒りが落とされた私たちの息子、罪のない息子が、今この場所で命の危険にさらされているのです。あの子がここへ連れてこられたのは、あなたの罪のせいです。そうですとも。神様をご存知のように、ただあなたの犯した罪のせいなのです。あの子は知性の暗闇の中で迷わされてきたのですからね。そしてそのようなことになったのは、あなたの罪の恐ろしい報いなのです。」(BR, 564)

母親の言葉によれば、バーナビーが精神に障害を持って生まれたことも、

彼が投獄されたことも、父親が原因である。つまり『バーナビー・ラッジ』という作品に登場する親子は、いずれの場合でも、父親が息子にとって重い足かせになっているのである。

『バーナビー・ラッジ』以後の二つの長編作品、『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843-44)と『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)においても、父と息子の関係は好転しない。『マーティン・チャズルウィット』に登場するアントニー・チャズルウィットは、チャズルウィット父子商会の跡継ぎとなる息子ジョーナスを、抜け目なく、狡猾で、貪欲な人間に育てあげるが、それ故に、ジョーナスは父の商社を早く自分の手に入れようとして、父親の毒殺を謀る。その計画を知った父親は息子への教育を後悔し、息子を許そうとするが、それを果たせずに死を迎えるのである。『ドンビー父子』のドンビー氏も、息子ポール(父も息子もポール・ドンビーという名前)を自分の商会の一部のように考え、その子を早く一人前の経営者にするために、父親的愛情を示さずに育てる。その結果、ポールは生気がなく、ものほしそうな表情の子供になる。ポールは死の病に倒れたとき、姉のフロレンスに、「[父さんが]泣かなくて良かった……。泣くと思っていたんだ。」(*DS*, 205)と言うのだが、この言葉は父親に最後の愛情表示を求めていることを示している。しかし、その希望も叶わぬまま、ポールは6歳で死んでしまう。これら二つの作品のどちらにおいても、父と息子の和解は達成されないのである。

ディケンズの自伝的小説『デイヴィッド・コパーフィールド』においても、父と息子の和解は示されない。デイヴィッドは中流家庭に生まれながらも、10歳でマードストーン・グリーンビー商会に働きに出され、その後、粉骨砕身の努力によって議会の速記記者になり、やがて小説家として成功するのであって、ディケンズの分身のような人物である。デイヴィッドには父親がいないが、かといって、父親的な助言、助力を必要

としている様子も見られない。この点は、彼と彼の6歳ほど年上の友人ジェイムズ・ステアフォースの会話の中で、確認することができる。ステアフォースにも父親はいない。この青年は自由闊達な行動力を持つが、その反面、自分が何をしでかすかわからないという恐れも抱いている。次の引用は、その恐れが表面化してきた場面のものである。

「デイヴィッド、僕はこれまでの20年間に思慮深い父親がいてくれたら良かったと思うよ！」

「ステアフォースさん、どうかしたんですか？」

「僕はもっとよい導きを受けていたら良かったと心から思っているんだ！」と彼は叫んだ。「心底、自分をもっと上手に導ければ良いのにと思っているんだよ！」

彼の態度に激しい落胆ぶりがうかがえ、それが私を非常に驚かせた。彼がこんなにも彼らしくなくなるなんて、私には想像もできなかったのである。(DC, 322)

ステアフォースのことを自分の「導き手」(DC, 367)と信じるデイヴィッドは、彼ほどの人物でも父親を必要としていることを知って、驚くのである。このことは、デイヴィッドが父親なしでも立派にやっつけるということを、この友人から学ぼうとしてきたことを示している。デイヴィッドには亡くなった父親についての関心がほとんどないことも手伝って、この作品は、人生における成功に父親は関係ないことを主張しているように思われるのである。

このように見てくると、ディケンズは、子供時代から続く父親への不信の念のために、父と息子の良い関係を描かないのではないか、という気がしてくる。ただ、今まで見てきた作品は、いずれも父ジョンが存命中の作品である。ディケンズは1851年3月に父親を亡くす。ディケンズ

がフォースターに宛てて書いた手紙には、父親の死を悼む気持ちがつづられている。次の引用は、その手紙からのものである。文中のケプル・ストリートというのは、大英博物館の西にあった通りの名前で、当時ディケンズの両親はその通りでロバート・デイヴィーという名前の医師と一緒に住み、父親はその医師から治療を受けていたそうである。

私は昨夜11時に到着し、11時15分にはケプル・ストリートにいました。しかし [父] は私がいわからず、誰のこともわかりませんでした。昨日の正午頃に具合が悪くなり始め、その後回復しなかったのです。私は父が、ああ、とても安らかに、亡くなるまで、そこにいました……。今はどうしたらよいのかわからない気持ちです。(ディケンズからジョン・フォースターへの手紙, 1851年3月31日)

このように父親の死を悲しむディケンズが、以後の作品の中で、どのように父と息子を描いていくのか、見てみることにしたい。

まず『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854) を見てみよう。トマス・グラッドグラインドは自分の子供たちに、事実を重んじ、理性と計算にのみ基づいて行動するよう教育する。感情を無視し、空想に耽ることすら禁じる教育は、子供たちに潤いのない生活を送ることを余儀なくさせる。息子のトム(本名は父親と同じトマス・グラッドグラインド)は、その教育の結果、自分の利益しか考えない青年に成長し、父親に対する反発から、賭け事に興じて人生を楽しもうとする。そしてトムは借金に苦しみ、勤め先の銀行から金を盗んだあげく、その罪を別の人間にかぶせる。自分の教育方針の誤りに気づいたグラッドグラインドは、トムを国外に逃がしたうえで、その罪状を公表することを決心する。そしてグラッドグラインドは、トムに悔い改めて、より良い行動をすることで償いをするよう告げた後で、次のように言う。「手を握らせてくれ、かわ

いそうな子よ、私がお前を許すように神様が前を許してくれますように！」(HT, 285) 父親を憎む息子は、この言葉に心を動かされて「数滴の惨めな涙」(HT, 285) を流すのである。この反応は、非常にささやかで瞬間的であるが、息子の心の中に、誤った子育てを悔いる父親を許そうという気持ちが働いていることを示している。

次に『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 1855-57) を取りあげてみよう。この作品に登場するウィリアム・ドリットは、ディケンズの父も拘留されたことのあるマーシャルシー債務者監獄で、23年間も暮らしている。彼は牢獄の壁に囲まれた生活に安らぎを見つけ、釈放されたいとも思わず、マーシャルシーの父と呼ばれ、囚人仲間からお金などを恵んでもらっているような情けない人間である。しかし彼の娘エイミーは、常に父親のそばにいて、深い愛情を捧げる。かつて『ドンビー父子』で、娘のフロレンスが一旦は愛を与えてくれない父親のもとを離れ、船乗りの青年ウォルター・ゲイと駆け落ちしたことに比べれば、子供と父親の距離は格段に狭まっている。また、この父親はエイミーに見守られながら、出獄後も彼につきまとった監獄の影から解放され、安らかな死を迎えることができる。この作品では父親を支えるのは息子ではないが、ウィリアム・ドリットという父親に対するエイミーの態度には、これまでにない優しさや哀れみが示され続けるのである。

次に『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61) を見てみたい。鍛冶屋の徒弟ピップ(本名はフィリップ・ピリップ)は、約12歳のとき、謎の恩人から遺産相続の見込みを告げられ、ロンドンで紳士修行をすることになる。23歳になったある晩、ピップは恩人の正体が、7歳のときに助けた脱走囚エイベル・マグウィッチだと知る。ピップは恩人が犯罪人だとわかり、失望感と屈辱感に苛まれながらも、流刑地オーストラリアからイギリスに戻ったことが知れば死刑になるマグウィッチと共に、国外へ脱出しようとする。その計画は失敗し、マグウィッチは胸に致命

傷を負ってしまうが、ピップはそんな彼を見て、次の引用に表される心境に至る。

……マグウィッチの傍らに席をとったとき、私は、彼が生きている間、そこが今後の私の居場所になるのだと感じた。

というのは、今では彼に対する私の嫌悪はすべて溶けて消えてしまっていたからだ。追われ傷つき足かせをはめられ、私の手を握っている人の中に、私は、私の恩人になろうとし、何年もの間変わることもなく私に愛情を感じ、感謝し、寛大な気持ちを抱いてくれた男の姿だけを見たのだった。(GE, 423)

ピップにとって、マグウィッチは監獄の染みを運んできた人間である。ピップはそんな彼を囚人の穢れから切り離して受け入れることができるようになるのである。ここで、マグウィッチがピップに再会した晩に、次のように言っていることに注意する必要がある。「わしはお前の2番目の父親だよ。お前はわしの息子だ、どんな息子よりわしには近い人間なんだ。」(GE, 304) マグウィッチは7歳のピップに会ったとき、その幼い子供の中に失った自分の娘の姿を見出し、流刑地へ送られてからも、彼を自分の子供のように考えてきた。それ故、ピップとマグウィッチの心の結合は、息子が父親を受け入れる様と重なり合うのである。

『共通の友』(Our Mutual Friend, 1864-65)では、血のつながりのある父と息子の和解を目にすることができる。この物語は、完成されたものとしては、ディケンズの最後の作品である。この作品に登場するユージン・レイバーンの父親は、自分の子供たちがいかに人生を歩むべきかを、勝手に決定している。ユージンはそんな父親を、いささか皮肉を込めて“MRF”(OMF, 146)と呼んでいる。この呼称は my respected father の略語である。ユージンは父親の方針に沿って法廷弁護士になるのだが、父

親が選んだ結婚相手だけは拒否し、紳士と呼ばれる家柄の人間でありながら、労働者階級の娘リズィ・ヘクサムと結婚してしまう。彼には父親の誤った考えは正すべきという考え方があり、この点は次の引用で確認することができる。リズィは、子供が教育を受けることに反対していた父親のことを考え、教育を受ける機会を提供したいというユージンの申し出を断るが、彼は彼女の気持ちを偽りのプライドと呼び、彼女に考えを変えさせようとする。

「キミの偽りのプライドはキミ自身とキミの亡くなったお父さんに不当な仕打ちをすることになるのさ。」

「どうして父に不当な仕打ちをすることになるのですか、レイバーンさん？」と、彼女は不安そうな顔をして尋ねた。

「どうしてだって？ よくもそんなことが聞けるね！ お父さんの無知盲目な頑固さがもたらした結果を永久に引きずることになるからさ。お父さんがキミにした間違いを正さないと決意することになるからさ。お父さんがキミに運命づけ、被ることを強要した剥奪行為を、永遠にお父さんの責任にしておこうと決心することになるからさ。」

(OMF, 236)

ユージンは、父親の間違いをそのままにしておけば、父親に対して不当を働くことになると考えているのである。しかし彼と彼の父親は、喧嘩別れに終わらない。最後に父親は息子の結婚相手の選択を認め、祝福してくれるのである。

『共通の友』では、もう一組の父と息子の間接的な和解を目にすることができる。ジョン・ハーマンと彼の死んだ父親の場合である。父親は塵芥処理請負業を営み、約10万ポンドの財産を残して他界する。ジョンが遺産相続するための条件は、父親が選んだ女性ベラ・ウィルファーと

の結婚である。結婚しない場合、遺産は父親の使用人であったポフィン夫妻のものになる。ジョンは、14歳のときに父親に勘当され、以後14年間外国暮らしをしてきており、父親の富が幸せを生まなかったことを骨身にしみて感じてもある。そこで彼は、ジョン・ロークスミスという偽名を使い、金持ちではない普通の人間としてベラに求婚するが、裕福な暮らしにあこがれる彼女に振られてしまう。そして彼は、遺産をポフィン夫妻に受け取ってもらい、ジョン・ハーマンという名を永久に捨てる決心をするのである。しかし彼を愛するポフィン夫妻が、彼を助ける。ポフィン氏が巨額の財産のせいで因業な人間になったふりをし、ベラに金銭のもたらす害毒を悟らせ、貧しいジョンの誠実さや男らしさに気づかせるのである。その結果、ジョンはベラのを勝ち得て、父親の遺産も受け取れることになる。その後、生まれた赤ん坊を慈しむベラを見つめるポフィン夫妻の間で、次のような言葉が交わされる。

「ご老人の御霊はついに安らぎを見つけたみたいですねえ、そんなふうに見えませんか？」とポフィン夫人は言った。

「見えるとも、おまえ。」

「そしてあの人のお金は、暗い所で長い間錆びついていた後で、輝きを取り戻し、とうとうお日様の下できらきら光ようになり始めたみたいですねえ？」

「そうだとも、おまえ。」(OMF, 778)

引用中の「ご老人」とは、ジョンの父親であり、ポフィン夫妻が忠義を貫いた主人のことである。生前この主人は、金儲けに執心するあまり他人を全く信用しなかったが、雇い主にたてつくことも辞さず、正直に意見を述べるこの夫妻だけは信頼していた。そして「……彼はこの二人が、自分より長生きする場合には、大小を問わずあらゆる事柄において頼り

になることを、自分に確実に死が訪れることと同じくらいに、確信していたのである。」(OMF, 102) 彼はこの二人が遺産相続の問題においても自分の意を汲みとってくれると信じていたのだ。したがって、ボフィン夫妻のジョンに対する助力は、亡き主人の遺志を代行するものと考えることができる。この夫妻は、自分たちが仲介となって喧嘩別れした父と息子の絆を結び直し、その行為によって亡き主人の御霊を安んじること成功したのである。

このように見てくると、父親の死後、ディケンズ作品中において父と息子の関係が好転していくことがわかる。父親の存命中は父と息子の対立を数多く描いたこの作家が、父親の死後は、作品中で徐々に父と息子の和解を描くようになってきたのである。これは愛する父親の死を悼む気持ちだけが原因ではあるまい。ディケンズにとって、亡くしてしまった身近な人との思い出を懐かしむことによって、その人の御霊を慰めることは、生き残っている者が果たすべき義務のようなものである。この点は以下の引用で確認できる。

心が穏やかな幸福感や優しい気持ちに影響され和らげられるとき、死者の思い出がその心を最も強く抗しがたい力で覆うというのは、私たちの性質にあってこの上なく素晴らしく美しいことである。まるで私たちのより良き思いと共感が呪文であり、その呪文の力で、魂は私たちが生前に心から愛した者たちの霊と、何か漠然として神秘的な交流が持てるかのようなようである。ああ、何としばしば、何と長きに及んで、それら忍耐力のある天使たちは、そんなにも稀にしか口にされず、そんなにもすぐに忘れられてしまう呪文を期待しながら、私たちの頭上にとどまっていることか！(NN, 564)

ディケンズは友人フォースターに、長く生きれば生きるほどますます父

親が良い人に思えてくると語ったそうである (Forster, II, 104)。ディケンズは父親との良い思い出だけを心に刻んでおくことによって、亡き父親との心の交流を続けていったのに違いない。そしてその営みが、作品にも反映したのであろう。そのように考えれば、ディケンズが作品の中で父と息子の和解を描くようになったことも理解しやすいのである。

注

- * 本稿は2003年9月20日に愛知教育大学で開催された愛知教育大学英語英文学会第10回研究発表会で発表した原稿に修正・加筆したものである。
- * ディケンズの作品からの引用はすべて The Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford UP) に依拠する。引用箇所には作品の略語とページ数を括弧に入れて示す。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. 1990. London: Mandarin Paperbacks, 1991.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. The Oxford Illustrated Dickens. 1954. London: Oxford UP, 1987.
- . *David Copperfield*. The Oxford Illustrated Dickens. 1948. London: Oxford UP, 1987.
- . *Dombey and Son*. The Oxford Illustrated Dickens. 1950. London: Oxford UP, 1987.
- . *Great Expectations*. The Oxford Illustrated Dickens. 1953. London: Oxford UP, 1987.
- . *Hard Times*. The Oxford Illustrated Dickens. 1955. London: Oxford UP, 1987.
- . *Nicholas Nickleby*. The Oxford Illustrated Dickens. 1950. London: Oxford UP, 1987.
- . *Oliver Twist*. The Oxford Illustrated Dickens. 1949. London: Oxford UP, 1987.
- . *Our Mutual Friend*. The Oxford Illustrated Dickens. 1952. London: Oxford UP, 1987.

- . “To John Forster.” 31 March 1851. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson and Nina Burgis. Vol. 6. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2 vols. Everyman’s Library. 1927. London: J. M. Dent & Sons LTD, 1980.

因子分析を用いた大学入試センター試験 『英語』の妥当性検証

伊 藤 彰 浩

要 旨

本論文は、大学入試センター試験『英語』の妥当性を検証するものである。大学1年生に大学入試センター試験『英語』を実施し、5つのサブ・テスト間の相関係数を算出し、そのデータに基づいて因子分析を行った。第1因子には文法・語法、整序、読解が同程度の負荷量を示したが、発音・ストレスは全く負荷が認められなかった。発音・ストレスの得点を除いても、従来のテスト得点の分散のほとんどを説明できることが示唆された。換言すれば、音声に関する知識・能力を測定する目的で出題されている紙面上の発音問題は、テスト得点全体に対して影響力を持っていない可能性が示された。平成18年度から導入されることが正式に決定したリスニングテストには、十分な項目数と配点を与えることが必要であると論じ、リスニングテスト導入後の大学入試センター試験『英語』のサブ・テスト数、項目数、配点について具体的な提案を試みた。

キーワード：言語テスト、大学入試、妥当性

大学入試センター試験『英語』の構成概念的妥当性検証の必要性

2003年（平成15年）6月8日に発表された『平成18年度からの大学入試センター試験の出題教科・科目等について一最終まとめ一』（独立

行政法人大学入試センター、2003)によれば、平成18年度から外国語『英語』は「オーラル・コミュニケーションⅠ」および「英語Ⅰ」に加えて、「オーラル・コミュニケーションⅡ」と「英語Ⅱ」に共通する事項を含むものとし、外国語リスニングテストについては、平成18年度から当分の間は『英語』のみ実施されることが正式に決定した。大学入試センター試験『英語』におけるリスニングテスト導入の必要性について、わが国では既に四半世紀に渡る議論があるが、数年後ようやくその導入が現実のものとなる。⁽¹⁾過去の議論を振り返ってみると、リスニングテストの導入を望む人々は、近年の『学習指導要領』が掲げるリスニング能力育成の目標があるにもかかわらず、大学入試センター試験『英語』にリスニングテストが含まれていないのでは論理的な矛盾があり、さらに、これまで使用されている紙面上の発音問題は、音声に関する知識・能力の測定方法として信頼性、妥当性に欠ける、と批判してきた。『学習指導要領』と大学入試センター試験『英語』の内容における矛盾は、かつて文部省(当時)がわが国の高校生の英語リスニング能力を育成するためにオーラル・コミュニケーションBの導入を決定した『学習指導要領』(1989)が発表された際、その達成度を測定するために、大学入試センター試験にリスニングテストが導入されるのではないかと期待され盛んに議論された(Brown and Yamashita, 1995参照)。大学入試センター試験が達成度テスト(achievement test)であるならば、高等学校の『学習指導要領』の内容を踏まえたものでなければならないことは当然であるとされ、この見解は現在でも多数の人々に支持され続けている。⁽²⁾一方、紙面上の発音問題の信頼性と妥当性への批判は1980年代から既に行われている。近年の研究によれば、紙面上の発音問題には、受験者の実際の発音を予測できる点において、ある程度の妥当性は認められるが、高い信頼性を維持し妥当性の高い状態で実施するためには、多数の項目が必要となることから、適切なテスト方法ではないと結論づけられているよう

だ (Buck, 1989; Shirahata, 1991; Inoi, 1995; Komazawa & Ito, 1997)。紙面上の発音問題の信頼性、妥当性への批判に基づいてリスニングテストの導入を求める声も聞かれるが、ここに問題がある。紙面上の発音問題は、「音声に関する知識や能力を測定する項目」(肥田野、1983, 1986)であることには違いないが、リスニング能力の測定のために作成されているものではないため、その信頼性や妥当性に疑問が投げかけられたとしても、それを直ちにリスニングテスト導入の必要性に結びつけて議論することには論理的な飛躍がある。紙面上の発音問題とリスニングテストが測定しようとしている能力が異なっているかどうかを検討された上で、リスニングテストの導入の必要性が議論されるべきであろう。さらに、これまでの研究は、紙面上の発音問題を大学入試センター試験『英語』から取り出して、その信頼性、妥当性を検討しているが、大学入試センター試験『英語』は複数の大問(サブ・テスト)で構成されているため、紙面上の発音問題がテスト全体においてどのような役割を果たしているのかを検討しなければ、実際の大学入試センター試験『英語』における、「音声に関する知識や能力を測定する項目」の現状把握と問題点の検証はできない。これらの点の吟味を踏まえて初めてリスニングテスト導入の必要性とその意義を具体的に議論できるはずである。紙面上の発音問題が測定している能力と、リスニングテストで測定される能力はかなり異なったものであるかどうかに関する検討は、Ito (1996)で行われている。この研究では、音素識別に関する紙面上の発音問題と TOEFL のリスニングテストの相関係数を測定した。その結果、両者の相関は認められなかった ($r = -.078, n. s.$)。紙面上の発音問題と TOEFL のリスニングテストの信頼性が低い傾向が問題点として挙げられ、また TOEFL のリスニングテストはリスニングテストの一例でしかないが、紙面上の発音問題とリスニングテストが測定しようとしている能力は異なる可能性が示された。

以上から、現在、紙面上の発音問題が大学入試センター試験『英語』においてどのような役割を果たしているのかを検討する研究が必要である。そこで、本論文では、大学入試センター試験『英語』の構成概念的妥当性の検証を内的観点から行う。ここで言う構成概念的妥当性の検証とは、大学入試センター試験『英語』を構成する大問（サブ・テスト）間の相関係数を算出し、そのデータに基づいて因子分析を行い、テストの内部構造の特徴と問題点を明らかにすることである。現行の紙面上の発音問題に焦点を当て、平成18年度から導入されるリスニングテストの作成と実施に役立つ示唆を提供したい。

調査

調査目的

本調査の目的は、大学入試センター試験『英語』の得点には、どのような因子が潜んでいるかを検証することである。その結果から、特に、「音声に関する知識や能力を測定する項目」（紙面上の発音問題）がテスト全体においてどのような役割を果たしているかを検討する。

調査参加者⁽³⁾

国立大学に在学中の日本人学生で教養英語の受講者から100名の学生が選ばれた ($N = 100$)。全員1年生。平均年齢は18歳2か月。この調査までに少なくとも中学校、高等学校における計6年間の形式教授による英語学習の経験を持っている。1年間以上の長期海外在住の経験を有する学生は、調査に参加していない。調査参加者の大学での専攻は数学、化学である。以上からこの参加者群は国籍、年齢、教育レベル、言語背景において、かなり等質性の高い集団であるといえる。

調査材料

「大学入試センター試験『英語』1991年度版」(教学社, 1994)。テストの問題数は58問。200点満点。

肥田野(1983, 1986)によれば、共通一次学力試験(現在の大学入試センター試験)の『英語』は、複数のサブ・テストによってテスト全体が構成されている(階層型問題構成)。肥田野の理論的枠組みを用いると、本調査に使用した「1991年度版大学入試センター試験『英語』」は、5つのサブ・テストに分類できる。各サブ・テストの正式名称と、測定対象の知識・能力を以下に記述する。

- サブ・テスト1 「発音・ストレス」 音声に関する知識・能力の測定
- サブ・テスト2 「文法・語法」 文法・語法の知識・能力の測定
- サブ・テスト3 「会話表現」 話すことに必要な知識・能力の測定
- サブ・テスト4 「整序」 書くことに必要な知識・能力の測定
- サブ・テスト5 「読解」 読む能力の測定

調査手順

テストを採点后、5つのサブ・テスト(1)発音・ストレス、(2)文法・語法、(3)会話表現、(4)整序、(5)読解、に分類して得点を記載する。サブ・テストの得点全ての組み合わせについてピアソンの積率相関係数を求める。その相関係数に基づいて重心法で因子分析を行う。全ての統計分析は、*Statistical Package for Social Sciences Windows 7.5* (SPSS Inc., 1996)により実施された。有意レベルは、分散の等質性が認められない箇所が存在するため、通常の5%から1%に厳密化した。したがって $\alpha = .01$ 。

結果と考察

本調査の参加者の人数は100名であり、国籍、年齢、教育レベル、言語背景において等質性の高い集団である。これらの要因が結果に何らかの影響を及ぼしている可能性もあることを前提にして結果を考察する。

表1：基本統計値 ($N = 100$)

サブ・テスト	項目数	平均点 (M)	満点	標準偏差
1. 発音・ストレス	7.000	8.897	16.000	1.275
2. 文法・語法	17.000	19.860	34.000	2.731
3. 会話表現	6.000	11.568	18.000	1.125
4. 整序	10.000	18.304	40.000	2.186
5. 読解	18.000	60.402	92.000	12.110
合計	58.000	119.031	200.000	8.013

表1は5つのサブ・テストの項目数、平均点、満点、標準偏差を示している。得点率が50パーセント以上であるサブ・テストが多いが、整序問題では若干低い。読解は6割以上の得点率である。それが影響してか、合計点では約6割の正答率を示している。テスト項目の難度の影響も考えられるが、読解の配点が高いことが主な原因であると考えられる。

表2はサブ・テスト間のピアソンの積率相関係数を示している。無相関から中程度の相関係数が得られた。発音・ストレスとその他のサブ・テスト間の相関はいずれも非常に低く、有意水準に達しなかった。この原因は項目数が7問と非常に少なく、配点も16点と、テスト全体の1割にも満たないことが原因と考えられる。

表 2 : サブ・テスト間の相関行列 ($N = 100$)

サブ・テスト	1	2	3	4
1. 発音・ストレス	—	—	—	—
2. 文法・語法	.280	—	—	—
3. 会話表現	.136	.437**	—	—
4. 整序	.159	.522**	.395**	—
5. 読解	.153	.351**	.358**	.364**

** $p < .01$

表 3 : 因子負荷量 ($N = 100$)

サブ・テスト	因子負荷量		共通性 (h^2)
	第 1 因子	第 2 因子	
1. 発音・ストレス	.088	.766	.595
2. 文法・語法	.655	.264	.499
3. 会話表現	.595	.076	.360
4. 整序	.678	-.012	.460
5. 読解	.645	.101	.426
%	33.340	13.460	46.800

表 2 の相関係数に基づいて、重心法で因子分析すると、表 3 のような 2 つの因子が出てくる。表の % の欄はその列の因子負荷量の 2 乗和 (因子寄与) を測定項目数で割って 100 倍したものである。これは各因子によって説明される分散の割合 (分散寄与率) を示している。これ以上因子を求めても、この分散寄与率が小さい因子しか出てこないため、因子の抽出はここで打ち切る。表の右端の共通性とは、その行の因子負荷量の 2 乗和である。これは各測定項目 (サブ・テスト) の全分散が抽出された共通因子で説明される程度を示す。では、これら 2 つの因子は、どのように意味づけられるであろうか。第 1 因子に高く負荷しているサブ・テストを挙げようとする、文法・語法、会話表現、整序、読解がほぼ

等しい負荷量を示しているため、明確な意味づけは困難である。しかし、テスト得点全体と各サブ・テストの相関を算出したところ、文法・語法 ($r = .782, p < .01; r\text{-square} = .612$) と読解 ($r = .746, p < .01; r\text{-square} = .557$) がテスト全体に最も高い相関を示しており、テスト得点全体への寄与率が高いと判断できた。⁽⁴⁾したがって、因子1を意味づけるのであれば「文法・読解能力」の因子と呼ぶことが可能であろう。一方、第2因子に高く負荷しているのは、発音・ストレスのみであり、これは「発音・ストレス」の因子といえる。ただし、発音・ストレスは、他のサブ・テストと有意な相関を示しておらず、テスト得点全体との相関も他のサブ・テストと比べ低い ($r = .392, p < .01$) ことが示された。

以上の結果は、平成18年度から実施される予定のリスニングテストの構築と実施にどのような示唆を提供できるであろうか。⁽⁵⁾現行の大学入試センター試験『英語』では、音声に関するテスト項目が少なく配点も低いため、テスト全体の得点に十分な影響をもたらしているとはいえない可能性が高い、ということが言えるであろう。現在の項目数(7項目程度)が利用され続けるのであれば、これまでの紙面上の発音問題からリスニングテストに変更したとしても、テスト得点全体への影響はほとんど無視できる程度にとどまってしまうかもしれない。サブ・テスト1：発音・ストレスを抜いたテスト得点の分散が、テスト全体の得点の分散をどの程度説明できるか測定するため、両者の相関係数を算出したところ $r = .998, p < .01$ と非常に高かった。これは、発音・ストレスが存在していなくても、従来のテスト得点の分散の99.6% ($r\text{-square} = .996$) を説明できることを示している。サブ・テスト1：発音・ストレスの出題の意義と重要性は、大学入試センターが刊行する『大学入試センター試験—実施結果と試験問題に関する意見・評価—』中の「問題作成部会の見解」と「問題作成の方針」において表明されるとともに、『大学入試センター試験—実施結果と試験問題に関する意見・評価—』の刊行を受け

て実施される高等学校教科担当教員の意見・評価でも支持されている。その具体的な内容は、大学入試センター試験『英語』における紙面上の発音問題は、高等学校の英語教育における音声教育の重視を促す、というものだ。実際に高等学校の英語教育における音声教育の重視をもたらすプラスの波及効果 (washback effect) があるかどうか、ここでは検証していないため具体的に論じられないが、プラスの波及効果を期待されて出題されているテスト項目が、実は、テスト得点全体への影響力を十分に持っていないならば、その出題方法と出題意義は再考を迫られるべきであろう。Buck (1990, 1992) は日本人英語学習者 (大学生) を対象に読解能力 (リーディング能力) と聴解能力 (リスニング能力) の各々が、独立した能力であるかどうか検討し、両者が独立した能力である可能性が高いと結論づけている。この研究結果をテスト作成との関連で論じれば、大学入試センター試験『英語』で測定されている主な能力が、文法能力と読解能力に関係するものであるならば、それに加えて聴解能力の測定が明確に行われなくてはならない、といえよう。具体的には、リスニングテストに十分なテスト項目数 (読解と同程度の項目数) とそれに見合った配点を与えることが必要であろう。

最後に、ここ数年の大学入試センター試験『英語』が50項目程度で実施されていることを考慮しながら、リスニングテストが導入された際の問題数と配点について具体的な提案をしたい。近年は、文法・語法、会話表現、整序の問題が1つのサブ・テストで出題されている。表2から分かるようにこれらのサブ・テスト間の相関は中程度であり、ある程度の関係がある。したがって、この種のサブ・テストを文法能力の測定のために用いることにし、(1)文法、(2)聴解、(3)読解の3つのサブ・テストで構成するのがよいのではないか。サブ・テストの配列順序は、リスニングテストの実施方法等を考慮して最終的に決定すべきであろう。各サブ・テストのテスト項目は16項目から20項目、配点は60点から70点で、

合計で50項目、200点満点のテストを実施すれば各サブ・テストの項目数もある程度確保できるため、各サブ・テストがテストの総合得点に寄与できる可能性はこれまでよりも高くなると考えられる。平成18年度からのリスニングテストの導入が、大学入試センター試験『英語』の妥当性をより高めることにつながるかどうかは、項目数と配点について抜本的な改革を遂行できるかどうかにかかっているといえるのではないだろうか。

結論

本論文では大学入試センター試験（英語）の構成概念的妥当性を検討した。調査には日本人大学生100名が参加した。大学入試センター試験『英語』を構成する5つのサブ・テスト間の相関係数を求め、因子分析を行った結果、紙面上の発音問題はテスト全体に対して十分な影響力を持っていないことが示唆された。この結果を踏まえて、リスニングテストが導入された際は、リスニングテストに十分な項目数と配点を与える必要があると論じた。

謝辞

本論文の構想は、平成14年7月29日～8月9日にイギリス連合王国ランカスター大学社会科学部言語学・現代英語学科で開催された研究セミナー‘Language Testing at Lancaster 2002’において具体化することができた。本論文に貴重な助言を下されたセミナー主催者の Prof. Charles Alderson, Dr. Caroline Clapham, Dr. Dianne Wall, Dr. Rita Green, Dr. Jayanti Banerjee に感謝の意を表明させていただく。

注

- (1) 1980年代以降の共通一次学力試験、大学入試センター試験における『英語』に関する研究論文は、Ito (1996) の参考文献を参照されたい。
- (2) 大学入試センター試験は、その正式な英語名 (Joint First Achievement Test) から明らかなように達成度テストであると日本社会では想定されている。しかし、ある特定の学習プログラムの終了時に達成度を測定する一般的な達成度テストとは異なっている (Ingulsrud, 1994)。したがって大学入試センター試験を達成度テストと呼ぶことには異論もあると思われる。この点については、教育社会学的なアプローチをとる論文を参考にし、今後検討していきたい。
- (3) 当初、調査には高校3年生が参加する予定であった。しかし、調査の協力をお願いした高校関係者によれば、学校内の成績等の情報管理規約に違反する可能性があるとの御指摘をいただいた。そこで、大学1年生を対象にテストを実施し、データを収集することにした。
- (4) 多くの因子分析では、最初の結果が出た後に、できるだけ多くの測定項目を軸の周りに集めるために座標軸の回転を行い、それに伴う新しい因子負荷量の結果を求める。しかし、図1を見て分かる様にサブ・テスト1：発音・ストレス以外のサブ・テストは全て第1因子に負荷していることが明らかである。本研究に限り座標軸の回転と新しい因子負荷量の測定と記載は、新たな解釈を提供するものではなかったため、各サブ・テストとテスト全体の得点の相関係数を適宜用いて、結果を解釈した。また、因子負荷量のみから考察すると、整序が第1因子に最も強く負荷しているが、整序とテスト全体との相関係数は ($r = .729$, $p < .01$; $r\text{-square} = .531$) であり、文法・語法、読解よりも低かった。一方、文法・語法と整序との相関係数は表2から明らかなように、サブ・テスト間の相関係数の中で最も高い値を示している。文法・語法と整序が測定する能力はかなり似かよっていることが示されるため、意味付けした「文法・読解能力」には整序で測定されている能力とかなりの関係があるといえよう。因子分析結果の記載方法と解釈については、松田・松田 (1991) を参考にした。また、結果を解釈する際、著者の一人である松田文子先生 (広島大学大学院教育学研究科教授・教育心理学) に直接御指導いただいた。
- (5) 近年の大学入試センター試験『英語』では、サブ・テストの形式と項目数に若干の変化が見られるが、紙面上の発音問題・文強勢問題は出題され続けている。本研究の結果が、これまでの実施されてきた全ての大学入試

センター試験『英語』に一般化できるとは考えられないが、それらの傾向の一端は浮き彫りにしていると思われる。

参考文献

- Brown, J.D. and S.O. Yamashita. (1995). English language entrance examination at Japanese universities: What do we know about them? *JALT Journal*, 17, 7-30.
- Buck, G. (1989). Written tests of pronunciation: Do they work? *ELT Journal*, 43, 50-56.
- Buck, G. (1990). *The testing of second language listening comprehension*. Unpublished doctoral dissertation, Lancaster University, Lancaster.
- Buck, G. (1992). Translation as a language testing procedure: Does it work? *Language Testing*, 9, 123-148.
- Ingulsrud, J. E. (1994). An entrance test to Japanese universities: Social and historical context. In Hill, C. and Parry, K. (Eds.), *From testing to assessment: English as an international language* (pp. 61-81). New York: Longman.
- Inoi, S. (1995). The validity of written pronunciation questions: Focus on phoneme discrimination. In Brown, J.D. and Yamashita, S.O., (Eds.), *Language testing in Japan* (pp. 179-186). Tokyo: Japan Association for Language Teaching (JALT).
- Ito, A. (1996). Testing English tests : A language proficiency perspective. *JALT Journal*, 18, 183-197.
- Komazawa, S. and A. Ito (1997). A written test of stress in connected speech in the NCUEE-Test: Its reliability and validity. *CELES Bulletin*, 27, 285-292.
- Shirahata, T. (1991). Validity of paper test problems on stress: Taking examples from *Mombusho's Daigaku Nyushi Senta Shiken*. *Bulletin of the Faculty of Education, Shizuoka University, Educational Research Series*, 23, 17-22.
- SPSS Inc. (1996). *Statistical Package for Social Sciences Windows 7.5 version*. Chicago, IL: SPSS Inc.
- 独立行政法人大学入試センター. (2003). 『平成18年度からの大学入試センター試験の出題教科・科目等について—最終まとめ—』(http://www.dnc.ac.jp/center_exam/18kyouka-saishuu.html)
- 肥田野直. (1983). 「高校調査書・共通一次・2次試験・入学後の成績の相関」『大学入試フォーラム』, 1, 57-62.
- 肥田野直. (1986). 「昭和60年度共通一次学力試験問題の内容分析」『大学入試

フォーラム』, 7, 105-120.

教学社. (1994). 『大学入試シリーズ』 東京: 教学社.

松田伯彦・松田文子. (編著) (1991). 『新版 教育心理学研究法ハンドブック—
教師教育のために—』 東京: 北大路書房.

「旅」と「地図」を視点にした 新たな日系アメリカ文学の研究

——カレン・テイ・ヤマシタの作品を通じて——

山本茂美

はじめに

日系アメリカ人の登場は19世紀の中頃から始まった。彼らは、当初出稼ぎのつもりで渡米した者も多かった。日本で聞いていた話とあまりにも違いすぎた現実。荒れた耕地、様々な差別、黄色人種であることを改めて感じさせる毎日であった。日々の生活に追われた彼らは、多く記録を残すことができなかった。皮肉なことに第二次世界大戦で強制収容所に入れられた時、彼らに初めて自分たちの生活を振り返る時間ができたのだ。こうして俳句、短歌から始まりエッセイ、そして新聞記事まで、多くの手段で彼らの生活、当時の彼らの気持ちを知る大切な資料が生まれてきた。

筆者が歴史を研究していた頃に第一次資料として残していたものを、アメリカ文学の視点から見直したとき新たな発見があった。多くの日系アメリカ文学の研究をはじめ、多くの作者に出会い、多くの心の叫びを知った。三世の時代に入り、彼らは自分たちの経験を語ることはなくなってきた。日系人であることを否定した生きかたをしていた日系文学者の研究に⁽¹⁾続け、本論で三世の女性文学者の作品を通じて、今後の日系アメリカ文学の展開をさぐってみたい。

1 日系アメリカ人の歴史

日本人がアメリカに渡ったのは明治時代のことである。当時、農家の次男三男などは、一攫千金を夢見て渡米する若者が多かった。さらに、武士であった人々も、明治時代になり、新しい生活を求めてアメリカへと向かったのである。

アメリカに着いて案内されたのは、荒地ばかりで、アメリカへ持ってきた植物も、稲の苗なども無事ついたものはほとんど無く、想像を絶するような過酷な生活が続いた。やがて、商社から派遣された日本人や留学生も加わり、日本人の数は増えていく、そして、少しずつ安定した生活ができるようになり、帰国をあきらめるようになり、花嫁を日本から迎え入れる、「写真花嫁」として有名になった多くの花嫁が昔の写真だけを頼りにアメリカの港に着いたのである。しかし、実際には写真とは全く違い、はるかに年上の夫に絶望する若い娘たちの姿があちらこちらで見られたという。

こうした夫婦の間には、次々と子供達が生まれていった。当時、一世の日系アメリカ人は、アメリカの土地を所有することができない帰化不能外国人であった。しかし、二世は、アメリカ人として認められたので、土地を所有することができたのである。そこで、出産の数も多くなり、やがて西海岸では「黄色人種に侵略される」という不安が広がり、黄禍論がわきあがる。

1924年の排日移民法が成立してからは、新たな移民はそのほとんどが禁止され、移民たちは差別の中で、さらに苦しい日々を送ることになるのである。そして、真珠湾攻撃により始まった第二次世界大戦中、日系人は敵国外国人として、荒野の収容所に強制的に入れられることになる。ここでの生活は、語るにはあまりにも悲惨な体験が多く、1980年以前には、なかなか一世二世の口から当時の様子を聞くことはできなかった。

1988年に成立した「市民的自由法」で、当時の日系人は賠償金を受け取れるようになるのだが、この頃三世を中心に強制収容所での体験をヒアリングするようになり、それをきっかけに一世、二世も重い口を開くようになったのである。

1990年以降、多くの三世達はアジア系アメリカ人としてのアイデンティティーに目覚める一方、日系人であることを否定して生きていくものもあらわれていくのである。こうした日系人の歴史について少しずつ資料が出るようになっていくが、一番筆者にとって当時を知るのに役立っていたものは、収容所などで出版された新聞や、一世、二世が書いた自叙伝、又、当時の生活を引用したフィクションの文学作品であったのである。

2 日系アメリカ文学史

初期の日系アメリカ人「一世」の文学作品は数少ない、一世達は時折、短歌、俳句、川柳等で自分の思いを表現しているが、この多くは日本語で書かれているので、日系アメリカ文学に入るかどうかはやや疑問ではある。しかし、日系アメリカ人がコミュニティの中で発行された新聞などの中にこのような作品が見られたようである。「もちろん日記などは残っていたようだが、強制収容所に入れられた時処分されるという運命をたどったものが多いという。」(エレイン・キム 176)。そのため強制収容所以前の作品を探すことはなかなか難しい。

しかし、二世による作品は少しずつ見られるようになっていく。これは、一世の日常の記録などとは違い、自己がいかにかアメリカナイズしているか、つまりアジア人以外の人々の自分たちに対する誤解を解く手段としたものが多い。このような作品は、やはりコミュニティの新聞や

雑誌に掲載されてきた。しかし、日系アメリカ人は当時、アメリカに対する裏切り者として見られていたので、なかなか作品を認めてもらう手段が見つからなかった。そこでトシオ・モリの『カリフォルニア州ヨコハマ町』(*Yokohama, California*) の作品のように、1941年出版の予定の作品が10年後まで出版が延長されてしまうということが起きている。そのような状況の中で、最も成功を収めたのがモニカ・ソネ (Monica Sone) の『二世娘』(*Nisei Daughter*, 1953) である。この作品は日系アメリカ人が強制収容と差別という体験を乗り越え強く生きていく姿が、表現されているのである。このような自伝は60年代から70年代にかけて何冊か出版されている。ダニエル・イノウエとローレンス・エリオットの『ワシントンへの旅』(1967)、ダニエル・オキモトの『二世に生まれて』(*American in Disguise* 1971)、ジム・ヨシダ (Jim Yoshida) とビル・ホソカワ (Bill Hosokawa) の『ジム・ヨシダの二つの祖国』(*The Two Worlds of Jim Yoshida*, 1972)、ジーン・ワカツキ・ヒューストンと、ジェームズ・D・ヒューストンの『マンザナルよさらば』(*Farewell to Manzanar* 1973) などである。

これらの作品は、日系アメリカ史の中で、1924年排日移民法研究の折、貴重な資料として利用したものばかりである。一世自身が何も語らず、又は何も残そうとしない以上、これらの二世から見た当時の一世の生活、考え方は当時の研究にとってとても役立つものだった。

二世の作家たちは、「作品の中で自分はアメリカ人なのか、これからどのように生きていくべきか」を自問自答しながらやがて進むべき道を探し出していくのである。又、ヨシコ・ウチダ (Yoshiko Utida) のように強制収容所の体験に対する自叙伝だけでなく、その後、子供たちにこの事実をアメリカの歴史の一部として、知ってもらうため絵本という形で残していった作家もあるのである。彼女は、自分たちの第二次世界大戦中の体験を絵本にすることで、まだ様々な偏見を見つけていない白人を中心とする子供たちに、純粋な気持ちで現実を知ってもらうために

本を書いた。」(Yamamoto 342) といっている。ヨシコ・ウチダのみならず、当時の二世作家達は、強制収容所での体験を通じて心に深い傷を受け、それは消えることが無かった。その為、彼らの作品の中には必ず強制収容所での辛い体験がおりまぜられ、砂漠のイメージの中で一世の老人、そして、幼い子供が登場する。自分たちがいかに犠牲となったか、またそれにも関わらずどれほど真のアメリカ人であることを証明することに力を入れている。しかし、このような二世作家の活動の場も皮肉なことに強制収容所の中のことであった。彼らは、次々と作品を発表していったが、戦後日系人は離散していき、発表の場を失ったものが数々いたのである。

そして、1988年の「市民的自由法」の成立前後に各地で行われたヒヤリング調査をきっかけに、三世達は、アジア系移民としての意識を高め、今まで口を閉ざしていた一世、二世達が強制収容所当時の生活を語り始めた。こうして新たな一世、二世の作品が発表されるようになったが、又一世、二世の話をモチーフにした作品を書く三世の作家も現れるのである。この頃になると、アジア系アイデンティティを明確にする方法として、アジア文化と一体化する道をとったものもいる。いかに自分が「日本人」らしいかひけらかそうとする描写が見られる。

一方、三世の David Mura のように自分が日系アメリカ人であることを幼い頃から否定し続けて生きてきた文学者が、あるきっかけで偶然日本に留学することになり、日本の魅力にとりつかれ、自己のアイデンティティを探る旅をするようになるという作家もいた。彼のように改めて日系人としての意識を持って作家活動を始める作家はいるものの、今後、過去の経験をもとにした作品、つまり自分がいかにアメリカ人らしいかを訴える作品はさらに減っていくであろう。その時、日系アメリカ文学は消滅するのでは、と考えていた。

しかし、日系アメリカ文学の中で女性の作家を中心とする三世の活動

が目立ってきた。もちろん日系女性が、作家活動を始めるには、長い時間がかかっている。一世の女性は、移民してきた当時、新世界に旅立とうというチャレンジ精神を持ち、また、一世、二世の男性作家が書く作品に出てくる女性が現実の姿と違うことに不満を持っているため、作家活動を試みた者もいたが、生活に追われた女性たちには自分たちの時間を見つけることが難しく、実際には活動があまりできなかった。その為、日系アメリカ女性が作家として活動する下地が確立されていなかったのである。しかし、三世の時代になり、作家というものが職業として認められるようになったとき、ノンフィクションだけでなく、劇の分野でも多くの女性作家が現れてきた。

これまで、何人かの作家に焦点をあてて研究をしてきたが、そのような新しい作家の中で、今回は日系アメリカ三世の女性作家カレン・テイ・ヤマシタの作品について調べていきたい。

3 カレン・テイ・ヤマシタについて

カレン・テイ・ヤマシタは、1951年1月8日アメリカ合衆国、オークランドに日系二世の両親のもとに生まれ、まもなく牧師であった父親の都合でロサンゼルスに転居した。彼女の祖父母は岐阜県と長野県の出身であるという。

高校卒業とともに日系とヒスパニックと黒人の居住地サウス・セントラルからミネソタ州のカールトンカレッジに入学し、文学を学ぶ。カールトン大学在学中の20歳の時、日本の早稲田大学に留学した。しかし、日本の大学での授業よりも旅を好み、一年ほどの間に岐阜と長野で家系のルーツを探すことに熱中した。彼女は帰国後Phi Beta Kappaを卒業した。

その後、彼女は Thomas J. Watson の奨学金を1974年にもらい、サンパ

ウロに行くことになった。彼女は9年間サンパウロの町に住み、そこでロナルドロペス・ド・オリベリア (Ronaldo Lopes de Oliveria) というブラジル人の建築家と出会い結婚した。二人の間には Jane と Jon という二人の子供がいる。この間、彼女は創造的の作品を発表し、“*Omen : An American Kabuki*” で、Rockefeller playwright-in-Residence Fellowship at East West Players を受け取った。さらに1979年“*Asaka-no-Miya*”が James Clavell American-Japanese Short Story Contest で賞をとった。その後『オレンジ回帰線』(*Tropic of Orange*)、さらに2001年『サークルKがめぐる』(*Circle K Cycles*) を発表。アメリカ、ブラジル、日本での体験をマジックリアリズム的な手法で空間に交錯させて描いている。その他、UCLA のアジア系アメリカ文学研究者の集会で『シヤム双生児と黄色人種』(*Siamese Twins and The Yellow Races*) (1997年) という短編を発表している。ヤマシタは、日系アメリカ人として生まれ、日本へ留学することでブラジルの日系移民に出会い、自分もまたブラジルに移り住み、移民のような体験をし、再びアメリカに渡ったとき又、移民のような体験をする。彼女の作品の中には常に「旅」というものが描かれている。彼女は今福氏との対談の中で次のように述べている。「私が何かを書くときの手順としては、まず、何らかのテーマに関係した素材や資料をできる限り多く集めます。それから、その情報の中でギリギリまで溺れてみます。とにかく集めた情報にどっぷりと浸かる時間が必要です。書き始める前にあらゆる情報が必要です。十分浸かったら、そこから上がってきて、テストを組み立て始める。どうやって時間を使ったのかはこうして話すことができるけれど、その時私に何が起こったのかを説明するのは、やはり難しいわね。何かがあるのだろうけど、私にはよくわからない。」(作家のラティテュード 163) このような点に注目しながら、ヤマシタの作品をいくつか考察していきたい。

4 カレン・テイ・ヤマシタの作品について

カレン・テイ・ヤマシタは、最初の二つの小説をブラジルを舞台にして描いている。1990年の作品、“*Through The Arc of The Rain Forest*”と、1992年の*Brazil-Maru*である。

さらに、1997年の、三冊目の本、*Tropic of Orange* が書かれている。この作品は、ロサンジェルスが舞台となっている。そして「パターソン小説賞」(*Paterson Fiction Prize*) のファイナリストとなった。四番目の作品 *Circle K Cycles* は、2001年に出版されたが、これは日本でのブラジル移民の研究をしたときの、彼女の経験談を描いたもので、瀬戸市に居住し、その地域での体験も書かれている。

彼女の他の作品としては、脚本として先にも述べた1978年の『お面：アメリカの歌舞伎』*Omen: An American Kabuki*、1984年の『広島熱帯』*Hiroshima Tropical*、1986年の『クセイ、危険な種族』*Kusei: An Endangered Species*、1989年の *Hannah Kusoh: An American Butoh*、1996年の *Tokyo Carmen V. L.A. Carmen*、1992年の *GiL Awrecks*、1993年の *Noh Bozes* がある。さらに短編として “*The Orange*” “*The Bath*” “*Tukano*” “*Asaka-no-Miya*” “*The Dentist and the Dental Hygienist*” “*Madama B*” “*The Last Secretary*” がある。その他1975年の *A Japanese American Anthology*、1986年の *Contact II Poetry Review*、1993年 *Chicago Review*、*Circle K Cafe Creole*、*Rafu-Shimpo* などのエッセイがある。

ここでは、その作品、小説等の中からいくつかの作品について紹介していきたい。

『熱帯雨林の彼方に』(*Through The Arc of The Rain Forest* 1990) ヤマシタは以前から脚本家として有名だったが、9月にこの作品が刊行されるとすぐに話題になり、初版四千部は三週間で売り切れ、再版の千五百部もたちまち無くなり、12月には第三版二千部を刷り上げ、純文学と

してはベストセラーになったという。さらに1991年の「全米図書賞」にノミネートされ、1992年度の「ジャネット・ハイディングー、カフカ文学賞」をとった。マジックリアリズムという作風のこの作品は、大衆消費社会と環境破壊、無垢と強欲、そして多元文化をテーマにしている。

さて、この作品の主人公はカズマサ、イシマルと、彼の分身とも言える球体だが、さらにこの作品の語り手がこの球体であることは極めて珍しい発想である。そしてこのカズマサ、イシマルが日本人で、この球体との出会いが日本の佐渡島であることに注目したい。海で遊んでいたカズマサを含む子供たちのところに雷鳴とともに炎の塊が落ちてくる。そして、その塊がカズマサの額のまわりで回り始めるのである。やがてそのボールの力を借りてカズマサは仕事を始める。日本の鉄道の危険を知らせる仕事をするが、その後その仕事に別れを告げ、ブラジル・サンパウロに渡るのである。

この設定は、日系人のヤマシタが移民を意識したものであると考えられる。さらに、「旅」というものに対して常に意識をしているので、カズマサにブラジルへの「旅」をさせているのであろう。又、他の登場人物としてディヤパン鳩株式会社を運営する若い夫婦、羽教の導師マネ・ペーナ、〈天使〉のような巡礼者シコ・パコ、GGGエンタープライズの影の大将である三本腕のJ・B・トゥイーブ、そしてその妻となるフランス人の鳥類学者で乳房が三つあるミッシェル・マベル等がいる。

こうした奇怪なキャラクターの登場と内容については彼女の夫、ロナルド・ロベツデ・オリヴィアのアイデアであることは間違いない。

彼女はインタビューの中で次のように言っている。「基本的にこの本は短編の寄せ集めです。それらのいくつかは奇想天外なことばかり考えている私の夫がよく話してくれたものを私が書きとめたものです。」(カレン・テイ・ヤマシタ『熱帯雨林の彼方に』日本語版 229)

また、この本は、熱帯雨林を救うために書かれたのかという質問に対し

ては次のように述べている。

主な関心は、私のブラジル全体についての思い出を書き記すことだったんです。だってそこの文化全体について語らずに、どうして熱帯雨林が切り開かれなければならないのか説明することなんてできないからです。ブラジルの農夫たちは、本当に犠牲者なんです。都会のスラムにあふれているのは、彼ら農夫なんです。今、あの人たちはとてつもなく大きな問題を抱えて込んでいます。どうすればその問題が解決されるのか、私には全く見当もつきません、それと、『熱帯雨林の彼方へ』(Through The Arc of The Rain Forest) はマジックリアリズム⁽²⁾だとよく言われますけど、私は、もちろん、マルケスの作品はブラジルで暮らしていたときに読んでいましたが、彼の手法がマジックリアリズムと呼ばれているなんてこちらに帰ってくるまで知りませんでした。それでブラジル人や他の南米の人にそのことを言うと、彼らはあの手法が「マジック」だなんて思っていないんです。彼らは、こう答えますよ。『現に起こっていることじゃないか』って。つまり、ブラジルでは『熱帯雨林の彼方へ』で語られていることは日常的な出来事なんです。ブラジルのような国に住んで御覧なさい、北米にいるときは百八十度もの見方が変わりますよ。」(カレン・テイ・ヤマシタ 230)

鳩を飼うことに夢中になっている若い夫婦の部屋をのぞいていたカズマサだが、この夫婦が始めた鳩を使った仕事に成功する。この夫婦の仕事の発展を軸に、そのまわりで様々な登場人物の奇怪な行動が描かれていく。三本の腕のある JB、三つの乳房のあるミッシェルの夫婦の登場に三つの乳房にしたり、三本の腕にあこがれ手術をするという社会的常識に反する描写も特徴的である。そして、それぞれの発展が「チフス」に

よってすべて失われていく。

やがて、和正の顔のところを回っているマタカンはそのようなものと明かされる。「地球上のすべての人口密集地の地下に大量廃棄された『微生物による溶解が不可能な』物質は高圧力によって地球の中心付近に達した。マントルの中で液化した沈殿物は、地中の脈を通過して上昇し、地表の未開地を目指した。その結果、地球最後の処女地であるアマゾンの森林地帯がそれを大量に得て、そこからマタカンのような物体が現れた。」

作者が述べているようにブラジルを守りたい、つまり自然破壊への警鐘であることが明らかである。本の最後では、マタカンは死んでいく。多くの奇怪な行動を述べながら、自然に逆らう全てを切り捨てる鋭い表現だと考えられる。

『ぶらじる丸』(Braziru Maru 1992) この作品は、ヤマシタがブラジルの日系移民研究に行った9年間で調査した事に基づいて書かれている。この作品ではEsperanzaという日本人のコロニーに基づいて書かれているのである。そして4つの章に別れ、それぞれの章では、ナレーターが出てくる。

第一章では、Ichiro Teradaという若者で、1925年から1930年代のコロニーの成長を見守っている。文の最初では、日本からぶらじる丸に乗ってブラジルに渡る様子から描かれている。そしてIchiroの新しい兄弟の誕生を描くことで、新たな生活に活力を与える様子を表現しようとしている。

第二章では、Kantaro Unoという植民地の指導者の妻Haruによって語られている。彼女の仕事は1930年代後半から始まり1945年に終わる。彼女は自分たちのような上流階級の植民者がいかにひどい生活を強いられているかを語っている。ニワトリだけでなく植民地の収入源であるあらゆるものに影響を与える病気だけでなく、第二次世界大戦による困難に

ついても語っている。この点については次のように表現されている。

No one really knows why it was, but it was at that moment when the war ended that it began for the Japanese in Brazil. It seems impossible that so many of us could believe that the war did not end, that Japan was still fighting, that Japan was winning the war, or that Japan won the war. How could such a country have been defeated? (*Braziru-maru* 107)

このような生活は、かつて多くの一世、二世、さらには三世の日系アメリカ文学者がカリフォルニアを中心とした移民について描いた内容と類似するものがあるだろう。

第三章は、Haru の夫 Kantaro Uno によって語られている。彼の話は第二次世界大戦の終わりから始まり 1950 年代の後半に終わる。この章では、作者は Kantaro の二重生活と、彼がどのように植民地での比較的単調な日常を過ごし、しかし贅沢な生活、つまり家、メイド、召し使い等のいる生活をサンパウロの町で続けたかを語るのである。彼の生活については次のように書かれている。“I spent money like water, denying Natsuko nothing: no small trinket was too expensive, no idea or plan impossible. Nothing was beyond my means” (*Braziru Maru* 147) 彼は次々と炭鉱を見つけ、その財源でさらにお金をもうけて、湯水のようにお金を使っていくのである。このような状況は、アメリカの日系移民には珍しいことであり、アメリカ合衆国とブラジルの移民の差を明らかにしたものであると考えられる。

この本の最後の章は、Genji Befu というカンタローの甥である、別の移民の息子によって語られている。彼の話は 1959 年から 1976 年までの内容となり、この時期にカンタローが指導する世界で起こる楽園から地獄への移り変わりが描かれている。そして小説そのものは、カンタローが別の植民地を求めて調査に向かう飛行機事故で死ぬところで終わるのである。

1997年のインタビューの中で、彼女は次のように述べている。

私は奨学金を得てブラジルへ調査に旅立った。その国への日本からの移民を調べるのが当初の目的だった。ブラジルは150万人以上の日系移民とその子孫たちの故郷で、その人口は日本国外では最も多い。このコミュニティーには長きに渡る魅力的な歴史と、複雑で多様性に富む社会がある。しかし、到着したときにはこうしたことはほとんど知らなかった。偶然と直感が私をブラジルに送り届けたのだ。暖かな熱帯の魅力的な土地で過ごしたかったのも確かだけれど、私はまだ純粋な日本人について知りたかったのだと思う。その本質とは何か、新しい文化や、社会に取り込まれて消化され、なお生き続けているものは何か、北米のコミュニティーを南米のこの土地やはるか極東と結び続けるものは何か？

多くの疑問のためその後のブラジルでの三年間は調査で大変だった。私は日系開拓者の努力について知りたかった。彼らが処女地を切り開いたときのこと、農業において広範囲に成し遂げられた成果、社会構造や政治的行動、娯楽や考え方を知りたかった。私は知るのに一生かかるくらいたくさんの方の問いの答えを知りたかった。教育はどうだろう？ 自由については？ どんな幸福感を持っているのだろうか？ (旅する声 105)

このような発言から考えると、ヤマシタがいかにこの『ぶらじる丸』の中で自分が研究した事を史実として残していきたくったかが考察できる。そして、このブラジルでの生活がやがて再びヤマシタを日本に招き、ブラジル移民の日本での実態調査へと結びつき、『サークル K、サイクル』(2001) という本の出版へとつながるのだろう。

『オレンジ回帰線』(*Tropic of Orange* 1997) は、ロサンジェルスの様々

な移民について述べられている。近接未来のある年、「南」が突如として北上する。そして、作品の中で中心となるのがオレンジである。このオレンジは特別なオレンジで近くの北回帰線上で採れたものである。そして、このオレンジを持った少年が、ティファナの国境でメキシコからアメリカ合衆国に移動するのである。その結果、回帰線も北に移動し、南の地理の全てをロサンジェルスへと引っ張ってくるのである。さらにこのオレンジが熱帯性癌 (Tropic of Cancer) をもたらすのである。この風変わりな状況が、ついに人種階級文化の大惨事を無常のLAのもとでメディアのもとで現れるということを引き起こす。七人の主要人物の夏至に始まる7日間の動きを追った作品で、移住と混在する「最先端都市LAを舞台にした畏怖すべき熱帯小説である」という評価がある。

先に述べたように、ヤマシタの作品の中には、「旅」が背景となっていると考える。そこで、登場人物は様々な場所から様々な地位でロサンジェルスに渡ってきている。そこで、ヤマシタとインタビューをした今福竜太郎氏によると、次のような評価がされている。

あなたの『オレンジ回帰線』には、その複雑で魅力的な構成の中で、全巻を通じて非常に広範で緊張感の高い地理学的象徴や空間的比喩が散りばめられています。その意味で、あなたは小説家として、時間意識を空間意識にシフトするという現在の文化研究のもっとも困難かつ魅力的な主題に対する特別な立場を表明することができるように思うのです。例えば、ロサンジェルスのフリーウェイで車の渋滞を前に指揮棒を振るホームレスの三世マンガナー、ムラカミを主人公とする第八章の記述は、交通、地図、地勢学、そして地図の理論を音楽の理論に読み替えるというような極めて刺激的なイマジネーションがあふれています…… (作家のラティチュード 159)

これに対して、彼女はその登場人物を町で見かけたホームレスの男性をモデルに描いたことを述べている。さらに彼女は次のように述べている。

私が『オレンジ回帰線』を書こうと思ったのは、ロサンジェルスで起きている大きな変化を表現してみたいと思ったからです。私はロサンジェルスの日系人コミュニティで育ちました。小さくて、閉鎖的なコミュニティでした。しかし、戦後、強制収容所から戻ってきた人たちは、そういった小さなゲットーの中で、何とかやっていくしかありませんでした。

そこからしばらくの間離れて暮らしたあとで、1984年に戻ってみると、ロサンジェルスは、明らかな変貌を遂げていました。ロサンジェルスはラテンアメリカ化していたのです。

また統計資料によると、今世紀の終わりにはロサンジェルスの半分以上の地域がラテンアメリカ化すると予測されているのです。それくらい劇的な変化がおきている。しかも、ラテンアメリカの影響だけでなくアジアからの影響も受けているのです……。 (作家のラティチュード 158) と述べている。

ヤマシタは、この発言からもわかるように移民の子孫である自らの立場から祖国の変化を冷静に、しかしやや皮肉な目で見ていると考えられる。彼女はアメリカの将来に対して最悪な状況を、しかしとてもユーモラスに描いているのである。なお、ヤマシタはこの作品を管啓次郎が翻訳する際、自分の名前を「カレンテイ山下」と表記されることを希望したという。この本意は、日系人としての強い意識の現われだと考えられる。

『サークル K、サイクル』(Circle K Cycles, 2001) は、ヤマシタの 4 冊目の作品である。この本は日系ブラジル人の出稼ぎ労働者に取材した日記+短編小説である。ブラジル、日本、アメリカでの体験をマジックリアリズム的な空間に交錯させ描く手法は高い評価を受けている。

『ぶらじる丸』のように、この小説は違った国の調査と旅行との結果の概念に基づいている。1997年3月から8月までの6か月間、日本のブラジル移民の調査のために来日する。特に、愛知県豊田市近くの日系ブラジル人の生活を調べる中、同県瀬戸市に家族とともに住み、さらに自分の祖先の調査もしている。

3月16日、日曜日の内容は、ブラジル人の一家のアパートを訪れたときのものである。

“They explain that Brazilians hardly have to buy anything upon arriving in Japan. Furnishings and warm clothing are usually handed down from other sojourners, but the greatest source of all is the trash, Lixo. That new three-part refrigerator, this bilingual VCR and television, that small oven, the kotatsu, the full-cycle washing machine, the telephone: fax machine: all in working condition: all lixo. There are also stories of incredible finds: an upright organ encased in polished cherry wood, entire computer systems, big-screen stereo certain night for its trash. You take your flashlight and bump into other gaijin scavenging.”
(Circle K Cycles 30)

日本人がいかに贅沢な生活をしているのかを皮肉っぽく表現しているのである。

先の英文でもわかるように、ヤマシタは、この本の中で日本語とブラジル語を徹底的に組みいれている。彼女はブラジル人の日本語言葉を使い、結びついた文化についての特有な表現をしている。又、通りの写真

や標識、地図、新聞、ハガキ、スナップ写真、そして他の日系ブラジル人の生活の断片が散りばめられている。

この本の中で注目すべきものは、日本のルール、ブラジルのルール、アメリカのルール、サークルKのルールが述べられている点である。⁽³⁾

こうして四つのルールを比べることにより、いかに四つの文化が違っているかをそれぞれの国民の生活習慣を的確に比較して、さらに日本のコンビニについて詳しく研究をして簡潔に比較している。

その他の作品としてヤマシタには短編など多数あるが、最後に、新谷正卓の写真集『約束の大地アメリカ』（2000年）（アメリカの強制収容所跡の砂漠の写真や、アメリカ本土、ハワイの現在の百歳を越える日系一世の写真集）の最後についている、ヤマシタのコメントに注目したい。

「子供のころ、聞いたすべての民話の中で、私の心の耳にもっとも親しくささやきかけてくるのは浦島太郎のお話だった。それで、新谷正卓の写真の入った包みが東京から送られてきたとき、私はその日ずっとそれを開けることなく、本や新聞や書籍を無造作にその上に積み重ねたり並べ替えたりしながら、テーブルの上に置きっぱなしにしていた。それはたぶん包みの中の脅威への期待を楽しむためであり、また、たくさんの切手に埋もれかけた外国の住所がこすれて読めなくなるようにするためでもあった。ああ、でも人は好奇心には勝てない。……浦島太郎の玉手箱博物館に入ってしまったのだ。」（新谷正卓 巻末）

かつては人々が生き生きと暮らしていた村の、見捨てられた後の姿を見つけるためにいまや失われつつある。これらの、戦時中の強制収容所の風景には、人を不安にさせる美が立ち込めている。この光景を同じく

戦後生まれの三世だったなら、彼らが聞いたり集めたりしてきた数々の話について、この無感情な自然景観いっぱい広がる人間の歴史の消去についていやでも考えはじめるはずだと彼女は考えた。もし、彼女の母と同じくユタ州のトパーズ強制収容所に入れられていた二世だったなら、家族やその他の何千人という日系アメリカ人とともに、戦争中の暮らしを営むことになった土地の荒涼とした風景を見て、この土地に人は住めないということを再確認するはずだとも考えた。……罪もない人々の周囲にあれほどすばやく牢獄が建てられ、ついでほとんど痕跡もないほどに消失したのはいったいなぜか、日系人は、あれほどまでに憎まれ、恐れられ、虐待され、見捨てられたのはなぜなのか？ 彼女は問い続けている。

1900年、彼女の祖父母がアメリカに到着したとき、やがてひとつの戦争は自分たちの人生をちょうど真ん中で中断させ、子供たちを散り散りにし、夢を破壊するのだということを、どうすれば知りえたというのか？ なぜ、二人の祖母やその他の女たちは、失敗した男たちの不満に苦しみ、大恐慌時代を耐えつつ家族を捨て、子供たちが虜囚となったり戦場で死においやられるのを見るために、こんなに遠くまでやってきたのだろうか？ 彼女たちの身体の入り組んだ風景、あの沈黙の地図、刻みこまれた人生を、誰が読むことができたろう？ という疑問を投げかけている。

この写真集の最後の文章にも、「地図」という言葉が使われている。以上のような彼女の作品ならびに書評からもわかるように、彼女の作品、さらには彼女の人生の中には、常に「地図」が存在し、「旅」を意識しているのである。

5 おわりに

本文の先に述べたように、日系アメリカ文学は三世の時代に入り、以前と内容が大きく変わりつつあると考えてきた。しかし、彼女の作品や意識を研究する中で、デイビッド・ムラという三世のアメリカ文学者とは、また異なった文学者の出現を意識せざるを得ない。

ヤマシタは、日系人であるという自己の存在を認め、日本文化に親しみ、やがて同じように日本から異国に旅立っていった日系ブラジル人を研究するためにブラジルに向かい、アメリカの移民との比較研究をする。その研究の成果を文学作品という形で発表した。そして過去に存在したものが様々な形で破壊されていくことに警鐘を鳴らしている。

アメリカ社会には、様々な国からの移民が暮らし、その文化を維持しようとする者、又、全てを捨てて白人社会中心の人になろうと努力する者と、生き方は多種である。そんな中で、一世、二世が望んでいた彼らの一生懸命な人生を正しく伝えたいという思いが、新たな形で表現され受け継がれていくことを期待したい。

注

- (1) デイビッド・ムラの作品とその内容は、筆者の『金城学院大学論集』第45号に書かれているが、三世日系アメリカ文学者の中でも今までに現れなかったよう発想の中で作品を描いている。
- (2) カレン・テイ・ヤマシタは、ヴァーチャル・ワールドを第一世界の産物であり第三世界をマジカルな住処と捉えている。第三世界は、あらゆる経済的歴史的な活動行為が同時に存在するパラレル・タイムワープの状態に常に置かれていることが多く農耕産業や高度のテクノロジー系社会が併走している状況下であると説明している。
- (3) この4つのルールを比較することでヤマシタが、いかにそれぞれの国で文化習慣が違うか研究しているかが理解できる。又、日本のコンビニについても鋭い観察力が現れている。

日本のルール

1. 家や建物に入るときには靴を脱ぐ。
2. 人を訪ねるときには、必ずオミヤゲをもってゆく。
3. お箸をご飯茶碗に日本の柱のように突き立てたままにしない。
4. 4 という数字は避けなさい。
5. 自分の年齢と季節に見合った格好をすること。
6. 同じ仕事をして、男には千二百円、女には九百円を払うべし。
7. トイレではスリッパを使いなさい。そしてそれをトイレに脱いでく
るのを忘れない。
8. 主の側に強いられるまでは、すべてエンリョすること。
9. お風呂場ではお湯に浸かる前に浴槽の外で体を洗うこと。そしてタ
オルはお湯につけてはいけません。
10. 車は左側通行。道が狭すぎるときには、真ん中を走りなさい。
11. キモノを着るときは、左側を前にする。
12. 昇給と昇進に関しては、一覧表になった年齢別の規定に従うこと。
13. 彼の意見は彼女の意見は私の意見はあなたの意見。はい、賛成で一
す。

ブラジルのルール

1. ルールというものは無い
2. 全てのルールは破ることも回避することもできる。
3. ダール・ウン・ジェイチーニョ（何事にも必ず抜け道があるもの。）
4. パーティーにはいつでも赤ん坊や子供をつれてゆくこと。
5. 男はベランダでビール。女は台所に集まる。
6. パーティーでおいとまするときには、たっぷり一時間ばかりかけて
全員にキスをしたり抱きしめたりすること。
7. 女性どうし。キス二つなら、ただの挨拶。キス三つは、結婚のしる
し。キス四つは、義母と一緒に暮らすのを避けるため。
8. 男性どうし。左手は相手の肩に。右手でおなかをぼんぼんと叩く。
9. 神聖不可侵なものは何もない。ジョークのネタにせよ。
10. ある状況を巧く利用したからって、別に盗んだことにはならない。
11. 何をやってもうまくゆかないのだから、何もしないことが最善策か
も。

アメリカのルール

1. 英語を話しなさい。
2. 金持ちがルールを作る。
3. 公共の場所および飛行機では禁煙。
4. ともかく、やってみる。
5. 疑わしいときには弁護士に相談せよ。
6. コークを飲もう。リアルなものを楽しもう。
6. われわれが世界。
7. わが国が、地球上でもっとも幸福な場所。
8. アメリカン・エクスプレス、マスターカード、ヴィザが使えます。

サークル K のルール

1. 自分の祖国に移民せよ。
2. 好きな料理は自分で作れるようにする。
3. つねに、その次の問い、を問うこと。

Works Cited

- 今福竜太郎、カレン・テイ・ヤマシタ：(宮田和樹訳)、『作家のラティチュード (緯度=自由度)』、INAX 出版、1997。
- エレイン・キム。『アジア系アメリカ文学』(植木照代他訳)。東京：世界思想社、2002。
- ヤマシタ・カレン・テイ。『オレンジ回帰線』(管啓次郎訳)。東京：INAX 出版、1997。
- Ymashita Karen Tei, *Tropic of Orange*, Minneapolis : Coffee House Press, 1997.
- ヤマシタ・カレン・テイ (江口研一訳)、「ヴァーチャル・リアリティ VS マジック・リアリティ」。『すばる』17号 (1995年8月)。
- Yamashita Karen Tei, *Circle K Cycles*, Minneapolis, Minn, Coffee House Press, 2001.
- Yamashita Karen Tei, *Brazil-Marú*. Minneapolis, Mine: Coffee House Press, 1992.
- Yamashita Karen Tei, *Through The Arc of The Rain Forest*, Minneapolis, Mine : Coffee House Press, 1990.
- 新谷正卓写真集「約束の大地／アメリカ」、東京、みすず書房、2000年9月。
- 山本茂美、「ある日系アメリカ文学者のメッセージ」。『金城学院大学論集』

第44号（2003年：335～348）。

山本茂美、「否定された日系人としての出自の復元——David Muraの思い出について」。『金城学院大学論集』第45号（2004年3月：239～254）。

<http://voices.cla.umn.edu/newsite/authors/YAMASHITAKarentei.html>

<http://www.cafecreole.net/travelogue/karen-j.html>

Work Consulted

今福竜太編『ワタクシノタンキュウ』。東京：岩波書店、2002。

今福竜太、沼野充義、四方田大彦編。『私の謎／フェルナンド・ペソア〔ほか著〕』、東京：岩波書店、1997。

男女共同参画社会における 言語とジェンダーに関する一考察

相川由美

0. はじめに

平成11年に「男女共同参画社会基本法」が公布・施行されて以来、全国の地方自治体は男女共同参画社会の推進を図るため、様々な取り組みを盛んに行っている。そんな中、小牧市では教育委員会主催市民大学こまきみらい塾が開講されており、一般市民を対象とした男女共同参画に関する多数の科目が設置されている。履修の手引きによると、みらい塾の目的は「ジェンダーに気づき、パートナーシップにめざめ、エンパワメントを身につけるための学習の場。」である。筆者は平成16年5月から7月まで、『ことばとジェンダー』というテーマで講師を務めた。市担当者によると、言語に関係する科目は今回が初めてであるとのことであった。そのため、社会言語学的な視点からことばとは何かを概観した上で、ジェンダーとの関係を述べる形で講座を進めていった。

本稿は、市民大学で行った講義の内容を基に、社会とことばの関係がジェンダーにどのように関係しているかを述べ、男女共同参画社会を推進するために、言語に対してどのような意識を持つべきか考察するものである。

1. 言語とジェンダーを考える前に

我々人間は、言語とは切っても切れない関係にあるのは言うまでもない。あまりにも身近にあるため、それがどのようなものであるか、また我々の属している社会や文化とどれくらい密接に関係しているか考える機会はあまりないように思われる。よって、まず我々が日常使用している言語について再考する。

1.1 言語とは何か？

言語の定義については様々なものがあるが、大きく分類すると1. コミュニケーションの体系、2. 思考および思想の手段、3. 文学的な表現の手段、4. 社会的慣習の手段、5. 政治的な議論の問題、6. 国家樹立のための原動力、などが挙げられる (O'Grady and Dobrovolsky 1995: 1)。これらが示すように、言語は人間の思考や個人対個人のコミュニケーションのようなものから、政治や国家などのレベルまで関わっており、人間の活動の根幹をなすものと考えられる。以下で更に詳しく言語について述べる。

1.2 コミュニケーションのための言語

人間は他者と関わりながら生活している。そのため、必ずコミュニケーションという問題が起こってくる。コミュニケーションには、大別して言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの2つに分けられるが、ここでは言語コミュニケーションについてのみを扱うこととする。

古田他 (1987) によると、人間がコミュニケーションを行うには前提条件がいくつかある。その中から特に、後ほどジェンダーとの関係を考える際に重要となってくるものを中心に概観する。まず第一に、人間は

コミュニケーションを避けられない。これはメッセージの送り手の意思の有無に関わらず、他者がそれを解釈して意味付けする限り、何かは伝わるからである。第二に、コミュニケーションは送り手と受け手を結ぶ関係と、送り手と受け手が発する内容の二つの面を持っている。つまり、コミュニケーションをする際に、二者間の関係を考慮に入れると共に、メッセージの内容が受け手に適切に伝わるかどうかを配慮しなければならないということである。第三に、コミュニケーションの参加者は、お互いの人間関係に注意を払い、なるべくお互いが平等になるようにしなければならない。逆に、お互いに違うものだという前提でコミュニケーション活動を行い、足りない部分をお互いに補い合うことも必要である。

以上はコミュニケーションの場で、考慮に入れるべき点であると思われる。これらを適格に実行すれば、我々のコミュニケーションにズレが生じることは最小限に抑えられ、お互いに誤解して、傷付けあつたりすることも少なくなるだろう。このことが、男女のコミュニケーションにも当てはまるのではないか。詳細については、後述する。

1.3 社会を映し出す鏡としての言語

社会言語学の分野では言語状況を見れば社会の状況が分かるほど、言語と社会には密接な関係があると考えられている。サピア・ウォーフの仮説では、言語は人間の認知や思考を決定すると言われている。もっと詳しく述べれば、その言語の話し手はその言語に提供された言語の範疇に従って外界を眺めるので、その言語独自の思考の仕方や認知の仕方が生まれてくる。そのため、言語は話し手の世界観にも影響を与えて支配することさえもある (Trudgill 2000)。ゆえに、我々が使用する言語はその社会や文化にとって独自のものとなったと考えられる。ある言語の話し手が、自分の属している社会や文化にとって必要な言語表現のみを使用し、不必要であつたり適切ではないものを省いているのはこのよう

な仮説の内容と結びついている。

2 言語選択に見る社会の姿

1.2と関連して、言語が社会といかに結びついているかを更に概観し、人が言語を選択する場合どのように選択しているか考察する。

2.1 言語選択の方法

Halliday (1994) は、言語は体系から成っており、人間がどのように言語を使用するか選択する場合、現実社会の状況と照らし合わせて、その状況に合った言語を体系の中から選択すると述べている。また、Holmes (2001) も同じ内容を言い表すために、1. 自分自身と相手との距離、2. 社会の中での自分自身と相手の位置や地位の関係、3. コミュニケーションする場の改まりの度合い、4. コミュニケーションの目的や話題、といった要素を考慮して、コミュニケーションの場に応じた言語を上手く使い分けて円滑なコミュニケーションを進めていく。

2.2 言語の使い分けと社会との関係

2.1で人の言語選択の要因を見たが、更に詳細に人間はなぜ同じことを様々な言い方で言うのかについて見ていく。そして、その実態を考えたつ人が社会生活の中でどのように言語を使い分けるのか、また、周囲の人々からどのように話をされるのか考え、その場に合った言語の使い方についてまとめる。

表1 一人の男の子が一日のうちに人にどのように呼ばれたか。

Robert	祖父母	家、手紙
	先生	学校
	医者	病院、医院
	母	イライラしている時
Robbie	母、父	ほとんどいつも
Robbie-Bob	母	優しい感じの時
Rob	友達、兄弟	ほとんどいつも
Bob	友達	家の外で自分に対して腹を立てている時
Robert Harris	両親	とても腹を立てている時
Mr Harris	見知らぬ人	手紙、店

(Holmes 2001: 13)

表1は、一人の男の子が一日に人にどのように呼ばれたかを示す表である。これによると、この男の子は相手や会話の場によって、七通りもの呼ばれ方をされている。これは、社会の中で男の子と男の子と関わっている人物がどのような関係にあるのか、またどのような状況の下で会話がなされているのか、そして会話を行うときの両者の感情等の要因が複雑に絡み合い、七通りもの呼び方が存在する。

もう一つの例を見てみよう。今度は一人の女性が相手からどのように呼ばれるかである。まず、女性は毎日午後5時になると、会社の共同経営者から“Goodbye Margaret”と言われ、その後自分の秘書には“Goodbye Ms Walker”と言われる。そして、管理人からは“Bye Mrs Walker”と言われ、やっと家に帰り着くと、“Hi mum”と娘からと言われる。また、自分の母親からは“Hello dear, have a good day?”と、夫からは“You’re late again!”と言われた。その後、近所のフラワーアレンジの教室に行くと、そこの主催者からは“Good evening, is David Billington?”と言われたために、“No, it’s Ms Walker, but my husband’s name is David Billington?”と自らの名前について繰り返した。最後に、友達が“Hello Meg, sut

hay ti?”と言った (Holems 2001 : 2-3)。この例でも、この女性と相手との社会での位置関係や親しさの違い、そして女性が身を置く場の違い等で呼び方が違っている。特に注目すべきは、この女性が会社では一人の会社経営者という人間として捉えられているが、地域のフラワーアレンジの教室では夫の妻という立場で認識されている。これは、英語圏の社会だけで見られる現象ではなく、日本でも非常によくある表現である。たとえ結婚していたとしても、会社では「田中さんの奥さん。」と呼ばれることはないが、地域社会では女性の場合個人の名前を言うよりは、「田中さんの奥さん。」と呼ばれることの方が多い。

2.3 会話の原則に沿った話し方

我々が会話をする時は、常に協調の原理 (Leech 1983 : 7-8) を念頭に会話をしている。強調の原理を極簡単にまとめると、1. 量の公理 (話をするときには、適切な量の情報を与えること)、2. 質の公理 (真実を言うこと)、3. 関連性の公理 (関連性のあることを言うこと)、4. 様態の公理 (明確に順序正しくいうこと) である。これらの公理に従って会話を進めていけば円滑に会話が進み、誤解が生じず人間関係も良好に保てる。ただし、この原則を破ってわざと何らかの効果を狙う場合もある。よくある例として、窓を開けてほしいと思ったとき、はっきり言わず「この部屋、ちょっと暑くない？」というようなときである。遠まわしに言って相手に何かをしてもらおうとする言い方は、1の公理に関係している。女性は筋道を立てて理論的に話さないという間違った解釈が、多くの社会言語学の研究の中でなされている (中村 2001) が、これは女性がこの強調の原則にのっとりた話し方をすれば防ぐことができるのではなかろうか。

3 女性と言語の関係

1.2で述べた言語と社会の間関係を基に、本節では女性のことば使用の特徴とその理由をまとめ、日本社会が女性に要請していることや、日本社会での女性に対する概念が女性のことばにどのような影響を与えているか検証する。

3.1 女性のことばの特徴

表2 女に戒められた言葉づかい・奨励された言葉づかい

時代	戒められたことばづかい（－）、奨励されたことばづかい（＋）
平安	（－）早口で軽い、論理的で理屈っぽい （－）応答する、聞き返す、言い争う、長い発言
鎌倉・室町	（－）高い声で笑う、冗談を言う （＋）低い小さい声で話す、（－）乱暴な口の利き方
江戸時代	（＋）ことばを少なく、静かに話す （－）口を開いて歯を見せない （－）多言なれば離縁する、口うるさいおしゃべり （－）流行語、下品なことば （＋）低い小さい声で弱々しく、理屈を言わない、漢字は音読みでなく訓読み （－）武士のことば、「てにをは」を間違える、多言 （－）男ことば・漢語・流行語 （＋）どのことばにも「お」と「もじ」をつけて柔らかくすべし
明治	（－）「てよ・だわ」ことば、漢語
昭和・戦前	（－）ぞんざいな口の利き方、洒落、警句、流行語 （－）漢語 （－）外来語、「きみ」「ぼく」 （－）「お」の乱用（例 おビール）、敬語の乱れ （－）「てよ・だわ」ことば （＋）若い女性はたどたどしく、全部を言わず、途中で忘れて恥ずかしそうにする （－）新語 （＋）丁寧なことばづかいすべし

時代	戒められたことばづかい (-)、奨励されたことばづかい (+)
昭和・戦後	<ul style="list-style-type: none"> (-) 若い知識女性の漢語の使用 (-) 男のことばの女性化 (+) 女の心理・生理。自然に基づく発言・発声・終助詞・感動詞 (-) 「お」のつけすぎ (+) 女性特有の終助詞、女性独特な柔らかい話し方
現代 80年代	<ul style="list-style-type: none"> (-) 若い女性の芸人は口を開けないで話すため理解できない (-) 女の声が大きく高い、口を大きく開けるのははしたない (-) 若い女性「区切りを伸ばす」「わたしはァー」 (-) 女性教師の男子生徒「クン」付け (-) 「ウソー・ホントー・カワイイ」ばかり使う (-) 女性教師の男子生徒「クン」付け (-) 若い人の早口、語尾が上がる (-) 余計なことを話す、面白みに欠ける、同じことを繰り返す、挿入句が多く幼稚、声小さく聞き取りにくい (-) 女性教師による姓や名の呼び捨て (-) 若者、語尾をのばす

(女に戒められた言葉づかいには(-)を、奨励された言葉づかいには(+)を付した。)

(中村 2001: 206-207)

表2は女性が使用することばについて、良いとされるものと良くないとされるものを順に述べたものである。この表に挙げられている内容は、男性社会からの要請であると考えられる。女性がどう思おうが、男性にとって都合のよいことばを使っていればよいという、日本社会の状況が見て取れる。特に、注意すべき点は女性教師が生徒を呼び捨てにするのを戒めている点が、日本での女性が置かれている状況を端的に表している。日本では、女性の教員が生徒を呼ぶ時、まず呼び捨てにはしない。女性教員に呼び捨てにされた生徒は恐らく反感を持つであろう。その一方、男性教員が生徒を呼び捨てにしても、疑問に思う者はほとんどおらずこれが普通だと考えるだろう。このように、同じ職業でも男性と女性では使えることばに差ができてしまい、女性は男性よりも全ての場合で丁寧でなければならない。

このような現象は、1.2で述べた言語は社会の状況に沿って選択される

という概念によるものである。我々は、好むと好まざるとに関わらず、ある特定の社会に属しているために、その社会の中で可とされる言語を選択しなければならない。そのため、日本人女性の場合は、いつも丁寧で、なるべく穏やかに男性を敬った話し方をしなければならない社会に属していると考えられる。これは、女性が男性に従うものであるという男性側の固定観念に基づいたものと言える。

3.2 女性語使用と社会との関係

3.1で見た女性に推奨されることば使用と、そうでないことば使用を生み出した女性のことば使用についての規範を正当化する理由について、以下で述べていく。

表3 「女ことば」規範を正当化するディスコース

時代	内容
鎌倉・室町	女は本来罪のある不浄のもの（だから話す必要なし）
江戸	婦徳・婦言・婦容・婦功の「四行」、娘の時は親に従い結婚したら夫に従い、老いては子に従う「三行の教え」 多言は品がない 多弁は下品
明治・大正	仏教・儒教思想
昭和・戦前	洒落や警句は品が下がる、おとなしくない 漢語は自然優雅を第一とする婦人のことばとして不適切 外来語・流行語は大和撫子の奥ゆかしさを保つ上で軽佻・軽薄に思われる 女学生の「君・僕」に特に保護者の留意を願う 日本婦人語は世界に類を見ない精巧な敬語法、子供のことばは母親次第、日本婦人道のために日本婦人語を身につけるべき 新語、流行語は乱暴・下品・語呂が悪い・生意気・情けない、二千年以上も経ている日本の国民だから女性語を使い分けられる 女性語は喪失に直面しているが喪失だけは防ぎたい
戦後	女性の漢語使用が増加しているが女の心理・生理・自然に基づく発音・発生・終助詞・感動詞は残る 女性独特なやわらかい話し方、女らしさはあくまで出してもらいたい

時代	内容
現代	母親が学校の先生に向かって自分の長男を「おにいちゃん」という家庭のしつけはゼロ 現代の日本の家庭で女子へのことばのしつけに責任を持って堂々と発言できる女性は皆無 おしゃべりをしすぎて自分自身をおとしめないように 柔らかな言語表現は女性の生理的本性に基づく、女性の表現は女性の感性に基づく生理的要因に根ざす

(中村 2001:211)

表3は、女性のことば遣いの規範を正当化する理由の歴史の変遷をたどったものである。この表にまとめられている女性のことば使いの規範とは、男性側が勝手に作った規範であり、女性からは到底受け入れ不可能なものと思われる。裏を返せば、女性が男性の意に沿わないことば使いをするために、このような規範が作り出されたものと思われる。これを見ると、鎌倉・室町と言った時代から既に女性は不浄のものであるから話す必要なし、という信じがたい理由付けがなされていたが、各時代の支配者である男性達が女性を支配し自分達男性の威信を維持するために、言語を用いて政治的な政策を実行していたと考えられる。女性を押し込め込むことが、政治的成功に結びつくと考えていたのであろう。このことから、いかに言語と社会には強い結びつきがあるか理解できる。

3.3 女性のことばの使い分け

このように女性は男性社会からの無理な要請に従わざるを得ないために、女性ことばが発達していったと思われるが、それを逆に生かしている女性たちが存在する。これは、いわゆる風俗関係や水商売という場で働く女性に多く見られる現象である。彼女らは、女性らしいことばを多用することにより、自身が女性であることを積極的にアピールし、男性社会からの要請に応えることにより、経済力を手に入れようとしている。また、女性らしいことばを積極的に活用して「よい妻、よい母、女らし

い職業人」を手に入れ、男性社会に適応し、よりよい生活を手に入れようとする女性たちもいる（中村 2001）。

こういった女性たちは、男性社会に異を唱えることなくそれを逆手にとって上手く適応している。1.2で概観した、人間の言語選択の方法から考えると、彼女達が自分の所属している社会の中で、自分自身の立場を十分理解し状況に合った言語を適切に選択していると考えれば、その点ではおかしいことではない。ただし、男女共同参画という立場から考えた場合、女性を前面に出した言語選択をするのではなく、もっと一人の人間であるという感覚を持つべきであろう。

4 メディアに見ることばとジェンダー

4.1 新聞に見る女性の特記の現状

始めに、新聞記事で女性と男性の区別はどのようにされているか、一つの例を見てみる。

小6同級生殺害：ネット掲示板でトラブルか 女児家裁送致
長崎県佐世保市の市立大久保小学校（出崎睿子（えいこ）校長、児童数187人）で、6年生の御手洗怜美（さとみ）さん（12）が同級生の女児（11）に切りつけられ殺害された事件で、長崎県警の調べに対し、補導された女児が「インターネットの掲示板に（怜美さんに）書き込みをされた」と動機につながる供述をしていたことが分かった。（毎日新聞 2004年6月2日）

この記事では、犯行を行った女子児童について最後まで繰り返し『女児』という単語を用いているが、この児童が女子であるということが分かれ

ば、何度も『女兒』を使用する必要はない。日本の新聞では、ことさら人物の性別を強調することが多いように思われる。

こういった発行物内のジェンダーに関する記述について、岐阜県は県で発行する刊行物や印刷物の全てを独自のジェンダー・チェックマニュアルを用いてチェックしている。その一部を取り出してみる。

A 性別によって人の特徴を決めつけていませんか。

性による特徴の決めつけ例

- ・「女は弱く・男は強い」「女は感情的・男は論理的」「女らしい優しさ、男らしい決断」など性による決めつけの表現の例
 - ・「女だてらに」「女らしいきめ細かさ」「女の感性」「男は泣くものではない」「男らしく豪快に」「雄々しい」「女々しい」など
- 同じ行動でも、男性なら「積極的」、女性なら「気が強い」など異なる評価・基準を用いた表現をしていませんか。

B 女性は「赤系」、男性は「青系」など、服装や持ち物の色を性別で固定化していませんか。

C 「人形遊び」は女性、「野球」は男性など、遊びやスポーツの種目を性別で固定化していませんか。

D 男性を「氏」で、女性を「さん」で表現したり、男の子を「くん」、女の子を「ちゃん」と表現していませんか。

E 男性と同じ会社員なのに、女性を「OL」、「キャリアウーマン」と別に表現していませんか。

F 男性を表す言葉を基本的なものとして、女性であることを強調するための表現をしていませんか。

- ・「幼児/幼女」、「老人/老女」、「養子/養女」、「悪人/悪女」など（幼男、老男、養男、悪男という表現はありません）

G わざわざ「女性冠詞」をつけていませんか。

・「女性弁護士」「女性社長」「女教師」「女流作家」など

(岐阜県地域県民部男女共同参画 1999)

前出の『女兒』はこのマニュアル中のFに当てはまる。なお、『女兒』と同じように『男児』は数多く使用されている (<http://www.asahi.com/edu/kosodate/OSK2004103000004.html>) ため、日本では性別を強調するのが普通であり、言語において国民の手本とならなければならないマスメディアが、先頭を切って性別を強調していると言わざるを得ない。

4.2 テレビドラマのタイトルに見る女性の強調

(1)-(4)は、現在まで放送されたテレビドラマのうち、タイトルに『女』という語が入られているものの一部である。

(1) 女子アナ。(フジテレビ)

(2) 女医・優 (東海テレビ)

(3) 女刑事ふたり・胸に十字架、女料理長麻生祥子の推理

(テレビ朝日)

(4) 女弁護士高林鮎子、女検事霞夕子、女監察医室生亜季子

(日本テレビ)

これらのタイトルに共通して言えることは、すべて『女』という冠詞が職業の前に付いていることである。(1)の場合、『女子』をとると『アナ』だけになってしまい、視聴者の興味を引くどころか何を言おうとしているのかさっぱり分からないタイトルとなってしまう。たとえ『アナウンサー』としても、これもなんら興味が出ないであろう。最近、男女を区別した職業の呼び方を改める動き、たとえば『保母』を『保育師』としたり、『スチュワーデス』を『客室乗務員』等としているにも関わらず、

この『女子アナ』については改善されていない。また、(2)-(3)についても同じようなことが言える。これらのドラマで登場する主人公の職業は一般的に男性の職業と考えている人が多い。そのため、そこに『女』を付けると一種独特な雰囲気をかもし出すように思われる。これは3で見たように、男性中心社会の中で、女性が商品化されている例といえる。テレビドラマのタイトルの場合、『女』と言う冠詞が商品価値のあるものとされている。

4.3 テレビドラマの台詞に見る女性とことば

次にテレビドラマで放送されたものの中から、いくつか例を挙げて検討する。ここで取り挙げるのは、典型的な女性ことばを使った表現が多いものと、そうでないものであり、両者を比較することにより、その背景を考察する。

- (5) ぼたん (母):麗華、会いたかったわ。麗華、元気だったのね!
麗華 (娘):ママは? ママは大丈夫?
ぼたん:ママもすっかり良くなったのよ。
麗華:そう、良かったね、ママ!
由岐雄 (父):ぼたん、しばらくだったね。もっと早くに来たかったけど、療養の邪魔をしたらいけないと思って。
ぼたん:お座りになって由岐雄さん、こちらに。
- (6) 香世 (母の妹):まあ、そうだったの? 牡丹は視力が回復することもあってお医者様も言ってたわ。
- (7) 香世:ねえ、牡丹あなた由岐雄さんと麗華と一緒にミラノへ行ったら、行ってらっしゃいよ!
麗華:ママ、行きましょうよ!
ぼたん:駄目よ、駄目よ、香世。

(東海テレビ『牡丹と薔薇：完結編』2004年4月23日)

(5)-(7)は全て同じドラマからの引用である。ここで成人女性の登場人物は全て極めて女性的な表現を使っている。具体的には文の語尾に「～わ」「～のよ」「～なさいよ。」等の一般的に女性がよく使うとされているいわゆる『女性語』と言われるものが多数登場している。ただし、子供の場合は女の子であっても男女の区別はそれほど感じられない。これについて、女性はある一定の年齢に達すると自分の社会の中での立場を考えながらことばを使い分ける(中村 2001)ので、子供には女性語を使わせる必要がないため、男女の区別のない表現となっている。そして、女性語を使うのが妥当な状況においては女性語を使う。

一方、母親が久しぶりに会った娘の父親に向かって『お座りになって由岐雄さん、こちらに。』と言っている箇所が出てくるが、これは日本社会が長年に渡って家父長制とされてきた社会制度や慣習の問題を正に表している。また、3で見た「女ことば」規範を正当化するディスコースに、脚本家がしっかり従ったためであるとも言える。そのため、大部分の男性はこの部分を聞いた時、さして違和感を覚えないであろう。むしろ、こちよいと感じるかもしれない。

(8) 吉森(教師)：じゃあお前、一度兄貴に相談してみろよ。

ユキ(生徒)：できるわけないよ。

吉森：どうして？

(中略)

吉森：しかしお前、お兄ちゃんの邪魔したくなくて、うちに来たのか？じゃあ、どうするんだ？

ユキ：子供産んで育てる力なんてないし、お金なんてないし。

(9) 女子生徒A：テメエ、どういうつもりなんだって、聞いてるん

だよ。はっ？ どうなんだよ。何とか言ってみろよ。答えるよ！

吉森：お前ら、何やってんだよ。こら、離せ！

女子生徒B：吉森！

女子生徒A：コイツ、ユキを孕ませたんだよ！

(TBS テレビ『ヤンキー母校に帰る』2003年11月21日)

(8)-(9)は高校の男性教員と女子生徒のやり取りである。女子生徒は相手が教員だからといって、特に丁寧話しているわけでもない。しかし、この女子生徒は産婦人科での検診の際担当医師には「です」「ます」のような丁寧語を使い話をしている。このことは、2で述べた様々な言語表現を、状況に応じて使い分けている良い例である。ただ、男性教師は生徒を『お前』と呼んでいる。だが、この教師が女性であったらこの表現は出てこないだろう。これは、3でみた女性のことば使いとして不適切な例に当てはまり、男性中心の日本社会では敬遠される表現だからである。一方、(9)は、友達の妊娠を知って相手の男の煮え切らない態度に激怒した女子生徒が、相手の男の胸倉をつかんで詰め寄っている場面である。この時、女子生徒は通常男性が使うのにふさわしく、女性には不適切であるとされる汚いことば使いをしている。感情が高ぶってコントロールできなくなるような時、女性であっても一般的に男性と同じような表現を使用する場合がある。また、女子生徒が男性教員を『吉森』と平気で呼び捨てにしているが、高校生のような若い世代には、ことば使いの男女差などあまり関係ないのかもしれない。このことについて、中村(2001)は、瀬戸市内の中学校の生徒へのアンケート結果を例に挙げ、女らしいことばも男らしいことばも特に分けて使っていないという生徒が圧倒的に多いと述べている。このことから、女性はある一定の年齢に達したとき、社会からの要請を無意識のうちに受け入れ、女性は女性と

して適切なことば使いを受け入れるのではなからうか。

4.4 テレビコマーシャルに見る女性とことば

以下に、ある若い女性向けの小型自動車のコマーシャルのコピーを挙げる。

(10) 行くぜ、私。

(マツダ『デミオ』テレビコマーシャル 2003年11月21日)

ここで使用されている『行くぜ、私。』という表現は、男性的なものや女性的なものとは混ざっている。これは、現代の若い女性の間ではこのような使い方が極普通になされていることの証明である。若い女性が連帯意識を持って好意的に受け入れると考えた上での表現の使用である。また、女性が個人内コミュニケーションを行う場合は、コミュニケーションの対象者が存在しないので周囲に気を遣う必要がない。そのために、『行くぜ』という表現も自然に使用できると考えられる。

5 結語

ここまで、社会の中で女性がなぜ女性らしいことばを使用するのか、またそこにある社会的な背景を概観してきた。そして、4でメディアの言語を中心に日本社会での女性とことばの関係について検討したが、日本社会では男性中心の社会構造が存在するため、男性が女性を支配するという構造が長年に渡り続いた。男性が男性としての威信を維持するための道具として言語は使用されてきたようである。メディアで使用されるような言語は一般的な社会で受け入れやすいものが選択される。それ

ゆえ、テレビドラマのような作られたものは商品としての価値という側面もあるために、社会で受け入れられやすい典型的な日本人の表現が使用される傾向にある。そのため、実際の言語使用とは多少異なっている部分があるように見受けられる。この部分は更に考察しなければならない事柄である。

これらを踏まえて、男女共同参画社会を推進するために必要な言語への態度を考えてみると、まず女性が女性らしい表現をどのように受け止める、それぞれの人が自分自身で女性らしい表現を受け入れるか受け入れないか決めるべきである。それを考える際に注意すべきは4.3や4.4に見られた、現代の若い女性は女性が男性的な表現をしようすることにそれほど違和感を持っていないという傾向である。よって、こういった最近の現状や社会の変化を柔軟に受け止め考えていくべきである。

また、男性側には女性らしい表現というものが、日本の長い歴史の中で男性が社会を支配するために作り上げられたものであり、女性ことばの使用を正当化する理由には何ら適切な根拠が見られないことを認識する必要がある。そして、男性と女性という性別による違いで人間関係を考えるのではなく、それぞれの個人が社会を作り上げていく一員であるという意識を持たなければならない。誰もが同じように様々な権利を持つ人間であるという感覚を持つべきである。そうすれば、長年に渡る男性支配の社会構造は、言語という側面から少しずつではあるが、改められていくに違いない。

注

* 前述のように、本稿は平成16年5月から7月の小牧市民大学こまきみらい塾開講科目である『ことばとジェンダー』での5回に渡る講義の内容に、大幅な加筆・修正を行ったものである。よって、講義での内容と大き

く異なっている部分が数多く存在する。また、本稿の中で、英語の“language”に当たる語についてはおおむね『言語』という表記を用いているが、実際の講義では一般市民向けの講座であるため全て『ことば』とした。ただし、本稿の中においても『ことば』とした方がより適切だと考えられる場合は、それを用いている。

参考文献

- Aitchison, J. (1995) *Linguistics: An Introduction*. London: Hodder & Stoughton.
- 古田暁 石井敏 岡部朗一 久米昭元 (1987) 『異文化コミュニケーション』
東京：有斐閣
- 岐阜県地域県民部男女共同参画課(1999)『ジェンダー・チェックマニュアル』
(<http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s11123/gender/index.htm>)
- Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar: Second Edition*.
London: Arnold.
- Holmes, J. (2001) *An Introduction to Sociolinguistics: Second Edition*. London:
Longman.
- 飯野公一 恩村由香子 杉田洋 森吉直子 (2003) 『新世代の言語学: 社会・
文化・人をつなぐもの』 東京：くろしお出版
- 小牧市教育委員会(2004)『こまきみらい塾履修の手引き』(<http://www.ma.ccnw.ne.jp/manabi1/>)
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- 中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』 東京：勁草書房
- 日本放送協会 (2004) 『NHK 日本語なるほど塾 5月号』 東京：日本放送協会
- Romaine, S. (1994) *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics*. Oxford:
Oxford University Press. (土田滋 高橋留美 訳 『社会の中の言語』東京：三省堂)
- Trudgill, P. (2000) *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society. Fourth Edition*. London: Penguin Books.

ユルスナールの思考における東洋的要素

——『目を見開いて』を中心に——

坂本久生

はじめに

マルグリット・ユルスナール（1903–1987年）は、作品の傾向やインタビューなどでの発言内容から、思想家、文明批評家といった面も強く感じさせる作家である。もっぱらフランス語によって表現活動が続けたユルスナールだが、古代から現代にいたる東西の文化、宗教、思想を学び続けて自分の考えを形成した彼女の考え方には、東洋的要素も広く認められる。本稿では、こうしたユルスナールの考え方における東洋的要素について検討してみたい。

ユルスナールが東洋思想をどんな書物を通じて吸収していったか、ということについては、近年の資料の刊行により、ある程度具体的にわかるようになってきた。⁽¹⁾しかし、ここでは、ユルスナールがいかなる道筋をたどって東洋思想を吸収したかということはあまり細かく問わないで、熟年期において形成されているユルスナールの考え方にみられる東洋的な要素を問題とする。

ここでおもな素材とするのは、『目を見開いて *Les yeux ouverts*』という対談集（1980年刊行）で、これは数年にわたって何回も行なわれたインタビュー（マチュー・ガレーの質問に答えたもの）を一冊にまとめたも

のである。それまで、ユルスナールは自らのことについて書いたりすることは少なかったが、この本によって、ユルスナールがどういう人なのか、どんなことを考えて作品を書いたのかといったことが、かなり分かるようになった。インタビューの時期は、『世界の迷宮』の第一部、第二部がすでに出版され、第三部に取り組んでいる頃で、対談では、この執筆中の第三部、そしてまた構想段階の本のことも話題になっている。

ただ、『目を見開いて』という対談集に限っても、話題が広い範囲に及ぶので、本稿では、対談の時期におけるユルスナールのごく基本的な考え方をとりあげ、そのつながりを提示して、「思想家」あるいはむしろ「思索家」としてのユルスナールについて考察してみたい。

1 ユルスナールの文化的帰属

この対談集でも自ら語っているように、ユルスナールはベルギーおよび北フランスで生まれ育った。母親は出産後まもなく亡くなっていたとはいえ、親戚が多く、「大家族」に近い状況、それから羊や犬などの動物とも親しくする環境で育っている。ユルスナールが幼少期を過ごしたところは、多言語の国ベルギーのなかでもフランス語が用いられている地域、さらに北フランスということで、フランス語圏であった。

言語については、少女期にラテン語、ギリシア語の古典を学び始めるなど、ユルスナールは生涯にわたって多くの言語を学んでいた（この対談集の刊行よりあとのことになるが、三島由紀夫の『近代能楽集』を仏訳するさいに80歳くらいで日本語にも取り組んでいる）。しかしながら、ほとんどの言語については、書かれたものを読むというアプローチで、表現する場合にはフランス語を使っている。彼女にとって自分の考えを十分に表現できる言語はフランス語であった。

このことから、ユルスナールの文化的基盤は西欧的なものであるとひとまず言うことができる。ユルスナールの場合、西欧的な文化基盤の上に、東洋的なもの（あるいは非・西欧的なもの）が積み重なっているが、西洋／東洋の対決を経てというよりも、さまざまな要素をごく自然にとりいれていったように思われる。

帰属について、ユルスナール自身は、次にみるように、血筋や言語（母語）よりもどの文化に属しているかという点を重要視していて、「私はフランス文化に属している人間だ」と言っている。

(a) 私はフランドル人であるのと同じくらいフランス人です。父方の家系の半分が（……）、ベチューヌの出で、フラマン語を話したことは一度もありませんでしたし、母方の家系はワロン系のベルギー人で、完全にフランス語だけを話していたからです。しかしそれだけではありません。血筋や言語による自己同定よりも重要かつ検証可能なのは、私がフランス文化に属する人間だということです。他のことはすべて、うわべだけのことです。しかし大小とりまぜてあらゆる文化と同じくフランス文化は、世界文化 (la culture universelle) の一部だと認めるのを拒む瞬間から硬直化し衰退します。私はいくつかの国をもっているのと同様に、いくつかの文化をもっています。私はそのすべてに属しているのです。

(p. 315; p. 256)

ここでは、中ほどの「血筋や言語による自己同定よりも重要かつ検証可能なのは、私がフランス文化に属する人間だということです」という表現内容に留意したい。⁽²⁾

「血筋や言語による (par le sang ou par la langue) というときの「言語」とは「母語」を意味していて、どんな家系かどんな母語かは、それほど

重要ではない、という意識が働いている（この箇所は、以前、ユルスナールにおける「家族」の概念をめぐって、「非聖化」の局面について論じたこと⁽³⁾と照応している。「家系」についてユルスナールは、『目を見開いて』の他の箇所ではもっと先鋭的に「誰が親であるか、どんな家系であるか、それは偶然のなかの偶然に過ぎない」旨、述べている）。そして、「私はフランス文化に属する人間だ」の「文化」に通常の意味での「言語」が含まれると考えられる。

また、ここで言っていることは、「自分」の誕生について、帰属よりもむしろ、世界を自ら知的に捉え始めることを重視するというユルスナールの考え——「私の最初の祖国は書齋でした。私のすべての祖国は書物であり、私を産みだす人たちは作家なのです」⁽⁴⁾（『ラジオスコピー』、拙訳）——に裏打ちされている。

「検証可能」とされるのは、どのような言語で、どういう作家、どんな作品を読んできて自己が形成されたのか、といった形で提示できるからである。

さて、引用(a)では、「私はフランス文化に属する人間だ」と言っているが、終わりの方では、「私はいくつかの国をもっているのと同様に、いくつかの文化をもっています。私はそのすべてに属しているのです」とある。これに類する言説は、他の分野に関しても繰り返される。

(b) 私にはいくつかの祖国があるように、いくつかの宗教があります。ですから、ある意味で私はそのどれにも属していないのかも知れません。
(p. 381; p. 313)

文化については「私はそのすべてに属しているのです」と言っているのに対して、宗教の方は「ある意味では私はそのどれにも属していないのかも知れません」と続けている。しかし、ユルスナールの場合、宗教

についても「ある意味では私はそのすべてに属している」と言うことも可能であろう。

重要なのは、「私はフランス文化に属する人間だ」と認めると同時に「私はいくつかの文化のすべてに属している」と述べていること、特定の文化のみに属する人間だと自己規定していないことである。

引用(a)の「大小とりまぜてあらゆる文化と同じくフランス文化は、世界文化の一部だと認める」という箇所は、ユルスナールが、自分の属しているフランス文化を特別視しないで、世界文化の一つとして相対化して考えていることをはっきりと示している。この相対化は、明示的ではなくても、少し考えてみると、引用の(b)にも含まれていると言うことができる。

こうして、ユルスナールの考え方の重要な特徴として、「相対化」ということが言えるだろう。あらゆるものごとを別の視点——ずらした視点、超越した視点——からも捉えようとする態度が見られ、これは彼女の批判精神、さらには皮肉ともつながりを持っている。

なお、ユルスナールが「いくつかの文化」「いくつかの宗教」というとき、西洋および東洋の両者にまたがっている。

2 多様性

よく言われるように、ユルスナールは「多様性」を重視する作家である。ユルスナールは、人間、文化、宗教などが多様であることを認めて、それぞれを分け隔てしないで評価している。

「一」より「多」を重んじる姿勢は、ユルスナールにとって、ごく自然に身についたもののように思われる。というのは、彼女の少女期においてすでに、そのような態度がみられるからである。

次の引用をみてみよう。

- (c) ごく幼いころに私は、自分の周囲で自分の目に映っていた宗教、したがってカトリック教 (*la religion, telle que je la voyais autour de moi, donc la religion catholique*) と宇宙 (*l'univers*) のどちらかを選ばなければならないという意識を抱きました。その二つを結びつける手段があったはずなので、もしかしたら私はまちがっていたのかもしれませんが、でもそういう手段を私に教えてくれる人は誰もいませんでした。私には宇宙のほうがよかった。子供のころすでに、教会から出てきて、モン＝ノワールの森のなかを歩いていたときに、私はそう感じていたのです。そのころの私には、聖なるもののこの二つの側面が、相容れないものに見えていたのです。一方が他方よりはるかに広大に思えました。(p. 52; p. 41)

このエピソードは、少しあとでまた言及され、カトリック教（キリスト教）への評価が補足される。

- (d) キリストの受難という、あれほどにも人間的で心を揺さぶる物語を受け入れるのと同じように、私が本能的に受け入れるキリスト教にこそ、これらの美しい物語 [アイルランドの古代の聖人たちの物語] は属していたのです。ただ、私の村の司祭が教えていたのは、そういうものではありませんでした。それである日私は、つまらないいくつかの教義の寄せ集めかすべてか、どちらかを選ばなければならないと感じたのです。そして私はすべてのほうを選びました。あとになって東洋の宗教を学んだことが私の判断に影響し、私自身の根底に私を定着させ引き止めることになったのですが、同時に自然なめぐり合わせによって、私の子供時代のキ

リスト教をよりよく評価する助けにもなりました。(p. 53; p. 43)

ここでの状況は、正確に何歳のときといった具体的なことまでは分からないが（モン＝ノワールで生活していた頃のことだから、年齢を高く見積もっても10歳くらいということになる）、そのころの彼女が「カトリック教と宇宙」のどちらを選ぶかを考え、「宇宙」を選ぶという判断をした、というのである。

引用(c)の「カトリック教」と引用(d)の「つまらないいくつかの教義の寄せ集め」が対応しているが、これは、たまたま少女マルグリットが通っていた教会での司祭の教えがつまらないものに思われたということであって、のちに彼女がカトリック教あるいはより広くキリスト教のことを深く知るにおよんで、高く評価していることが分かる。

とにかく、子供のマルグリットは、誰かに言われてではなく、自ら「宇宙」「すべて」を選んでいく。

熟年期のユルスナールの考え方は、あたかもこの子供の頃の傾向がそのまま展開したかのような印象を受けるほどである（実際には、あとで述べるように、少し回り道をしている）。

宗教面における多様性の重視ということでは、次の箇所がユルスナールの立場を的確に表わしているように思われる。

(e) もっぱら一つの真理あるいは一つの神、もしくは神の不在を固執するのは、つねに危険なことです (Il est toujours dangereux de détenir en exclusivité une vérité ou un Dieu ou une absence de Dieu.)。

(p. 303 ; p. 246)

この文から、ユルスナールが「一つの神」「一つの真理」の主張に否定的であること、しかしながら、また「神の不在」の主張にも否定的で

あることが分かる。

「神の不在」に否定的ということは、宗教性は保持することを意味していて、「一つの神」「一つの真理」に否定的というのであれば、よく考えると、「複数の神」「複数の真理」が浮かびあがってくる。また、「一つの真理」は抽象性に、「複数の真理」は具体性に対応するとも考えられる。

こうして、短い文ながら、ユルスナールが、多様性、複数性、具体性を重視していることを読み取ることができよう。

多様性を認め、ものごとを相対化して考えるということは、自分の価値観とは異なる価値観がいくつも存在することを認め、それぞれを正当に評価することにもなる。

たとえば、ユルスナール自身は、旅がとても好きで、「旅というものはすべて、動く観照である (tout voyage est une contemplation mouvante)⁽⁵⁾」と言っている。しかし、まったく旅をしないことについても、地上の一点で動かずにいる利点を、「同じ場所で四季の移ろいを眺めることも旅⁽⁶⁾」であり、「大地とともに旅している」というふうに評価している。

こうして、ユルスナールにはもともと多様性を重んじる素地があったこともあり、東洋的なものについてもごく自然に吸収していったと考えられる。

3 命あるものすべて大切

ユルスナールは東洋思想から多くのものを吸収しているが、重要な点をいくつか見ていきたい。まず、これはとりわけ仏教からということになるが、ユルスナールは、人間だけでなく、動物、植物も含めて、生命のあるものすべてを等しく大切に考えるようになっている。⁽⁷⁾

この点について西欧の場合を考えてみると、中世から近現代へのおよその流れは、「キリスト教の支配からその世俗化へ」、言い換えれば、「神中心主義から人間中心主義への移行」と言えるであろう。

「神中心主義」も、人間を特別視している。つまり、人間を他の動物などとは別格に扱っているのである。

しかしながら、ユルスナールは、生命のあるものすべてを大切なものと考えていて、人間中心主義とは異なっている。

この熟年期のユルスナールの考え方は、大家族に近い状況で、そして動物といっしょに暮らしていた少女期の考えとさほど違わないように思える。しかし、実際には、考えが直線的に続いているのではなく、少し回り道をしていると考えられる。

というのは、若い頃、特に「人間」に関心があったと述べているからである。つまり、おもに「人間」に関心が集中していた若い時期を経て、中年になってふたたび、動物など生命のあるものすべてを等しく考えるようになったようだ。⁽⁸⁾

ユルスナールは、この対談の時期には、『世界の迷宮』第三部（『何が？ 永遠が』）に取り組んでいたが、さらに『動物のいる風景』という作品を構想していたことを明かしている（けっきょく書かれることはなかったが）。

この対談では、動物に関する話、あるいは植物も含めて命のあるものを大切にす内容の話はいくつかあるが、ここでは一箇所だけ引用で確認してみたい。

(f) ——そんなふうには動物たちに興味を抱くのはなぜでしょう？

理由はもうお話したと思います。お望みならより抽象的な言葉を使いますが、私にとって大事に思えるのは（人間とは）異なる形のなかに閉じこめられた生命への感覚 (*le sens d'une vie enfermée*)

dans une forme différente) をもつことなのです。生命というものは、私たちがふだん生きるのに慣れている形だけにふくまれているのではないこと、腕のかわりに翼をもち、私たちのそれよりもはるかに高性能な目をもち、肺ではなく鰓をもつこともありうること、そういったことに気づくのがすでにたいへんな勝利なのです。それに、動物たちの渡りや回遊など、移動の謎、相互のコミュニケーションの謎、ある種の動物たちの図抜けた才能（私たちのそれに劣らないイルカの頭脳、私たちのそれとは異なるはずの世界像を捉える頭脳）、何億年も年月を通じてたえず変化しつづけた環境に適応してきた動物たちの能力、いまなお適応しつづけており、あるいは私たちの作り出した世界には適応できずに死んでいく動物たちなどなどの問題があります。

(p. 363～364; p. 298)

このように、ユルスナールは、人間だけではなく、「(人間とは) 異なる形のなかに閉じこめられた生命への感覚をもつこと」が大事であると述べているが、表現の仕方がきわめて論理的、説得的である。生命あるものすべてに対する共感ということは東洋的であるが、「知性による共感」というべきものに支えられている。

こんなふう人間を他の生命と同じように考えると、人間の「個性」についての考え方も、近代西欧の多くの人の考えとは異なってくることになる。

4 没我性

ユルスナール自身も、「人間の個別性」「個性」を重んじる主張をして

いるが、その「個性」のあり方が西欧でふつう考えられているものとは異なる局面が現われる。「個性」を重んじると言いつつ、「個性を消す」という局面が生じるのである。

『黒の過程』の主人公ゼノンに言及した次の引用をみてみよう。

(g) 神について語るゼノンに、私はこう言わせました——「もしかしたら存在するかもしれぬものが、生命全体の大きさに合わせて人間の心をふくらましてくださるように (Plaise à celui qui est peut-être de dilater le cœur de l'homme à la mesure de toute la vie)」。私にとってこれは本質的な言葉であり、あらかじめ自分の墓石に彫らせたほどです。人間が他のすべての人間の運命を、共感をもって分かち合う必要があります。いやそれ以上に、他のあらゆる生命の運命をと言わなければなりません。

作家にとって重要なのは、自分特有の個性を消し去り (effacer sa personnalité spécifique) (なにも恐れることはありません。個性はつねに充分に残りますから！)、すべてを他の人に捧げることだと思います。とどのつまりそれは、真実の愛とさほど違いません。というのも真の愛は、ある人や人びとに良いことがありますようにと願うことにほかならないのですから。

(p. 343～344; pp. 280–281)

ここでは「自分特有の個性を消し去る」という表現がみられるが、これより前の箇所(次の引用(h))では、「完全な没我性」ということを言っている。

(h) ときおり非常に偉大な人たちのなかには、完全な没我性に向かう傾向 (une tendance à l'impersonnalité totale) があります。ハドリ

アヌスはそれについて私たちにこう言います——「ものを書く男、あるいは計算する男は、もはや自分の性には属さない。人間性さえまぬがれる。」 (p. 334; p. 272)

この「没我性」「個性を消し去る」ことは、おおむね東洋的とされることである（なお、念のため付け加えると、これは必ずしも東洋的とは限らない。西洋の神秘主義にもみられることだし、キリスト教においても神に従うのに自我を消滅させようとする面があるからである。したがって、この引用のような場合、東洋的な面と西洋的な面が融合しているとも考えられる）。

この「個性を消し去る」こと、「没我性」への動きは、引用(g)の後半にあるように、作家の「作品を書く行為」においてもみられ、ユルスナール自身についても該当する。

対談の時期に執筆中の『世界の迷宮』第三部『何が？ 永遠が』について、自分の少女時代を思い起こすのに「自分のなかを空虚にして対象だけに注意を集中する」と述べているし、『ハドリアヌス帝の回想』や『黒の過程』の執筆のさい、（これは神秘的な場面についてだと考えられるが）「観想による方法（*méthodes de contemplation*）⁽¹⁰⁾」を用いたことを明かしている。

引用(g)にみられた「作家が自分特有の個性を消し去る」と関連して、次の引用(i)をみてみたい。

(i) ——ご自分が仲立ちというか、媒体のようなもの、なにかが自分のなかを通して伝わっていく存在だと感じることはありませんか？

まったくその通りです。私が私自身について限られた関心しかもっていない（*je n'ai au fond qu'un intérêt limité pour moi-même*）のは、結局そのためなのです。自分は電流を通し振動を伝えるため

の道具 (un instrument à travers lequel des courants, des vibrations sont passés) だという印象があるのです。私の書物全部について、いえ、私の生涯全体についてさえ、そう言えると思います。もしかしたらあらゆる人の人生がそうなのかもしれません。そして私たちのなかの最良の人びとも、もしかしたら通過された結晶にすぎないのかもしれません。ですから、生者であれ死者であれ、私の友人たちについて、しばしば自分の心の中で「神はその人たちを通して私を愛した——そういう人たちがいるのだ」というすばらしい言葉をくり返したのです。(中略) すべては私たちより遠くから来て遠くへ行くのです。言い換えれば、すべてが私たちを超越するのです。そしてそんなふうに貫流され超越されたことを知って、人は自分を取るに足りないものと感じると同時に驚嘆の念もおぼえるのです。(p. 376; p. 309)

ここでは、ユルスナール自身について、「自分は電流を通し振動を伝えるための道具であるという印象がある」と言っていて、東洋の各地にみられる「シャーマン」に近い面を感じさせる。とはいえ、ここでの作家はもちろん「シャーマン」そのものとは異なり、ユルスナールの説明は、筋道立てて論理的に展開されている。

こうして、この「没我性」に関する領域では、ユルスナールの考え方に東洋思想的要素が深くはいりこんでいるが、やはり合理的思考に支えられているように思われる。

5 仏教の誓願

本稿で検討の対象としている『目を見開いて』では、最後に、仏教、

とりわけ誓願が話題になっている。

- (j) さらにまた、仏教の説く慈悲は、もっとも大胆なもの信じられている近代哲学に劣らず、自分自身にしか頼らないことの必要性 (*la nécessité de ne dépendre que de nous-mêmes*) を強調し、「あなた自身の灯火であれ……」と述べています。

——それは、あなたがこれまで何度かほめかされた「仏教の誓願」のひとつなのでしょうか。

「仏教の四つの誓願」は、実際に私が生涯にわたってしばしば唱えてきたものですが、いまあなたの前で口にするにはためらいをおぼえます。というのも誓願 (*vœu*) は祈り (*prière*) でもあるのですが、祈りよりさらに深く秘められたものだからです (その年はじめてのイチゴを食べながら、あるいは新月を眺めながら、「願いごとをした」とあなたに告げる人びとも、誓願については口を閉ざすといいます。それが賢明なやり方なのです)。しかしまあ、簡単に要約すればこういうことです——自分のなかの悪しき性向と戦うこと、最後まで勉学・研究に没頭すること、可能なかぎり自己の改善に努めること、そして最後に「三界 (つまり宇宙) の広がりの中をさまよう被造物がどれほど多かろうと」、「彼らの救済に努めること」。道徳意識から知的意識まで、自己改善から他者への愛と憐憫まで、二十六世紀前のこの古いテキストにはすべてがあるように思います。

——そしてあなたはそれらの誓願を実践しましたか。

千回に一度だけ。でもそれを考えるだけでも、すでにたいしたことなのだと思います。 (p. 381~382; pp. 313-314)

ここで、ユルスナールは、仏教の誓願を唱えたりすることがあるとい

うことで、ためらいながらも、四つの誓願の内容を説明している⁽¹¹⁾。最後に、誓願の内容の実践については、謙虚にごくわずかと答えているが、誓願の内容の説明は、仏教の基本がしっかりユルスナールの頭の中に入っていることを示している。

さいごに

本論の半ば以降で見てきたことからすると、ユルスナールは東洋的なものかなり傾斜しているようにも感じられるが、しかしながら、東洋思想的要素についてのユルスナールの記述は論理的であり、また、批評意識もつねに働いている。ユルスナールの特徴は、西洋／東洋の相違と共通点について深く洞察していることだと思われる。

西洋の考え方と東洋の考え方について歴史的変化を含めて総合的に捉えると、古代において共通するところが多いと、ユルスナールは考えている。

- (k) 古代の思想家たちは自分たちの神々が死すべき存在であることを知っていました。自分たちの宇宙が死すべきものだと知っていたからです。古代文明と東方の文明は、事物の循環、神々や人間の世代の継起、不動のなかの変化などに、私たちよりも敏感でした。自分の神を砦とし、個人の不死性を時にたいする城壁にしようとして臨んだのは、ほとんど西欧の人間だけなのです (Il n'y a guère que l'homme d'Occident qui ait voulu faire de son Dieu une forteresse, et de l'immortalité personnelle un rempart contre le temps)。

(p. 307; p. 249)

最後の部分は、近代の西欧がむしろ特殊なのだと言っていて、ユルスナールの思考には、多様性、個別性を重んじるとともに、西洋／東洋の区別を超えた、普遍的なもの、根源的なものへの志向が見られる。しかし、「普遍的なもの」といっても、ユルスナールの場合、「一」なのではなく、「多」であろう。

ユルスナールが「西欧にあつて道教の哲学者にもっとも似ていたかも知れない人」と評した16世紀のモンテーニュは、大きな文明の変動期に生きた思索家であった。いままた大きな変動期にあつて、ユルスナールのような人の考えは、これからもっと着目されるに違いない。

註

*本稿は、日本比較文学会第15回中部大会（2003年4月19日、愛知県立大学）におけるシンポジウム「マルグリット・ユルスナールと東方——生誕100周年の年に——」の際の発表をもとにしたものである。パネリストの発表は、次の通りであった（敬称略）。

[1]「マルグリット・ユルスナールにおけるオリエンタリズム——『東方綺譚』を中心に」林 修（福島大学）；[2]「マルグリット・ユルスナールと『源氏物語』」久田原泰子（甲南大学非常勤）；[3]「マルグリット・ユルスナールにおける能の美学」平松尚子（トール大学博士課程・慶應義塾大学博士課程）；[4]「マルグリット・ユルスナールと東洋思想——『目を見開いて』を中心に」坂本久生（愛知学院大学非常勤）

発表に続いて、活発な質疑応答が行なわれた。関係者の方々に、ここで改めて御礼申し上げたい。

*『目を見開いて』の引用において、(e) (拙訳) 以外は『ユルスナール・セレクション 6 目を見開いて』（岩崎力訳、白水社、2002年）による。「——に続く箇所」は、インタビューの発言。引用箇所のページ数は、上記邦訳、原書の順。原書のページ数は次の版のものを示した：*Les yeux ouverts*, « Le Livre de Poche », (Le Centurion, 1980), 1993.

- (1) 1999年に刊行された「Sources II」は、ユルスナールの創作ノートの一部、読書ノートといったものを研究者が整理して出版したもの（ユルスナールが公表を意図していた作品というわけではない）であるが、そのなかにはユルスナールが中高年の時期に図書館から借り出して読んだ東洋の哲学、宗教、思想の本（多くは英語で書かれた本）についての、要点のまとめ、抜書き、感想・コメントが含まれている。

しかしながら、ユルスナールがもっと若い頃、20代後半、30代のときにどんな東洋関係の本を読んでいたのか、今の段階ではあまり詳しくわかっていない。

Marguerite Yourcenar: *Sources II*, (Texte établi et annoté par Élyane Dezon-Jones, présenté par Michèle Sarde), Gallimard, 1999.

- (2) シンポジウムにおける田所光男氏（名古屋大学）の質問が、この箇所の解釈に注意が必要なことを気づかせてくれた。
- (3) 拙稿「ユルスナールにおける「家族」の概念をめぐって——『世界の迷宮』の意図を「Les yeux ouverts」から探る——」、『研究報告集』N°25、日本フランス語フランス文学会中部支部、2001年。
- (4) *Radioscopie de Jacques Chancel: Marguerite Yourcenar*, Éditions du Rocher (Monaco), 1999, p. 24.
- (5) p. 371; p. 304.
- (6) p. 371; p. 305.
- (7) 地球市民的な視座——国家、階級、性別等に拘泥しない——からの、環境問題、動物保護などについてのユルスナールの発言も、生命のあるものすべてを平等に見るという、おおむね東洋的とされる考え方に裏打ちされている。
- (8) 余談になるが、そのことはユルスナールの「菜食主義」をめぐる変化と対応していると思われる。ユルスナールは菜食主義者（ベジタリアン）で、といっても友だちが訪ねてきたときや、旅行のときには肉を食べることがあるので、「95%の菜食主義者」だと言っている。それで、少女の頃は菜食主義だったのが、大きくなると、「みなと同じようでありたい」ということで菜食主義ではなくなった、ところが、中年になるとまた菜食主義になったという。(p. 352; p. 288)
- (9) p. 264; p. 214.
- (10) p. 178; p. 144.
- (11) 参考までに「四つの誓願」についての説明を『比較思想事典』から引用しておきたい。

誓願と契約

仏教における誓願 (sa praṇidhāna) とは、仏・菩薩が自己および一切衆生の成仏を必ず成就しようと誓う願い、またそれによって成就された願のことをいう。四弘誓願のような共通の総願と薬師如来の十二願・阿弥陀如来の四十八願のような個別の願がある。四弘誓願とは、生きるもの一切を悟りの彼岸にわたそうと誓う願 (衆生無辺誓願度)、あらゆる煩惱を断とうと誓う願 (煩惱無量誓願断)、仏の教えのすべてを学び知ろうとする誓う願 (法門無尽誓願知)、無上の悟りにいたろうと誓う願 (仏道無上誓願成) である。[中略] さてこのような誓願は、神が自らの行為として自らの側からイスラエルの民に対して契約を結び、忠誠を求めた旧約の契約、また血すなわち死を通してイエスが神と人間の間新しい契約を結ばせ、それを固めさせたという新約の契約とは、その構造および意味内容に根本的な相違が認められる。自己および一切衆生が仏になることを究極の目的とする仏教における誓願と創造主ヤハウェに対する圧倒的な忠誠を迫る契約との相違である。しかし浄土教の誓願の受け取り方と新約の契約のとらえ方の中には人間の普遍的な心情レベルで類似性を見いだす可能性はあるといえる。(この項の執筆者：加藤智見)

(中村元監修 峰島旭雄責任編集『比較思想事典』、東京書籍、2000年、p.150)

ユルスナールの説明の順番は、「煩惱無量誓願断」「法門無尽誓願知」「仏道無上誓願成」「衆生無辺誓願度」と考えられるが、説明の内容は的確なものだと言うことができる。

メトニミーとしてのコピュラ文

金子輝美

0. はじめに

メンタル・スペース理論の提唱者として知られる Fauconnier (1994: 143–144) は、例えば *Plato is the red book.* のような文の *be* を、メトニミー的の連関 (metonymic link) を表わす文法的手段と考え、このような文を拡大メトニミー (extended metonymy) と呼んでいる。

一方、Ruiz de Mendoza (2000: 114) は、*John is a brain.* (ジョンは頭脳明晰な人物である) のような文をメトニミーの叙述的用法 (predicative uses of metonymies) と呼び、数例を提示している。

メトニミー研究の対象となる英文としては、これまでは The kettle is boiling. (容器と内容物)、Turn off the soup. (隣接関係)、The windmill is turning. (全体と部分) のような例が挙げられることが多かった。上例で「風車」(全体) は「羽根」(部分) を意味するように、これらは「トリガー (ソース)、Trigger (Source)」から「ターゲット、Target」への意味転移を表わすメトニミーであることに異論はない。だがこの小論では、そのようなメトニミーの代表例を分析するのではなく、これまで扱われることの少なかった *Education is love. / Summer is beer. / Jim is the fastest gun. / Summer was Dill.* のような “A is B” 構文が産み出すメトニミー的

意味構造の解明を試みる。

1. メトニミーとしての“A is B”構文

最初に日本語の例を挙げてみよう。「夏はビールだ」、「ぼくはウナギだ」、「明日は遠足だ」のような表現はごく自然に日常生活で使われている。日常生活で使われるということは、特定の場面で明確な目的をもって発話されることであるから、これらの表現が誤解されることはない。もし食堂で会食するという状況がないとしたら、「ぼくはウナギだ」は、ウナギを「食べる、釣る、飼う、料理する、研究する、好まない、演ずる」というように、意味が定まらない。当然のことだが、英語でも同じことが言える。

(1) Plato is on the top shelf.

—Fauconnier (1994: 4)

文脈なしにこの文だけを与えられても、Plato はプラトンの「著書、資料ファイル、肖像画、胸像」あるいは「プラトンという名の猫」というように、指示対象は不明である。例えば “It is bounded in leather. You’ll find that he is a very interesting author”. (Fauconnier 1994 : 5) という情報が付加されるか、具体的状況が明らかにされれば、(1)は伝達機能をもつことになる。

Fauconnier (1994) は、メトニミー的表現に関して使われるコピュラ be がもつ特徴について、「トリガーとそのターゲットを連結するために通常使われるが、その際には語用論的関数（コネクター、Connector）がなければならない」と述べている。

- (2) The verb (or copula) *be* has special properties. First it can be used very generally to link a trigger and its target, when the relevant pragmatic function (connector) is known.
- a. Plato is the red book; Homer is the black book.
(Connector: “writers → books”)
 - b. We are the first house on the right.
(Connector: “people → houses they live in”)
 - c. Getty is oil, Carnergie is steel, Vanderbilt is railroads.
(Connector: “magnates → product controlled”)

— Fauconnier (1994: 143–144)

語用論的関数（コネクター）は同じスペース内部で機能することが可能で、これらの *be* はメトニミー的結びつきを表わすための文法的手段である（*be* stands grammatically for the metonymic link）とフォコニエは主張している。だから (2a) では、Plato が「プラトンという人物」を指す読みは成立しない。すでに the red book という値が“A is B”の B 項に与えられているからである。(2b) では、「私たち」と「私たちの住む家」が「人間→人間が住む家」というコネクターによって、(2c) では「実業界の著名な人物」と「産業」が「実業界の大物→その配下の産業」によってそれぞれ結びつけられている。

一方、Ruiz de Mendoza (2000: 114) は、メトニミーの叙述的用法 (predicative uses of metonymy) として次のような例を挙げている。

- (3) a. John is a brain.
b. She’s just a pretty face.
c. Jim is the fastest gun.
d. He is a fine bass.

(3)から a brain, a pretty face, the fastest gun, a fine bass だけを取り出してその意味を問われたら、一般的には、「頭脳」、「きれいな顔」、「最速の銃」、「素晴らしい低音」という答えになる。だが“A is B”構文で用いられることによって、「頭脳明晰な人」、「きれいな女性」、「ガンさばきが最も速い男」、「素晴らしい低音の持ち主」という意味が確定する。コンピュータが主語と補部を結合することによって、この文全体がメトニミーの意味を帯びるのである。換言すれば、(3a)の a brain は、主語 John を指すことによってメトニミーになり得るのである。(3b)は Lakoff & Johnson (1980)で最初に用いられた文である。この文は、She’s just a pretty girl. というように、face を単に girl だけで代置させるべきではなく、She’s just a girl with a pretty face. に近い意味を内包するという主張 (山本 2001: 19)も注目される。ここでは a pretty face は She を指しているということを特に強調したい。(3c)、(3d)も同じことなので説明は差し控えたい。(3d)の bass は、元来は「楽譜・楽器の最低音部 (bass part)」を表わす語であるが、「バス歌手、低音楽器の奏者」という意味も確立している。このように同じ認知領域内で、「トリガー (ソース)」から「ターゲット」へという意味拡大の方向性は、She’s an art major. / He is the soul of generosity. / The customers are mostly locals. などに見られるようにメトニミーの一般的傾向であり、下線部の語は本来の意味に近接する「人間」という意味を取り込んで、現在では『ジーニアス英和大辞典』(2001)などには確立した意味として掲載されている。結局、メトニミーにも慣用度に差があって、「語の意味として慣習化されたもの」、「パターンに基づくもの」、「一過性のもの」などがあるように思われる。

2. “A is B” 表現の種類と特徴

例えば、Tom is a leader. とか Tom is the leader. はメトニミーの意味をもたない。前者は「トムはまるでリーダーのようだ」という読みをすればメタファーになるが、それは一般的ではない。文脈にもよるが、Tom is a wolf. ならば、「狼のようだ」と解釈する方が一般的であろう。また、トムの中の「狼性」、すなわち「トムこそ狼の本性そのものだ」というように「トムの〈内なる狼〉」に目を向けるのであれば、メトニミーということになるであろう。

それでは、多種多様なメトニミー表現としての“A is B”構文の実例を観察してみたい。なお、次の(4)-(13)は、便宜上区分けしたもので、必ずしも厳密な分類ではないことを付言しておきたい。

- (4) a. I am the state.—Fauconnier (1994: 144)
 b. We are KeyBank. — *The Asian Wall Street Journal*. June 8, 2004
 c. We are SECOM. —日本のテレビでのキャッチ・コピー(2004)
 d. He was absolutely Bond Street.
 —D. H. Lawrence, *The Lady Chatterley's Lover* p. 22
 e. Our future is science. —Fauconnier (1994: 144)
 f. Computers are my life and passion.
 —NHK 『ビジネス英会話』2004年4月号、p. 16

これらの各文では、B項がA項を指示することによって、メトニミー構造を産み出している。(4d)の「その男はまさにボンド・ストリートだった」ということを理解するには、この小説のこの部分の文脈を理解する必要がある。「その男、すなわち若い売れっ子の劇作家が、運転手を従えて高級車でチャタレー邸へやって来た。彼は有名なボンド・ストリー

トで買った高価なスーツや時計を身につけていた」のである。だから「この男＝ボンド・ストリート」として概念化されても不思議ではないのである。

- (5) a. I'm the ham sandwich; the quiche is my friend.

—Fauconnier (1994: 144)

- b. John is the ham sandwich.—Ruiz de Mendoza (2000: 114)

- c. ? John is a ham sandwich.—*ibid.*

- d. I am a cheese burger. —奥津 [1993: 248, (久野 1978: 92)]

- e. Waitress: “Now, who is the veal parmesan and who is the spaghetti?”

Patron: “I'm the veal; he's the spaghetti.” —奥津 (1993: 249)

- f. A: Let's see, sir. You're the black coffee with sugar?

B: Right

C: I'm the coffee with cream and sugar, Beatle.

A: Okay. (to D) Then you must be the cream and sugar with no coffee, sir.

D: I don't like your tone of voice!

—奥津 [1993: 249–50, (中野 1982)]

- g. THE WOMAN [enters holding a box of stockings]: I just hope there's nobody in the hall. That's all I hope. [To BIFF] Are you football or baseball?

BIFF: Football.

—A. Miller, *Death of a Salesman* p. 94

これらは日本語のいわゆるウナギ文に相当するものである。英語では(5a)、(5b)、(5e)、(5f)に見られるように、注作品には定冠詞 *the* が付されるのが普通である。定冠詞を用いるということは、その名詞句が指示対象をもつということであり、(5a)、(5b)では「ハムサンド」→「ハムサンドの注文者」→「私 (ジョン)」ということになる。(5c)のよう

に不定冠詞を用いると、「ハムサンド」のどのような特徴と「ジョン」を結びつけていいのかははっきりしなくなるので、このような発話は疑問である。Ruiz de Mendoza は述べている。「ジョンは一個のハムサンだ」という「ジョン」を叙述する文になるからである。(5b) では、The ham sandwich is John. という語順が可能なのに対して、(5c) では、*A ham sandwich is John. が成り立たないことから、両者は意味構造を異にしていると言える。(5a) の後半では the quiche is my friend. という文を Fauconnier が用いていることにも注意を向けたいと思う。

ところが、上述のような言語形式だけで意味構造の差異や英語表現としての適切性を決定することができるとは限らないようだ。(5d) のような文が用いられることがあるという指摘も無視できない。例えば、ハンバーガー店でまとめて買ってきた色々な種類のハンバーガーを皆んなで分ける時、(5d) のような “I am an X” という形式が使われることがあるという。私見では、眼前の何種類かのハンバーガーを指して、I am a cheese burger. と言う時、「チーズバーガー」は、有限個のバーガーの中の1種類であり、「私」が選ぶ種類の事例として認識されるのではないだろうか。逆に、大勢でレストランで会食する時に、I am an eel. と注文すると、“an eel” の指示するものが漠然としており、この世に広く棲息する生きたウナギが想起されやすいのではないだろうか。

(6) a. Andalsia is a passion.

—Roger Coleman (*A Rose for Winter* の表紙推奨文)

b. Dill was a curiosity. —H. Lee, *To Kill a Mockingbird* p. 13

c. You are a great comfort to me. —S. Bellow, *Herzog* p. 23

不定冠詞 a が抽象名詞を具象化している。最初の例は「アンダルシアは熱狂の町だ」という意味で、アンダルシアの熱気が読者に伝わって

の様子をこの短い文が表現している。アンダルシアがもつさまざまな特徴の中から a passion だけを取り出してそれに焦点を当てた強意表現であり、メトニミー的表現でもある。Andalusia is passionate. とは意味が異なることに注意したい。(6b) も同じように説明できる。「ディルは周囲の人にとっては好奇の対象になる男の子だった」、もっと簡単に言えば「ディルは気になる変な奴だった」のだ。「ディル自身が好奇心をもっていた」に相当する Dill was curious. とは峻別されるべきである。(6c) も「あなたが快適な気分になる」という意味ではない。もしそういう意味ならば、述部は主語を叙述していることになる。しかしこの文は「あなたは私にとって大きな癒しになる人です」という意味だから、You=a great comfort to me として捉えられた主観的表現であろう。なお、このような「不定冠詞+抽象名詞」の組合せとして比較的よく見られる名詞に、excitement, failure, luxury, necessity, nuisance, possibility, success, mystery などがあり、“A is B” 構文の中でメトニミー的意味合いを帯びることがあることを付言しておきたい。

次に無冠詞の名詞が用いられた例とその名詞の形容詞形が対比的に用いられた例を小説から引用してみよう。

(7) a. His love and activity were just insanity. His love was a sort of insanity.

—D. H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover* p. 100

b. Society is terrible because it is insane. Civilized society is insane.

—*ibid.* p. 100 (下線は筆者)

(7a) は「愛情や行為は(私にとって)狂気そのものであった」というメトニミー的解釈ができるのに対して、(7b) は「文明社会」の状態を「狂っている」という形容詞を使って叙述している。なお、insanity に関して、Kövecses (2002:87, 262) は概念メタファーとして HAPPINESS IS

INSANITY, SEXUAL DESIRE IS INSANITY, LUST IS INSANITY を設定しているが、これらはメタファーともメトニミーとも解釈できるだろう。究極的には両者は同根であるように思われる。

- (8) a. ‘Am I temptation!’ she said, stroking his face. ‘I’ m so glad I’ m
temptation to you!’ —*ibid.* p. 236
- b. Love is tenderness, and tenderness is not, as a fair proportion suspect,
pity;... —T. Capote, *Other Voices, Other Rooms* p. 109

(8a) の temptation は、この女主人公「私」の全体を指している。「私」とは男にとって temptation そのものなのである。(8b) は2つの抽象名詞が be で連結されている。「愛とは優しさだが、優しさは憐れみではない」という日本語の意味は誰にでも理解されるが、「愛」を「優しさ」に譬えているのか、愛の特質である「優しさ」を「愛」の中に位置づけているのかに答えることは、容易ではない。

谷口 (2003 : 153-170) は、Grady (1997) と Radden (2000) に拠りながら、メタファーとメトニミーの区分にはある種の連続性や接点があり、多くのメタファーはメトニミーに基盤を置いたものであるという説を紹介している。例えば、グレイディーのプライマリー・メタファーの1つである MORE IS UP を人間が初めて実感する段階では、“A is B” に相当する2つの項は未分化であり、これを同一領域内での共起性に基づくものであると捉えるなら、メトニミーと呼ぶのが適切であると主張する。MORE (量が増えること) と UP (嵩が上ること) という2つの経験が共起することにより、両者の間に対応関係が結ばれ、メタファーを形成していくことになる。Radden (2000 : 93-108) は、このような経験的共起性をメトニミー的であると考え、メトニミーからメタファーへと移行する一般的傾向があることを指摘し、従来のメトニミーとメタファーの中

間に「メトニミー基盤のメタファー」(metonymy-based metaphor)を設定している。

スタインベックの2つの小説から実例を引いてみよう。どちらにも a poem という名詞句が使われていることに注目したい。メタファーとメトニミー(あるいはシネクドキ)の峻別は作品を読み解く上で必要なことなのだろうか。

- (9) a. Cannery Row in Monterey in California is a poem, a stink, a grating noise, a quality of light, a tone, a habit, a nostalgia, a dream.

—J. Steinbeck, “Cannery Row”

- b. This farm was a poem by the inarticulated man.

—J. Steinbeck, *The Pastures of Heaven*

(9a) の“A is B”構文のB項には、9つの名詞句が並列されている。「キャナリー・ロウ」とは、まさにこれらの9つの要素で成り立っているのである。これはこの小説の冒頭であるから、読者はこの部分からまず想像を逞しくして読まねばならない。「キャナリー・ロウには、詩もあり、悪臭もあり……郷愁もあった」のであるが、なぜ「詩」であり「郷愁」なのかは、この小説を最後まで読まなければ本当には解らない。この文をメトニミーと見ることには異存はないだろう。(9b)の a poem は、両様に捉えることができるだろう。「この農場はいわばはつきり物の言えない男が創った詩であった」のだが、「詩のようだった」というように、類似性に基づいて「農場」を「詩」に譬えることもできるし、「農場」の中に「詩的情緒」を見ることもできるのである。文学作品は、まず読みたいように読み、そこから得られた直感で解決していくことも大切であると思われる。

日本語で考えてみよう。例えば「愛は()だ」の空欄には非常に多

d. The last morning was a grape-like mist of still air and water.

—L. Lee, *A Rose for Winter* p. 121

e. The last time I'd eaten was those two hamburgers I had with Brossard and Akley when I went in to Agestown to movies.

—J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye* p. 111

(11a) では、「1 ヶ月」という長さの時間と「彼の誕生日」が同一視されている。「今月」という長い時間の中で、この時、概念上最も大切な日は「彼の誕生日」なのである。(11b) は逆に、「明日」という1日か、「4月」として捉えられている。時間的大小または長短関係は、概念上、「大」が「小」に含まれることも、「小」が「大」になることもあることをこれらの例は示している。(11c)、(11d)、(11e) はいずれも「時間」を主語の位置に据えることによって、メトニミー表現を成立させている。この「時間」は単なる抽象的時間ではなくて、その時間に関連する事柄や特徴を内包している。

最後に、メトニミーの一種と見なすべきかどうか微妙に感じられる例がある。ところが Ruiz de Mendoza (2000) は、他の数例とともに、(12a) を躊躇せずに、叙述的メトニミーとして提示している。筆者の収集例とともに参考に供したい。

(12) a. I'm all ears. —Ruiz de Mendoza (2000: 114)

b. He was all eyes as the train sped through the country.

—S. Maugham, *Of Human Bondage* p. 169

c. When you write you're coming, he's all smiles, and talks about her future.

—A. Miller, *Death of a Salesman* p. 42

d. Our garden was all weeds, but...

—M. Drabble, *The Garrick Year* p. 31

e. Satipy, like Sobeck, was all bold words and talk.

—A. Christie, *Death Comes as the End* (福村、1989: 61)

(12a)、(12b) はよく見られる慣用表現である。“be all attention”, “be very attentive” と書き換えてその意味を説明することがあるが、それでは、ears や eyes の意味が消滅してしまう。私見では、(12)の表現はすべて全体（主語）をその一部（耳、眼、雑草、言葉など）で代表させる連辞的のメトニミーである。他方、意味（耳をそばだてて聴いている状態）に重点を置くなれば、メタファーであるという主張も可能である。

3. 小説における “A is B” 表現の特異性

小説や物語には、文法書には見られない、一見奇異に感じられる “A is B” 表現が使われていることがある。なぜそのような特異な表現が使われるのであろうか。

小説には、全体を貫くテーマ、作者特有の文体、感情表現など多彩な要素が盛り込まれている。“A is B” 表現だけを単独で抜き出して統語分析することには限界があるように思われる。最初に、Harper Lee の *To Kill a Mockingbird* に見られる “A is B” 表現を文脈の中で観察し、若干の分析を試みたい。（以下、下線はすべて筆者による）

(13) Summer was on the way; Jem and I awaited it with impatience. Summer was our best season: it was sleeping on the back screened porch in cots, or trying to sleep in the tree house: summer was everything good to eat: it was a thousand colours in a parched landscape: most of all, summer was Dill.

この小説は、米国アラバマ州の田舎町に住む少女を主人公にして一人称で語られる。この少女と兄ジェムにとって、毎年夏ほど待遠しい季節はなかったのである。主人公と同じ年頃の少年ディルが、毎年夏になると遠方から隣家へ遊びに来るのだった。ディルは冒険好きで、茶目っ気があり、好奇心があったので、主人公たちにとって格好の遊び相手だったのである。

英文構成を見てみよう。1行目終わりの *Summer was our best season.* はいわゆる普通の文である。2行目から最後まで、前文のいわば内訳(具体的内容)であり、すべて夏を主題にした文である。2行目の *it was sleeping...* は「夏が眠っていた」という意味ではもちろんない。「夏は窓に網戸を入れて裏のポーチの組立ベッドで寝た」のである。最後は、*summer was Dill.* という簡潔な文で結ばれている。この文は、例えば *summer meant that Dill was coming.* と書き換えて説明できるかも知れないが、それでは原文特有の *summer* を主題にした文体の一貫性に反することになる。

興味深いことは、この小説の中頃に、同じような表現が再度使われていることである。ここでも、夏の回想の中で「夏=ディル」が概念化される。

- (14) *The fact that I had a permanent fiancé was little compensation for his absence: I had never thought about it, but summer was Dill by the fishpool smoking string, Dill's eyes alive with complicated plans to make Boo Radley emerge; summer was the swiftness with which Dill would reach up and kiss me when Jem was not looking, the longings we sometimes feel each other feel.*

With him, life was routine; without him, life was unbearable. —p. 120

この時、主人公の少女は10歳の小学生、兄は12歳で中学生である。一方、小学生のディルは、この夏は遊びに来なかった。「新しいお父さんができたので、遊びに行けない。でも愛している」という手紙が新しい父親の写真とともに送られてきたのである。〈私〉は惨めな気持ちで数日を過ごす、そのような時に一層鮮やかに昨夏の出来事が思い出されるのであった。

4行目の *summer was the swiftness...* は、「夏が過ぎ去る速さ」に言及しているのではない。「ジェムが見ていない隙に、すばやくそっとキスしてくれたのは夏だったし、微かな相思相愛の気持ちを予感したのも夏だった」のである。このような思い出が大きく浮かび上がってきて、それが〈夏〉そのものになるのである。(13)、(14)の“A is B”表現は、2つの項目を話者の主観的世界の中で合体させている。だから *In my mind* とか *In my memory* のように、主人公の思い出の世界の中にこれらのパラグラフを置いて解釈することも有効であろう。

フォコニエに倣って、(13)、(14)の拡大メトニミーのトリガー、ターゲット、コネクターを略記すると次のようになるだろう。

(トリガー)

(ターゲット)

(コネクター)

Summer

- ◇ sleeping ...or trying to sleep...
- ◇ everything good to eat...
- ◇ a thousand colours...
- ◇ Dill.
- ◇ Dill by the fishpool...
- ◇ the swiftness...

子供の夏の生活 ↓ 印象深い出来事

〈夏〉という大きなカテゴリーの中で、さまざまな出来事が起こり、それらが忘れられない思い出になっている。〈夏〉という月日の集合体とは何であったのかという問いに対して、いくつかの印象深い出来事、人

物、風景など具体例が挙げられており、〈夏〉という集合に対して、これらの出来事はその構成メンバーになっている。このような視点に立てば、これらの文はメトニミー的意味構造をもっていることになる。これらの一連の連辞的メトニミーは、この作品の中でとりわけ大きな位置を占めており、これらは作者の情感が込められた詩的凝縮表現になっているのである。

別の作家の短篇小説を見てみたい。次例では、少なくとも、パラグラフ全体を読まないで、下線部を理解することはできない。

- (15) It was not just taking sunbaths. It was much more than that. Something deep inside her unfolded and relaxed, and she was given. By some mysterious power inside her, deeper than her known consciousness and will, she was put into connection with the sun, and the stream flowed of itself, from her womb. She herself, her conscious self, was secondary, a secondary person, almost an onlooker. The true Juliet was this dark flow from her deep body to the sun.

—D. H. Lawrence, “Sun” in *The Woman Who Rode Away* p. 34

主人公のジュリエット夫人が幼い子供を連れて、森林で日光浴をする場面である。太古の自然への回帰の象徴としての太陽 — その太陽との交流によって、彼女は本来の自己を取り戻す。「真のジュリエット」とは「彼女の胎内から太陽へと放出されるくすんだ濁流」に他ならなかった。このように作者は、自分の思い描く心象風景の中の2項目を、その近接性と重要性に基づいて合体させたのである。

4. 日英語における拡大メトニミー

日本語と英語という言語体系の異なる言語から、例えば「母の日は赤いカーネーションだ」とその直訳“Mother’s Day is red carnations.”だけを取り出して単純比較することはあまり有意義ではないだろう。日本語の「AはBだ」と英語の“A is B”構文は、主語あるいは主題の性格、英語の繫辞と日本語の「～だ」の働き、などに根本的差異があるのだから、日本語と英語間の直訳が自然な表現としては容認されない場合があるのは当然のことである。

しかし、ここでは敢えて「夏はビールだ」に相当すると思われる英語表現の可否を確認しておきたい。次例は英語の母国語話者の助言を得ながら、筆者が創作したものである。

- (16) I like beer very much, but I don’t like drinking beer in winter. I should say summer is beer. Summer is drinking beer in the garden. Summer is anything cold to drink.
—J. Hislop, personal communication, 2003

ここでは、〈夏〉が主題として貫かれている。このように文脈の支えがあれば、上掲の文は自然に感じられるとのことである。同様に、「夏はハワイだ」(Summer is Hawaii.)、「夏は台風だ」(Summer is typhoons.)、「明日は学校がない」(Tomorrow is no school.)、「今日は忙しい」(Today is busy.)のような直訳も文脈によって可能であるとコメントを得ることができた。しかしこのことは、「A is B」構文が必ず使われることを意味しない。例えば“Tomorrow is no school”よりも“No school tomorrow”の方が普通であるというコメントもあったことを付け加えておきたい。

次に日本文学の英訳に目を転じたい。「春はあけぼの」という『枕草子』の冒頭はどのように翻訳されているのだろうか。

- (17) In spring it is the dawn that is most beautiful. As the light creeps over the hills, their outlines are dyed a faint red and wisps of purplish cloud trail over them.

In summer the nights. Not only when the moon shines, but on dark nights too, as the fireflies flit to and fro, and even when it rains, how beautiful it is!

—Ivan Movis (1971: 21)

「春は」の「は」は、一般に言われているのは、格助詞ではなくて、「春」をある状況として捉える主題的性格をもつというものである。筆者は、ウナギ文と同じように捉え、春の一日に内包される「最も美しい時刻」に焦点が当てられていると考えたい。簡潔な日本語に対応する英訳は、*Spring is the dawn.* ではなくて、“it...that...”の分裂文を用いて「あけぼの」を強調する手法を採っている。続いて、「夏は夜」は *In summer the nights*、「秋は夕べ」は *In autumn the evenings, when...*、最後の「冬はつと」も *In winter the early mornings* というように、簡潔な反復表現になっている。

日本の四季を詠んだ和歌とその英訳を比較してみよう。英訳では、いずれもコピュラ文は使用されていない。

- (18) 春は花 夏ほととぎす

秋は月 冬雪さえて涼しかりけり

道元禅師

In the spring, cherry blossoms,

in the summer the cuckoo.

In autumn the moon, and

in winter the snow, clear, cold.

—E. G. Seidensticker (川端康成『美しい日本の私』)

- (19) 形見とて 何か残さん 春は花

山ほととぎす 秋はもみぢ葉

良寛

What shall be my legacy?

The blossoms of spring,

The cuckoo in the hills,

The leaves of autumn.

—同上

一方、英国の四季はどのように表現されているだろうか。英国では、各月の特徴を次のように表わす習わしがあるとのことである。

(20) Snow in January/ Ice in February/ Wind in March/ Rain in April/ Buds in
May/ Roses in June 以下省略 一千葉 (1993: 8-10)

日本語の「1月は雪」と英語の“Snow in January”は表現形式は異なるが、意味的にはメトニミー構造をなしていることに注目したい。

5. おわりに

“A is B”構文のコピュラ be は、メトニミー的意味を産み出す文法的役割を果たすことがあることを、“A is B”という表現形式の実例を通して検証した。これらの表現を形式から見て、「連辞的（繫辞的）メトニミー (copulative metonymy)」と呼ぶこともできる。なお、この表現形式は、指定文、同定文、措定文、叙述文、記述文など、その機能と意味によっていくつかの分類がなされているが、名称が異なっても、同じ現象を指すこともあり、紛らわしく感じられる場合がある。ここでは、そのような厳密な定義や分類をするのではなくて、拡大メトニミーという言語現象そのものを観察することに主眼を置いた。

小説などにおけるこの種の表現は、2つの事項に関する作者の主観的
近接性・同一性が反映されたものである。作者は現実社会の常識によっ
て2つの事項を結びつけたのではない。一見奇異に感じられる表現も、
小説というテキストがあればこそ成立するのである。コピュラ文を単独
で抜き出し、その分析によって、より大きな文脈の理解へと広げていこ
うとすることは、日英両言語の研究において、望ましい方法ではないと
言えるだろう。

“A is B” 構文はメトニミーとメタファーという2つの比喩に関与する
が、実例の意味解釈をする時、両者の区別が判然としないことがある。
このことは、両者がその出生において極めて類似していることを示唆す
るものではないだろうか。この種のメタファーは、経験的な共起性に由
来しており、その基盤を近接性に置いているので、メトニー的であると
する議論がある。この議論の適否に関しては、今後更に関心をもって検
討を重ねたい。あくまで推測の域を出ないが、ここで扱ってきた連辞に
よる拡大メトニミーは単純素朴な認知過程に基いた表現であり、メトニ
ミーの原型と言えるものかも知れない。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1993、増補) 『「ボクハウナギダ」の文法—ダとノー—』 くろしお
出版
久野 暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
坂原 茂 (2002) 「トートロジとカテゴリー化のダイナミズム」 『認知言語学Ⅱ：
カテゴリー化』 pp. 105-134. 東京大学出版会
佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚—ことばは新しい視点をひらく』 講談社
芝原宏治 (1992) 『錯誤のレトリック』 海鳴社
鈴木英一・安井 泉 (1994) 『動詞』 研究社出版
瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』 海鳴社
関 茂樹 (1998) 「個と群れ—指定の連続性をめぐって—」 『現代英語の語法
と文法—小西友七先生傘寿記念論文集—』 pp. 178-186. 大修館書店

- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』 研究社出版
- 千葉元信 (1993) 「起床・季節に関わる用語と表現」『英語教育』 1月号、pp. 8-10. 大修館書店
- 西田光一 (1997) 「コピュラ文 A is B と There 構文の関係」『英語語法文法研究』 第4号、pp. 81-96. 英語語法文法学会
- 福村虎治郎 (1989) 「“My hands are all over flour” の文法的・語法的説明」『英語教育』 7月号、Question Box 欄 pp. 60-62. 大修館書店
- 森 雄一 (2003) 「明示的提喩・換喩形式をめぐる」『認知言語学論考』 第2号、pp. 1-24. ひつじ書房
- 山本幸一 (2004) 「主体の拡張と換喩—換喩の1タイプ」*Language & Literature (Japan)*. No. 13. pp. 11-20. 愛知淑徳大学大学院英文学会
- Barcelona, Antonio (2000) “Introduction: The cognitive theory of metaphor and metonymy” in *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, edited by Antonio Barcelona. pp. 1-28. Mouton de Gruyter.
- Fauconnier, Gilles (1994) *Mental Spaces*. Cambridge University Press.
- Kövecses, Zoltán (2002) *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- Radden, Günter (2000) “How metonymic are metaphors?” in *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, edited by Antonio Barcelona. pp. 93-108. Mouton de Gruyter.
- Ruiz de Mendoza, Francisco (2000) “The role of mappings and domains in understanding metonymy” in *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, edited by Antonio Barcelona. pp. 109-132. Mouton de Gruyter.

引用書目 (小説・英字新聞・ラジオ講座テキスト・辞書など)

- Bello, Saul. *The Victim*. Penguin Books. 1966.
- . *Herzog*. Penguin Books. 1965.
- Benedict, Ruth. *The Chrysanthemum and the Sword*. Tuttle. 1954.
- Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. Penguin Books. 1964.
- Drabble, Margaret. *The Garrick Year*. Penguin Books. 1966.
- Lawrence, D. H. *The Lady Chatterley's Lover*. Penguin Books. 1960.
- . “Sun” in *The Woman Who Rode Away*. Penguin Books. 1950.

- Lee, Harper. *To Kill a Mockingbird*. Penguin Books. 1963.
- Lee, Laurie. *A Rose for Winter*. Penguin Books. 1971.
- Malamud, Bernard. *The Assistant*. Harper Collins. 1957.
- Maugham, Somerset. *Of Human Bondage*. Penguin Books. 1963.
- Miller, Arthur. *Death of a Salesman*. Penguin Books. 1961
- . “*All My Sons*” in *A View from the Bridge/ All My Sons*. Penguin Books. 1961.
- Movis, Ivan. *The Pillow Book of Sei Shonagon*. Penguin Books. 1971.
- Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. Penguin Books. 1958.
- Seidensticker, Edward.G. *Japan, The Beautiful and Myself*. 講談社、1969. (川端康成『美しい日本の私』)
- Steinbeck, John. “Cannery Row” in *Of Mice and Men/ Cannery Row*. Penguin Books. 1949.

The Asian Wall Street Journal, June 8, 2004.

The Daily Yomiuri, November 17, 2003.

The Japan Times, November 17, 2003.

日向清人『ビジネス英会話』2004年4月号、日本放送協会

小西友七・南出康世（2001）『ジーニアス英和大辞典』大修館書店

小西友七（1996、改訂3版）『ジーニアス英和辞典』大修館書店

井上永幸・赤野一郎（2003）『ウイズダム英和辞典』三省堂

『嵐が丘』における登場人物の形容

戸 谷 鋤 一

作家の性格が端的に表われるものの1つに色彩の語句がある。『嵐が丘』の色彩語や色彩語を伴った語を全部抜き出し、使用頻度の高い順に整理してみたところ、‘black’(40回), ‘white’(26), ‘red’(19), ‘green’(16), ‘blue’(12), ‘grey’(10), ‘silver’(8), ‘brown’(6), ‘gold’(6), ‘golden’(5), ‘crimson’(4), ‘blackened’(3), ‘blackness’(3), ‘flaxen’(3), ‘livid’(3), ‘blackguard’(2), ‘blackhorse’(2), ‘blacksmith’s’(2), ‘purple’(2), ‘scarlet’(2), ‘whitened’(2), ‘blackberry,’ ‘blackbirds,’ ‘blackier,’ ‘blue-bells,’ ‘brown-eyed,’ ‘crimson-covered,’ ‘greyer,’ ‘greyhound,’ ‘pinkness,’ ‘redden,’ ‘reddening,’ ‘silvery,’ ‘whiteness’ という具合になった。使用回数が1番多い ‘black’ のほとんどはヒースクリフを描写する時に使われていることが分かった。また、語尾が-ly で終わる副詞は「様態の副詞」と呼ばれるものを含むことがあり、作家の個性を反映する語句の1つである。以前そのような-ly 副詞を含む会話文+伝達部+副詞相当語句という構文を扱った際に、同じ伝達動詞と-ly 副詞が何回も使われることはあったけれども、同じ動詞と副詞の組み合わせが使われることは調べた限りではなかった。伝達動詞と-ly 副詞の数と種類も他の作家に比べると比較的多くて豊富であるように思われる。こうしたことから、作者エミリー・ブロンテは、多種多様の修飾語を使ったり、表現が重複しないようにしたり、とりわけ人物描写の技巧にかなり気を配っ

ていることが分かった。ここでは、その多種多様の修飾語の中で、色彩の語句以外に、登場人物を形容している表現を取り上げて、類義語や繰り返し使用される語句から登場人物の大まかな特徴を捉えたい。参考として、*The Brontës*⁽²⁾と *Cliffs Notes on Brontë's Wuthering Heights*⁽³⁾から登場人物の役割や性格をまとめたものを引用した。

I. Catherine Earnshaw

『嵐が丘』の女性主人公。自作農アーンショー氏の長女。父が連れ帰ったジプシーのような少年ヒースクリフに対し、彼が自分であるかのような愛を感じて育つ。しかし次第にリントン家のエドガーに惹かれそして結婚においてはエドガーを選択し、お屋敷の奥様となるが、閉塞感を覚えて暮らす。立身をして戻って来たヒースクリフに狂気し、夫と自分やヒースクリフとイザベラの関係に動揺し、精神錯乱と脳炎にかかり、病癒えぬうちに娘キャサリンを出産して死亡。荒野を愛した彼女にふさわしく荒野に続く一角に葬られるが、亡霊となってヒースクリフとともにいた、と言う人もある。

The “free spirit” of Emily Brontë is epitomized in Catherine Earnshaw, who, as a child, could ride any horse in the stable, and in later years “rides roughshod” over everyone who tries to stand in her way. Beautiful, wild, arrogant, and willful, Catherine is a fitting companion for the arrogant and vindictive Heathcliff. Her love for Heathcliff and the moors is the ruling passion of her life. While she may appear heartless when she chooses to marry Edgar Linton, she is naive enough to think that by so doing she will be able to lift Heathcliff from the degradation into which he has been thrust

by Hindley.

She is a wild, impetuous, arrogant girl. Despite her feelings for Heathcliff, she decides to marry Edgar, knowing full well that “I am Heathcliff’s; he’s always in my mind.” Before she dies, she says that she wants both Edgar and Heathcliff to suffer—Edgar, because he never understood her affection for Heathcliff; and Heathcliff, because he never understood why she married Edgar.

Catherine Earnshaw に使われている副詞相当語句には、次のようなものがある。そのいくつかは彼女の様子を描写している。

anxiously (2 回) / bitterly (2) / contemptuously / decisively / doubtfully / dreamily / eagerly / emphatically / energetically / furiously / imperiously / musingly / passionately / peevishly / peremptorily / petulantly / reluctantly / suddenly / sullenly / in amazement / in answer / in surprise / in an irritated tone / in a peevish tone / in a tone particularly calculated to provoke her husband / with an accent of indignation / with angry animation / after some minutes’ reflection / at the conclusion of a minute’s silence / by way of apology / in answer to her husband’s look of angry surprise

‘anxious’ を類義語辞典⁽⁴⁾で調べると、‘*adj.* 1 *troubled*, uneasy, disquieted, uncertain, apprehensive; *solicitous*, concerned, worried, distressed, disturbed, *nervous*, tense, fretful, on edge, restless, edgy, perturbed, upset; wary, cautious, careful, watchful. 2 *desirous*, *eager*, keen, enthusiastic, ardent, agog, avid, yearning, longing, aching, impatient.’ という語群が挙げられている。これを参考にすると、‘anxiously, nervously, with a troubled countenance, eagerly’は

関連している。同様に ‘amazement’ を調べると、‘*n. astonishment, surprise, awe, wonder, stupefaction*’ が挙げられていて、‘in amazement’ と ‘in surprise’ が関連している。‘peevishly’ と ‘in a peevish tone’ では ‘peevish’ が共通している。また ‘bitterly’ や ‘suddenly’ は繰り返し使われている。こうしたことから「不安な、いらいらしている、困ったような」様子、「熱心な」様子、「驚いた」様子、「機嫌が悪い」様子、「激しい」様子、「にわかな」様子が彼女の描写の特徴として挙げられる。

Catherine Earnshaw に使われている動詞[群]には次のようなものがある。それらは主に彼女の動作を表わしている。

advancing to the door / not allowing her guest time to speak / amazed at the unreasonable assertion / appealing to me / arresting, with feigned playfulness, the confounded girl / beginning to sob bitterly / confounded / displaying fingers wonderfully whitened with doing nothing / flinging her arms round his neck / gazing at him with a troubled countenance / gazing earnestly at the mirror / gazing nervously round / grasping the handle / growing more irritated / holding him as firmly as her strength allowed / implying both carelessness and contempt of his irritation / interrupting me / jerking her head away from my hands / kneeling down by me / laughing (2) / leaning back / lifting her winsome eyes to my face with that sort of look which turns off bad temper / perceiving her hesitate to complete the sentence / pulling off her gloves / pushing the thick entangled locks from her wasted face / putting her arms round his neck / recalled to a sense of physical weakness by the violent, unequal throbbing of her heart / recovering her speech / repressing a little the intensity of her delight / returning his look with a suddenly clouded brow / suddenly reviving / rising to her feet / scowling / setting her free / shaking her hand with pain / shutting the inner

door / stamping her foot / staring at her reflection in a mirror / staying in doors / striking one hand on her forehead, and the other on her breast / taking a long, a dark book from a shelf / throwing herself on the sofa / trembling all over / turning her face to the fire / wringing her hands / without altering the direction of her eyes / said (14) / exclaimed (10) / cried (7) / answered (5) / asked (5) / continued (5) / demanded (4) / replied (4) / added (3) / returned (3) / pursued (2) / declared / enquired / interrupted / moaned / muttered / panted / persisted / repeated / went on

‘gazing’が3回使われている。‘gaze’は *The Oxford Thesaurus* で、‘look at or on or upon or over, view, regard, contemplate, stare; wonder, gape’ と類義語であると定義されているように、‘stare’ と関連している。また ‘laughing’ が2回使われていることから、「見る」、「笑う」という動作が彼女には多い。

The Oxford Thesaurus によると、‘exclaim’の類義語は‘v. call or cry (out), proclaim, vociferate, utter, declare, ejaculate, shout, yell, bawl, bellow, burst out (with), blurt out’であり、‘answer’は‘v. reply, respond; retort, rejoin, riposte’であり、‘ask’は‘v. 1 question, interrogate, query, quiz; inquire or enquire (of). 2 demand, require, expect, request’であり、‘continue’は‘v. 1 carry on, proceed (with), keep up or on or at, go on (with), pursue, persist (in), persevere (in). 2 endure, last, go on, persist, be prolonged, remain’であり、‘add’は‘v. continue, go on’である。これらを踏まえると、‘exclaimed, cried, moaned’ (25%), ‘continued, added, pursued, persisted, went on’ (17%), ‘asked, demanded, enquired’ (14%), ‘answered, replied’ (13%) という風にまとめることができる。「大声で言った、うめくような声で言った」、「続けた」、「尋ねた」、「答えた」という動作が多い。

II. Catherine Linton (しばしば愛称キャシー)

エドガー・リントンとキャサリンの間の娘。第2世代の女性主人公。母キャサリンは、彼女を出産した数時間後に亡くなり、忘れ形見のお嬢様としてスラシュクロス・グレインジ内で大切に育てられる。ヒースクリフの企みにより従弟リントン・ヒースクリフと結婚させられるが、リントンはほどなく病死。義父であるヒースクリフ所有の嵐が丘で鬱鬱とした生活を送るうち、ヘアトンとの愛に目覚め、結婚してスラシュクロス・グレインジへ移り住む予定。

Young Cathy does not have the fascination of her unpredictable mother. She is pretty and affectionate, but has a mind of her own and some of Catherine's willfulness. She is also capable of great sympathy and is intensely loyal to those she loves. These include the weakly Linton, whom she marries, and finally Hareton Earnshaw.

Edgar's darling; she inherits her mother's pride and determination and outwits Heathcliff; she also accomplishes a happy marriage with young Hareton.

Catherine Linton を表わす状況は次のような副詞相当語句から分かる。

anxiously / continually / despairingly / dolefully / encouragingly / gaily / gleefully / gravely / immediately / interrogatively / more kindly / more repellingly / pertly / provokingly / scornfully / seriously / sharply / sulkily / in a passion / in great trouble / in surprise / with a bitterness she couldn't conceal / in a tone of disgust / with a perplexed countenance / with a scornful

laugh / with scornful compassion / after a protracted pause of meditation /
after the morning's salutations

‘scornfully’ と ‘with a scornful laugh’ と ‘with scornful compassion’ は
‘scornful’ で、‘with a bitterness she couldn't conceal’ と ‘bitterly’ は ‘bitter’
で共通している。「軽蔑した」様子、「辛辣な」様子が強調されている。
次の動詞[群]の多くは Catherine Linton の動作を表わす。

abstracting it from his mouth / cautiously advancing her hand / appealing to
Heathcliff / bending over him / biting a piece of crust, the remnant of her
breakfast / casting a longing look to the door / catching my dress / instantly
checked / chewing her lip to prevent another burst of emotion / closing her
book / commencing a verse of an old ballad in the same fashion / not at all
convinced / considerably crestfallen / creeping close up / darting her hand
into the fire / no longer disguising her trouble / disregarding the old wretch's
mockery / drawing forth some half consumed fragments / dropping on her
knees / drying her eyes / evidently eager to be active / too enraged to
continue / ensconcing herself in a chair / exerting her utmost efforts to cause
the iron muscles to relax / fit to break her heart / fixed in astonishment /
flying to attack me next with her lavish caresses / gazing curiously on the
speaker / gazing up with timid hope to seek further consolation / imagining
she would be its object / kindling into joyful surprise at the name / laughing /
laughing heartily at his failure / looking slowly round / making an effort at
cheerfulness / perceiving that he came to a dead halt / pleased to detect the
faint dawn of a smile / pulling a chair to the fire / pushing them from her /
putting on an imploring countenance / racked beyond endurance / reaching
from the chimney piece two of the painted canisters / reaching up to salute

him / recollecting the housekeeper's assertion / reiterating her former question / resting on the word / retiring to a stool by the window / returning his angry glare / rising / rising to her feet / rising unwillingly / smiling as sweet as honey / springing to the saddle / standing with a spoonful of the leaf poised over the pot / staring / stroking his long soft hair / sucking her damaged lip / surprised at my earnestness / having doubtfully surveyed first one and then the other / swallowing her greeting / throwing it on a chair / tying an apron over her neat black frock / watching the conflagration with indignant eyes / weeping bitterly / wondering at his pertinacious assertion of what was evidently an untruth / cried (15) / said (15) / answered (8) / answer / asked (8) / exclaimed (8) / continued (3) / observed (3) / added (2) / murmured (2) / muttered (2) / sobbed (2) / chattered / commenced / demanded / inquired / pursued / recommenced / remarked / repeated / replied / returned / screamed / wept / whispered / whispered back

‘cry’は‘v. weep, *sob*, wail, keen, bawl, shed tears’と類語で、‘observe’は‘v. comment (on or upon), *remark* (on or upon), mention, *say*, note, refer (to), make reference to, animadvert on or upon or to; state, declare’と、‘murmur’は‘v. mumble, *mutter*, *whisper*’と類語である。‘cried, exclaimed, sobbed’(30%), ‘said, observed, remarked’(23%), ‘answered, replied’(12%), ‘asked, inquired, demanded’(12%), ‘continued, added, pursued’(7%), ‘murmured, muttered, whispered, whispered back’(6%)はそれぞれ関連性を持っている。「大声で言った、涙にむせびながら言った」、「言った、述べた」、「答えた」、「尋ねた」、「続けた」、「つぶやいた」動作がしばしば用いられる。

III. Edgar Linton

旧家リントン家の長男である彼は、ヒースクリフのことを知りながらアーンショー家の長女キャサリンを愛し結婚する。しかし妻キャサリンの心からヒースクリフを消し去ることはできず、キャサリンは娘キャサリンを残して死ぬ。エドガーは病弱な身であるが、地域の治安判事を勤め、自己の地所を管理し、そして娘キャシーの良き父となる。ヒースクリフによる復讐の企みによって、キャシーがリントン・ヒースクリフと結婚させられようとしていることを案じつつ病死する。妻キャサリンの隣に埋葬される。

Edgar Linton has all the qualities one associates with the hero of a Victorian novel. As Charlotte Brontë says, “For an example of constancy and tenderness, remark that of Edgar Linton.” Constancy and tenderness are hardly the characteristics to hold a woman like Catherine.

A devoted suitor of Catherine, he becomes a recluse after her death. He develops a fondness for young Cathy, but he is no match for Heathcliff, who is determined to make Cathy pay for her mother’s caprices.

Edgar Linton の様態には次のようなものがある。

calmly / crossly / decisively / patiently / quietly / sternly / in a subdued voice /
without any anger in his voice, but with much sorrowful despondency

‘subdued’ の類義語は ‘*adj.* quiet, mellow(ed), toned down, moderate(d), tempered, hushed, muted, low-key, unenthusiastic, repressed, restrained,

peaceful, tranquil, placid, *calm*(ed), temperate, reserved’である。‘calmly,’ ‘quietly,’ ‘in a subdued voice’は「おとなしい雰囲気」を醸し出している。

Edgar Linton を表わす動作は次のようなものの中に含まれる。

addressing her / addressing his daughter / addressing me / casting a look at me / escaping from my hands / finishing the remainder of the purification with his cambric pocket-handkerchief / hastening to us / peeping from the door-way / putting their little hands together / rising in agitation / greatly shocked at the double fault of falsehood and violence which his idol had committed / shuddering / striving to preserve his ordinary tone, and a due measure of politeness / after watching them a minute / said (13), answered (3), cried, exclaimed, hallooed, interposed, interrupted, observed, replied, sobbed

‘casting a look at me’や‘peeping from the door-way’から「見る」という行動が多い。‘addressing’「話しかける」が3回使われている。‘answered’と‘replied’(17%)から「答えた」といった動作が目立つ。

IV. Hareton Earnshaw

ヒンドリー・アーンショーの息子。第2世代の主人公。母フランセスは出産後ほどなく結核のため死亡。ヘアトンはネリーに世話をされ、父ヒンドリーの荒れた生活を目にしながら育つ。ヒンドリーの死以降、ヒースクリフ所有となった嵐が丘屋敷で労働者同様の生活を送ることとなるが、キャサリン2世と愛し合う身となり、たくましい身体の上へ知識・教養を身に付けて、1803年1月1日に2

人は結婚する予定。

Hareton, son of Hindley and Frances, is brought up under the influence of Heathcliff, who gains control of Hindley and Wuthering Heights when Hareton is a small boy. Despite every effort on Heathcliff's part to turn Hareton into a brute, Hareton is very much like his aunt, Catherine, and while on the surface he appears sullen and uncouth, underneath he has aspirations and a great capacity for love. He gives the reader a glimpse of what Heathcliff might have been like under different circumstances.

Hindley and Frances's only son is reared by Heathcliff as part of his plan to punish the Earnshaws. Hareton reflects Heathcliff's cruel nature, but when he has the chance to better himself, he tries to learn to read and express affection for others.

Hareton Earnshaw を表わす状態には次のようなものがある。

authoritatively / earnestly / ferociously / fiercely / gruffly / reproachfully /
in a voice almost inarticulate with passion / in deep but softened tones / with
uncompromising gruffness

‘ferocious’ は ‘*adj. fierce, savage, cruel, vicious, feral, fell, brutal, bestial, merciless, ruthless, pitiless, inhuman, barbaric, barbarous, violent, destructive, murderous, bloodthirsty, sanguinary, predatory, fiendish, diabolic(al), devilish, hellish, monstrous*’ と類義語で、‘ferociously’ と ‘fiercely’ から「獯猛さ」が窺われる。‘gruffly’ と ‘with uncompromising gruffness’ に関して ‘gruff」 「ぶっきらぼう」が共通している。

Hareton Earnshaw の主な行動には次のようなものがある。

blushing bashfully / kindling up at her pertness / looking down / rather puzzled / more ready in answering his daily companion / retreating / rousing a half-bred bull-dog from its lair in a corner / shifting his ferocious gaze from me to the young lady / thrusting the tray into my hand / answered (3) / said (3) / growled (2) / whispered (2) / added / asked / demanded / exclaimed / muttered / replied / retorted

‘answered, replied, retorted’ (29%) から「答えた、言い返した」、‘whispered, muttered’ (18%) から「つぶやいた」行動が特徴的である。

V. Heathcliff

『嵐が丘』の主人公。老アーンショー氏によって拾われて我が子のように育てられキャサリンと一心同体であるかのような恋をする。周囲からは冷遇される。キャサリンが自分の教養や暮らしぶりを軽蔑したことを機に出奔。金持ちで立派な身なりとなって戻り、かつて自分を手ひどく扱った者たちへの復讐を実行に移す。財産収奪のためイザベラ・リントンと結婚する。ヒンドリー・アーンショーから財産を奪い取る。しかしキャサリンが死亡。彼女の亡霊に悩まされつつキャサリンとの合一を願うが、果たせず苦しみながら、復讐の対象を第2世代へ押し進める。しかしそのうち、自らの内に奇妙な変化を覚え天国に近いことを感じ、食する気持ちを失って死亡する。キャサリンの隣に葬られるが、亡霊となり2人でムアにいたと言う人もある。

To everyone but Catherine and Hareton, Heathcliff seems an inhuman monster. He has been described as “rough as a saw-edge and hard as whinstone.” Nelly Dean refers to him as a “cuckoo,” who had no standing in the Earnshaw house, and he is constantly being put in his place and reminded that he is an outsider. In her interpretation of his character, Charlotte Brontë feels that “Heathcliff, indeed, stands unredeemed; never once swerving in his arrow-straight course to perdition, from the time when ‘the little black-haired swarthy thing, as dark as if it come from the Devil,’ was first unrolled out of the bundle and set on its feet in the farmhouse kitchen, to the hour when Nelly Dean found the grim, stalwart corpse laid on its back in the panel-enclosed bed, with wide-gazing eyes that seemed ‘to sneer at her attempt to close them, and parted lips and sharp white teeth that sneered too.’” Heathcliff is, in reality, a man whose soul is torn between love and hate, and, because of the depths of his passions, he hates as deeply as he loves.

An adopted member of the Earnshaw family. As a child, he was sullen and impatient; as a young man, he is sullen, impatient, vengeful and cruel. He has an all-engrossing passion for Catherine Earnshaw, and when she marries Edgar Linton, he spends the remainder of his life in spiritual torment.

Heathcliff に使われる状況には次のようなものがある。

angrily / brutally / coolly / earnestly / grimly / hastily / impatiently / less vehemently / sarcastically / savagely(2) / scornfully / in a lower tone / in a tone that did not seek to disguise his despair / in his familiar voice / with a

hardly suppressed grimace / with an almost diabolical sneer on his face /
 with assumed heartiness / with curbed ferocity / with frightful vehemence /
 with his dismal laugh / with savage vehemence / in much agitation / with a
 laugh / after a brief silence / in allusion to my morning's speech / in reply to
 my greeting

The Oxford Thesaurus は 'savage' の類義語として 'adj. vicious, ferocious, fierce, beastly, bestial, brutish, bloodthirsty, brutal, cruel, ruthless, pitiless, merciless, harsh, bloody, unmerciful, fell, barbarous, barbaric, murderous, demonic, demoniac, sadistic' を、'grim' の類義語として 'adj. forbidding, formidable, harsh, ferocious, fierce, cruel, savage, merciless, heartless, ruthless, pitiless, vicious, brutal, brutish, feral, inhuman, fiendish, violent, bloodthirsty, murderous, homicidal, fell' を挙げている。'savagely' と 'brutally' と 'grimly' から「残酷さ」が浮上してくる。

Heathcliff の行動に関して以下の通りである。

arresting her by the arm / attempting a sneer / averting his head / having
 brooded a while on the scene he had just witnessed / checking fiercer
 demonstrations with a punch of his foot / corroborating my surmise /
 crushing his nails into his palms / dragging him roughly between his knees /
 employing an epithet as harmless as duck, or sheep / escaping to the porch /
 finding his tongue at last / following her eye / forcing himself to seem calm /
 glancing from me up to the windows / grinding his teeth / grinding his teeth
 to subdue the maxillary convulsions / groaning in a sudden paroxysm of
 ungovernable passion / hesitating / holding up his head by the chin /
 laughing / looking at the two young people / looking hard at me / looking
 very serious / making a movement that caused me to make one also / making

an effort to smile / muttering an echo of curses back when the door was shut / opening it / overhearing me / perceiving my intention to depart / pulling her out / pushing me aside / putting the bottle before me / reflecting aloud / brutally repulsing her / restoring the displaced table / resulting from his deep aversion to both the proposed visitors / having satisfied himself that the limbs were all equally frail and feeble / seeking to extricate himself from his companion's arms / setting the candle on a chair / shaking the white flakes from his clothes / sinking back into his seat / snatching away his hand / speaking rather contemptuously / stamping his foot / standing still / stretching out a hand / suppressing a groan / much surprised / then turning to her he added / turning to Cathy / turning to Hareton / turning to his daughter-in-law / turning towards the young lady / twisting his chair to face them / unconscious that I was behind him / wincing / wrenching his head free / said (17) / cried (8) / replied (7) / asked (5) / interrupted (5) / added (4) / answered (4) / continued (4) / observed (3) / remarked (3) / exclaimed (2) / muttered (2) / resumed (2) / broke out / commenced / demanded / girded / growled / inquired / persisted / pleaded / pursued / repeated / thundered / utter

‘turning’「向く」という行動が4回、‘grinding’「歯ぎしりする」という行動が2回、‘looking’「見る」という行動が2回見られる。

‘reply’の類語は‘v. answer, respond, rejoin, retort, return, come back, acknowledge’である。‘said, observed, remarked’(29%), ‘replied, answered’(14%), ‘cried, exclaimed’(13%), ‘added, continued, persisted, pursued’(13%), ‘asked, inquired, demanded, pleaded’(10%)といった動詞が大部分を占める。「言った、述べた」、「答えた」、「大声で言った」、「続けた」、「尋ねた、嘆願した」行動が特徴的である。

VI. Hindley Earnshaw

女性主人公キャサリンの兄。実子同様に育てられることとなったヒースクリフに対し敵愾心を抱く。父の死去に伴い嵐が丘屋敷の主となってヒースクリフを迫害するが、彼の行為はヒースクリフの復讐を招くこととなり、酒と賭博に溺れ、地所・財産そして命を失う。息子ヘアトンはヒースクリフに養育されることとなる。

Possibly Hindley is the artistic type, because it is he who asks his father to bring him a fiddle from Liverpool, whereas his sister, Catherine, wants a riding whip. His father thinks little of him, and when Heathcliff is introduced into the family, Hindley is pushed to one side and finally banished to school.

Some sympathy must be felt for Hindley despite his cruelty and lack of character. He does not have the strength or temperament to match his wild and spirited sister and is helpless in the hands of the scheming Heathcliff. Deprived of his father's love and esteem at an early age, he becomes bitter, and his desire to avenge himself on Heathcliff is understandable.

From the beginning, Hindley hates Heathcliff because he is an intruder; furthermore, Hindley loses both his father's love and his sister's to the dark and sullen waif. When he is finally able to claim the family estate, he sets out to brutalize and demean Heathcliff.

Hindley Earnshaw の様子に関して以下の通りである。

condescendingly / grimly

OED で ‘In a condescending manner; with condescension, or a show of it’ と定義されている ‘condescendingly’ は、日本語では「特別のお慈悲だと言わぬばかり」と訳されている⁽⁵⁾。‘condescendingly’ の語形成は ‘condescend’ (f. *con-* together + *de* ‘scende’ re to DESCEND) + -ing + -ly で、‘condescend’ の語源は ‘I. To come down voluntarily. †1. *lit.* To come down, go down, descend. *Obs.*’ 「人が落ちぶれる、人・状況などが悪い状況に陥る」である。Hindley Earnshaw はエミリーの兄ブランウェルがモデルで、彼の阿片と酒に溺れ自滅の道を辿って行く過程が Hindley Earnshaw に投影されているのではないかと⁽⁶⁾言われている。

Hindley Earnshaw に使われる行為には次のようなものである。

addressing me by some elegant term that I don't care to repeat / bustling in / convinced of his inadequacy for the struggle / enjoying his discomfiture / glaring like a hungry wolf / gratified to see what a forbidding young blackguard he would be compelled to present himself / hearing some one approaching the stair's-foot / pulling from his waistcoat a curiously constructed pistol / pulling me back by the skin of the neck / putting on a cheerful smile / recovering his hardness / reddening / releasing me / rushing to the gap / searching the darkness beyond me in expectation of discovering Heathcliff / sinking back in despair / taking her wrist / threatening him with an iron weight / writhing to rise / cried (4) / said (3) / was saying (1) / asked (2) / replied (2) / answered / demanded / exclaimed / groaned / growled / interrupted / laughed

‘pulling me back by the skin of the neck’ や ‘taking her wrist’ から、体の一部を手荒に扱うという「残忍さ」が映し出されている。

‘cried, exclaimed’ (26%), ‘asked, demanded’ (16%), ‘replied, answered’

(16%) から、「大声で言った」、「尋ねた」、「答えた」という行為が頻繁になされる。

VII. Isabella

リントン家の長女。立派になって戻って来たヒースクリフに恋をしてしまい駆け落ち結婚するが、この結婚がリントン家の財産を手に入れるための策略であったことを思い知らされ、嵐が丘から逃亡。ロンドンに住んで息子リントン・ヒースクリフを生み育てるが、リントン12歳の時死亡する。

Isabella Linton is just as immature a woman as she is a child. She refuses to heed the warnings given her by Catherine and Edgar about Heathcliff, and despite Heathcliff's insulting attitude toward her, she persuades herself that he loves her; thus, she marries him. She is incapable of deep feelings and risks losing her brother's affection by marrying Heathcliff, whom he hates.

Heathcliff's insubstantial wife who shows surprising spunk when she leaves her husband and tries to raise their child alone in a strange city.

Isabella を表わす状態には次のようなものがある。

angrily / with sudden vivacity / after a pause

総合すると、‘angrily’「怒って」が2箇所使われている。

Isabella に使われている行為は次のようになっている。

calling up her dignity / disdainingly / struggling from the tight grasp that held her / highly disgusted at his rudeness / facing him angrily / holding myself ready to flee / kindling up / striking with childish spite / thinking him deaf / continued (4) / cried (2) / said (2) / answered / exclaimed / repeated / sobbed

‘cried, exclaimed, sobbed’ (33%) から、「大声で言った、涙にむせびながら言った」行為が特徴的である。

VIII. Joseph

嵐が丘農場の老召使い。ヨークシャー方言で話す頑迷なキリスト教徒。

Joseph, servant at Wuthering Heights, is the perfect example of the faithful churchgoer and Bible-quoter; he spends most of his time gossiping, troublemaking, and backbiting. Joseph's actions are in direct contrast to what he preaches, and therefore there is more irony than humor in his remarks. His Yorkshire dialect adds color to the story, and despite his failings, he shows great loyalty to the family.

Nelly characterizes him as being wearisome and self-righteous; her assessment is accurate. He is a fit companion and loyal servant for Heathcliff.

Joseph に使われている様態は次のようになっている。

sneeringly / in a tone of mockery / in an undertone of peevish displeasure /

with a groan / after a grave inspection / in answer to an unheard speech of Nelly's

‘sneer’の類義語は‘*n.* scorn, jeer, *disdain*, contempt, derision, *mockery*, ridicule; sneering, jeering’であり、groan の類義語は‘*n.* complaint, grumble, grouching, *muttering*, *Colloq* gripe, griping, beef, yammering, *Slang* bitching’である。‘sneeringly, in a tone of mockery, disdainfully’から「あざける、軽蔑する」様子が Joseph の特徴を表わしている。‘with a groan’と下の‘muttered’との関連から、「文句を言う」様子が浮かんでくる。

Joseph を表わす行為には次のようなものがある。

assuming an authoritative air / catching an opportunity, from our hesitation, to thrust in his evil tongue / flinging back a cranky board on hinges / giving a thud with his prop on the floor / lifting his hands and eyes in horror / looking round for Heathcliff / peering in Linton's face / pursuing my retreat / sitting down / stroking his ribbed stockings from the knee to the ankle / subduing his voice to a whisper / surveying the range of closed doors / thrusting the tray under Heathcliff's nose / vanishing / waving me disdainfully aside / on re-entering / said (4) / muttered (2) / repeated (2) / shouted (2) / added / answered / asked / cried / croaked / demanded / echoed / exclaimed / observed / pursued / screamed / snarled / soliloquised

The Oxford Thesaurus によると ‘shout’ は ‘*v.* yell, *scream*, bellow, bawl, howl, roar, *cry* (out), call (out), whoop, *Colloq* holler’ と類義であり、‘repeat’ は ‘*v.* 1 reiterate, restate, echo, re-echo, retell, recite, quote, rehearse, recount, recapitulate, *Colloq* recap. 2 duplicate, reproduce, replicate’ と類語である。‘shouted, cried, screamed, exclaimed’(22%), ‘said, observed’(22%), ‘repeated,

echoed'(13%)から「大声で言った」、「言った、述べた」、「繰り返した、おうむ返しに繰り返して言った」という行為が多い。

IX. Linton Heathcliff

主人公ヒースクリフとイザベラ・リントンの子。母イザベラは死の時点で彼を伯父エドガーに託したが、父ヒースクリフは即、彼を手中に収める。リントンは生来病弱で性格もねじれたところがあるが、キャサリン2世と恋する。ヒースクリフはリントン家の財産収奪のため2人を結婚させる。が、リントンは、ほどなく結核により死亡する。

Although Heathcliff is his father, Linton displays none of his characteristics, other than his cruelty to anyone who crosses him. He resembles his mother, Isabella, in looks and disposition, being pretty, feeble, and effeminate. His one redeeming quality is that he loves Cathy, to the extent that he can love anyone.

The son of Heathcliff and Isabella Linton. He is sickly and unmanly. His death is hastened because of Heathcliff's neglect.

Linton Heathcliffの様子を表わすのに次のようなものが使われている。

crossly / fretfully / hurriedly / impatiently / more cheerfully / pettishly / snappishly / in strange perplexity / with difficulty / with a gaze of vacant fear

‘cross’の類義語として‘*adj.* peevisish, irritated, annoyed, piqued, irritable, testy, *snappish*, irascible, surly, choleric, splenetic, grouchy, huffish or huffy, *pettish*, cranky, grumpy, touchy, moody, fractious, vexed, curmudgeonly, petulant, waspish, querulous, cantankerous, crusty, short-tempered, on a short fuse, *Colloq* crotchety, *Slang Brit* shirty’が、‘fretful’の類義語として‘*adj.* irritable, vexed, ill-tempered, bad-tempered, peevisish, edgy, *cross*, petulant, testy, touchy, tetchy, splenetic, irascible, choleric, crabby, fractious, short-tempered, grumpy, sulky, moody, fault-finding, carping, querulous, whining, complaining, captious, ill-natured, disagreeable, *impatient*, *snappish*, waspish, short, abrupt, curt, *US and Canadian* cranky’が、‘perplexity’の類義語として‘*n.* 1 confusion, bewilderment, bafflement, distress, doubt, *difficulty*. 2 intricacy, complexity, complicatedness, arcaneness, reconditeness, impenetrability, impenetrableness, involvement, unfathomability, obscurity, *difficulty*’が挙げられている。‘crossly, pettishly, fretfully, snappishly, impatiently’から「不機嫌な、怒った、いらいらした」様子や、‘in strange perplexity, with difficulty’から、「困惑した」様子が伝わってくる。

Linton Heathcliffの行いに関して次の通りである。

addressing Cathy in a tone which expressed reluctance to move again /
 clasping his attenuated fingers / glancing up to the frowning nab above us /
 holding her frock / leaning back his head to enjoy the agitation of the other
 disputant / mistaking our approach for that his negligent attendant / raising
 his head from the arm of the great chair in which he reclined / retaining her
 hand as if he needed its support / shrinking from Catherine’s salute /
 shrinking from her / shuddering / shunning her puzzled gaze / sinking into
 the recess of his chair / speaking short / trembling / turning away / turning
 to take a last glance into the valley / after recovering a little from Catherine’s

embrace / after sipping some of the liquid / said (5) / answered (3) / continued (3) / cried (3) / asked (2) / gasped (2) / replied (2) / exclaimed / inquired / interrupted / observed / panted / sang

‘gasp’に関して、*The Oxford Thesaurus* は ‘v. pant, gulp for air, fight for air or breath; catch one’s breath, snort, huff, puff」と類義語であると説明している。‘said, observed’(23%), ‘answered, replied’(19%), ‘cried, exclaimed’(15%), ‘asked, inquired’(12%), ‘gasped, panted’(12%) から、「言った、述べた」、「答えた」、「大声で言った」、「尋ねた」、「息を切らした」という行いが特徴的である。

X. Mr. Lockwood

『嵐が丘』の語り手人物の1人。都会に住む身であったが、ヒースクリフからスラシュクロス・グレインジを借り受けてヨークシャーの荒野に住んでみる。そして奇妙な夢の一晩を機に家政婦ネリーから、嵐が丘の地における2つの家の3世代に渡る物語を聞かせてもらう。屋敷借用は1年間で終わったが、この地方再訪を含めての見聞経験を読者に語っているのが彼である。

Mr. Lockwood is a device through whom we hear Nelly Dean’s story, and he brightens the book here and there with his facetious quips. A city man, he takes a somewhat superior attitude toward the inhabitants of Wuthering Heights.

Mr. Lockwood に使われる状況には次のようなものがある。

earnestly / mentally / responsively / unhesitatingly / with rising irritation /
in the interval of swallowing one cup of tea and receiving another

‘annoy’の類義語は ‘v. irritate, bother, irk, vex, nettle, get on (someone’s) nerves, exasperate, provoke, incense, rile, madden, *Colloq* get at or to’ であり、‘unhesitating’の類義語は ‘adj. swift, rapid, quick, immediate, instantaneous, prompt, ready, unhesitant’ である。‘with rising irritation, annoyed, irritated’ は関連していて、「いらいらした」様子が強調されている。‘unhesitatingly, rapidly’ から、「すばやい、てきぱきした」様子が出ている。

Mr. Lockwood がとる行動において次のようなものが挙げられる。

annoyed at her exposing my kind deed / assuming the cheerful / astonished
(2) / coming to his rescue / desirous to spare him the humiliation of exposing
his cowardice further / eyeing me in a manner that I could ill endure after
this inhospitable treatment / fearful lest it should be imagined a missive of
my own / flinging myself on to the floor / considerably irritated / knocking
my knuckles through the glass / laughing internally at the dignity with which
he announced himself / rapidly resuming my garments / half smiling /
stretching an arm out to seize the importunate branch / struggling / turning
to an obscure cushion full of something like cats / turning to my neighbour /
watching their approach through the window / after sitting some time mute /
said (5) / exclaimed (4) / asked (2) / continued (2) / replied (2) / answered /
began / called out / ejaculated / grumbled / halloood / muttered / reflected /
remarked / reply

‘said, remarked’ (24%), ‘exclaimed, called out’ (20%), ‘replied, answered’
(16%) から、「言った、述べた」、「大声を張り上げて言った」、「答えた」といっ

た行動が多用されていると分かる。

XI. Nelly Dean

『嵐が丘』の語り手人物の1人。ヒンドリー・アーンショーの乳きょうだいで嵐が丘およびスラシュクロス・グレインジの2つの家政婦となった彼女は、嵐が丘の地の2家、3世代に対しヒースクリフが引き起こした波乱模様を目の当たりにすることとなる。こうした彼女が自分の経験をロックウッドに語り聞かせ、ロックウッドがさらに自分の見聞経験を読者に語る、という2重性が本作品の語りの基礎構造である。

Because we think of Mrs. Dean as merely the narrator, we are apt to overlook her as a character and the part she plays in the story as a whole. While she may be regarded as “a specimen of true benevolence and homely fidelity” by Charlotte Brontë in her preface to Emily’s book, if we examine Nelly’s action closely, we find many instances when she does not exactly fit this description. Sometimes she seems to be enjoying the conflicts at Wuthering Heights and even encourages Heathcliff in his pride and arrogance. Nelly has little imagination, cannot understand fully the temperaments of Catherine and Heathcliff, and is thus unable to sympathize with them in any way. She is a lively storyteller, however, and brings immediacy to the dramatic story she recounts.

The faithful, devoted servant at the Grange; as a narrator, she is sensible and usually reliable.

Nelly Dean を表わす様態には次のようなものがある。

angrily / coldly / continually / hastily (3) / hurriedly / impatiently / imploringly / involuntarily / less sulkily / passionately / sententiously / sorrowfully / sternly / tartly / warmly / in a flurry / in considerable trepidation / with decision / in a rather triumphant tone / in order to rouse him / though rather uneasy myself

The Oxford Thesaurus は ‘hastily’ の類義語の説明を ‘adv. quickly, speedily, swiftly, rapidly, at once, immediately, *instantaneously*, promptly, without delay, right away, straight away, post-haste, *hurriedly*, directly, suddenly, in haste, precipitately, on the spur of the moment, in a flash or wink, before you can say ‘Jack Robinson’, *Colloq* pronto, like a shot, like greased lightning, *US* lickety-split, *Slang* p.d.q. (= ‘pretty damned quick’)’ と、‘flurry’ の類義語の説明を ‘n. activity, commotion, ado, to-do, fuss, upset, hubbub, pother, stir, excitement, disturbance, agitation, tumult, whirl, furore or *US* furor, bustle, *hurry*, hustle, flutter, fluster; burst, outburst; *Colloq* tizzy’ という様に述べている。‘hastily, hurriedly, instantaneously, in a flurry’ から、「慌てている」様子が反映されている。

Nelly Dean が行う動作には次のようなものがある。

affecting a careless manner / alarmed at his manner / approaching / quite breathless with quick walking and alarm / catching, opportunely, the roll of his cartwheels up the road / checking my sobs / checking the exclamation risen to his lips at the sight which met him, and the bleak atmosphere of the chamber / concealing my joy under an angry countenance / conducting me into the house / covering him up / dragging the pillow away / drying my

cheeks / endeavouring to snatch the glass from his hand / enraged at her clamorous manner / extinguishing the light / flinging down my rake / half forcing her to re-enter / forgetting instantaneously my foolish fears / framing a bit of a lie / getting a chair and the bellows / guessing from the action that Nelly, if she lived in his memory at all, was not recognised as one with me / guessing her need of an interpreter / hastening to resume my bonnet / too vividly impressed by her recent kindness to break into a scold / gently inserting it in one hand that rested on her knee / leading him in / looping up the curtain that I might watch her / making straight to the high road / perceiving Catherine to be checked in her friendly advances / perceiving that the wretched creature had no power to sympathise with his cousin's mental tortures / perceiving the master to be tolerably sober / pointing to a nook under the roots of one twisted tree / still preserving my external composure / pushing some bread against his hand / pushing through a gap which the man was repairing / putting my arm over her shoulder / somewhat puzzled at my speech / reluctant to continue the subject / resuming my seat / seeing we were regularly imprisoned / shaking back the rest into the bundle / shaking her head / shocked at his godless in difference / showing a decided purple witness to refute her / struggling to release my arm / supposing I could frighten him into giving intelligence / taking Cathy by the arm / thinking it best to speak the truth at once / touching her shoulder / turning anew to the door / turning the holes towards the mattress / tying my bonnet / uncertain whether to regard him as a worldly visiter / after waiting ten minutes / said (14) / cried (12) / answered (7) / asked (6) / exclaimed (6) / inquired (3) / replied (3) / returned (3) / repeated (2) / added / began / called / commenced / demanded / ejaculated / enquired / interposed / interrupted / observed / panted / remarked / retorted / whisper / whispered

The Oxford Thesaurus によると ‘perceive’ の類義語は ‘v. see, make out, discern, catch sight of, glimpse, spot, espy, apprehend, take in, notice, note, discover, descry, observe, mark, remark, identify, distinguish, detect’ で、‘think’ は ‘v. believe, imagine, expect, dream, fantasize, suppose’ と類義語である。‘perceiving’(3), seeing’ 「…であることがわかる、…に気がつく」や ‘guessing’ (2) 「…であるとわかる」や ‘supposing, thinking’ 「…と思う」から知覚動詞 (Verb of perception)⁽⁷⁾が、‘alarmed at, enraged at, puzzled at, impressed by’ から感情動詞 (Verb of emotion)⁽⁸⁾が頻繁に使用されている。また ‘checking’ 「押える、止める」が2回用いられている。

‘cried, exclaimed, called’(27%), ‘said, observed, remarked’(23%), ‘asked, inquired, demanded, enquired’(15%), ‘answered, replied’(14%) から、「大声で言った」、「言った、述べた」、「尋ねた」、「答えた」という動作が特徴的である。

XII. Zillah

嵐が丘屋敷の家政婦。

There is very little importance attached to Zillah’s role in the novel. She is the housekeeper at Wuthering Heights while Heathcliff is master there and feels no pity for young Cathy when she is nursing her dying husband, Linton.

The “lusty dame” who fills Nelly’s position at Wuthering Heights.

Zillah の状況、動作を表わす表現には次のようなものがある。

immediately / seeing me not pleased by her manner / said (2) / went on

引用で説明しているように、重要性が低いいためか、登場回数が少なく、使用されている副詞・動詞の多様性は乏しい。

補 注

- (1) 拙著、『CLARITAS』、VOL. 12 (愛知教育大学、1998)、p. 104.
- (2) 内田能嗣編、『ブロンテ姉妹小事典』(研究社、1998)、pp. 43–63.
- (3) James C. Janet, *Cliffs Notes on Brontë's Wuthering Heights*. (Lincoln: Cliff Notes, Inc., 1995), pp. 12–14, pp. 64–67.
- (4) Laurence Urdang (ed.), *THE OXFORD THESAURUS SECOND EDITION* (OXFORD: CLARENDON PRESS, 1997).
- (5) 田中西二郎訳、『嵐が丘』(新潮社、1988)、p. 88.
- (6) 青山誠子、『ブロンテ姉妹 女性作家たちの十九世紀』(朝日新聞社、1995)、p. 333.
- (7) 大塚高信編、『新英文法辞典 改訂増補版』(三省堂、1959)、p. 1088.
- (8) *Ibid.* p. 1087.

『マイ・フェア・レディー』におけるヒギンズと イライザの語尾-ing の g の脱落現象について

矢 野 矢容衣

1 はじめに

G・B・ショー (George Bernard Shaw) は『マイ・フェア・レディー』の原作・『ピグマリオン』の中で、英語の発音について次のように考えを述べている。

“It is impossible for an Englishman to open his mouth without making some other Englishman despise him.”⁽¹⁾

これは、イングランド人が一度口を開けば、その発音で出生が分かってしまうことを意味する。ジリー・クーパー (Jilly Cooper) の著作・*Class* (1979) の中に、雑貨店の店員とお客とのやりとりが記載されている。店に入ったお客は、胡椒 (pepper) について店員に尋ねる。店員が “Red or black pepper? (赤胡椒か黒胡椒か ?)” と聞いたのに対し、客は “Don’t be ridiculous, lavatory pepper. (ばか言え、トイレットペツパー〈トイレットペーパーの意〉だ)” と答えたという笑い話である。“pepper/’pɛpə/ (胡椒)” と “paper/’peɪpə/ (紙)” とでは、その母音において本来/ɛ/と/eɪ/の違いがある。しかし、階級によって母音の響きが変わる。例えば、ある

階級では/'pepər/は胡椒であり、また別の階級では/'pepə/は紙であったりする。たった一つの母音の違いは、“pepper”と“paper”という全く異なる語を生み出す。つまり、同じ語を意味しても階級によって発音が違ったり、同じ発音なのに階級によって違った語を指すことがある。そのため、階級の違いによる発音の違いによって、話し手と聞き手の意思疎通に障害が起こり得る。ショーはその様な発音の違いによって階級が顕著に現れることに着目して、『ピグマリオン』に生かしている。

今回の研究では、はじめに『マイ・フェア・レディー』について述べ、その後コックニー、RP、および現代イギリス英語を紹介する。そして最後に、コックニー話者が、*takin'*、*eatin'* のような語尾に-ingを有する単語を発音する際にgを脱落させる特徴について、RP話者の発音と対比しようと思う。

2 『マイ・フェア・レディー』について

1913年にG・B・ショー (George Bernard Shaw 1856～1950) は、音声学を主題にした喜劇『ピグマリオン』を書き上げた。ショーが『ピグマリオン』を完成させた後、その劇作とガブリエル・パスカル (Gabriel Pascal) によって演出された映画『ピグマリオン』(1938) をアレンジ・ラーナー (Alan Jay Lerner) がミュージカルに改作して出来上がったのが、『マイ・フェア・レディー (My Fair Lady)』(1956) である。後に、オードリー・ヘップバーン (Audrey Hepburn) 主演の映画『マイ・フェア・レディー』が封切られたのは、1964年のことであった。

『マイ・フェア・レディー』の舞台は1910年のロンドンである。現在はショッピングセンターとなっているが、当時は青果市場であったコヴェント・ガーデン (Covent Garden) で、花売り娘のイライザ・ドゥー

リトル (Eliza Doolittle) と音声学教授のヘンリー・ヒギンズ (Henry Higgins) が出逢う場面から『マイ・フェア・レディー』は始まる。

『マイ・フェア・レディー』の最大の見所は、ヒギンズがイライザに施す音声指導である。コヴェント・ガーデンでイライザに偶然出逢ったヒギンズは、イライザの話す言葉に注目する。そのイライザの話す言葉とは、コックニーと呼ばれる言葉であった。イライザに容認発音 (Received Pronunciation: RP) を教え、それによって言葉だけではなく、イライザ自身を上流階級のレディーにしようというヒギンズの思いつきが『マイ・フェア・レディー』の主題である。『マイ・フェア・レディー』では、コックニーとはどのような英語なのか、コックニー話者が発音しにくい音とは何かといった具合に、随所で RP とコックニーの比較ができる。

3 コックニーと RP および現代イギリス英語について

3.1 コックニー

コックニーとは、ロンドンのイーストエンド地区、特にボウの鐘 [Bow Bells: 正式名 St. Mary-le-Bow (セント・ポールの近く) の鐘] が聞こえる範囲内を出生とする人たちの話す英語で、古くはチョーサー時代 (14・15世紀) から使われていたと言われるロンドンの下町言葉である。

コックニーが顕著な訛として繁栄したのは、労働者階級の貧困に一因があると言われる。ビクトリア朝時代後期の1870年に、「正しい英語」と「読み、書き、算術」を強化するという意図の教育条例が公布されたが、コックニー話者が主として生活していたロンドンのイーストエンド地区 (East End) は、貧困のために教育改革の成果が出なかった。そのためイーストエンド地区に住む労働者階級の言葉は、孤立していき、教育改革で根絶した英語の用法、発音が残っている⁽³⁾のである。

The Story of English (New and Revised Edition by R. McCrum, W. Cran, R. MacNeil p. 417)によると、18世紀末のロンドンで言葉の二極化を担っていたコックニーと RP の派生の違いは、コックニー話者が多いイーストエンド住民の大部分が、イーストアングリア (East Anglia)、ケント (Kent)、ミドルセックス (Middlesex) といった農業社会出身者だったことにあるとしている。

また、コックニー話者が言葉遊びを好むことも、コックニー訛を確立した要因である。コックニーは、言葉のニュアンス、リズムで新しい表現の言葉を創造した。“trouble and strife (苦悩と争い)” を “wife (妻)” に置き換えたり、“believe (信じる)” の代わりに “Adam and Eve (アダムとイブ)” を用いるなどの押韻俗語 (Rhyming Slang) は、その代表である。そして、コックニーは、フランス語などの外国語を自分たちの言葉に加えて新たな言葉を作ったことも、RP とは違う言葉に発展した理由である。

3.2 RP

一方、RP は、コックニーとは対照的に上流階級の発音として発達した。“Received” とは、「最上の社会に受け入れられる」という意味である。⁽⁴⁾ もともと RP は、コックニーと同じく中世後期にロンドンを含むイングランド南東部から発達したが、RP の場合は地理的制約からやがて開放され、もっぱら上流階級の象徴としての地位を獲得することになった。この地理的制約からの開放は、コックニーにも大きな影響を与えた 1870 年の教育条例によるものである。教育条例以降、各地から都市のパブリック・スクール (Public school) に集められた上流階級の生徒たちには、「正しい英語」が求められた。そのため、上流階級の子供たちは、パブリック・スクールという限られた空間で、標準英語という統一された英語を話すようになった。これが、RP に地方的なばらつきがない理由で

⁽⁵⁾
ある。

しかしながら、現在の RP は、上流階級の象徴というよりも知識人階級の象徴へと変貌をとげている。とりわけ1920年代に BBC (British Broadcasting Corporation) がラジオ放送を開始した際に RP を採用したことは、RP 大衆化の最大要因と言える。そのため、RP のことを BBC 発音と呼ぶこともある。

3.3 現代イギリス英語

マスメディアの発達と社会階級の崩壊が生み出した新たな英語は、河口域英語 (Estuary English) と呼ばれている。⁽⁶⁾ 元々、コッツウォールド丘陵 (Cotswolds) からオックスフォード (Oxford) やロンドン (London) を貫流して北海に注ぐテムズ川 (The Thames) の河口地域から広まったため、そう呼ばれるようになった。河口域英語は、RP やコックニーなど様々な方言・訛を複合させたものである。ただし、河口域英語に含まれる要素は非常に多く、明確な特徴を持たない。そのため、河口域英語と言っても、人によって文法、語彙、発音に違いがある。

4 -ing における g の脱落

4.1 -ing における g の脱落 (概論)

例えば eating /'i:tɪŋ/ のように、語尾が -ing で終わる語は、g が脱落して /'i:tɪn/ となることがある。『英語音声学の基礎—音変化とプロソディーを中心に—』(1996 p. 140) によると、-ing から -in' への変化は、速い発話や歌詞などで現在分詞や “something”, “anything”, “nothing” の語尾 “-ing[ɪŋ]” が “-in'[ɪn]” となる。加えて、方言や黒人英語などにも見られると述べている。また、その例として、次の単語を上げている。⁽⁷⁾

falling ['fɔ:lɪŋ]	→	fallin' ['fɔ:lɪn]
keeping ['ki:pɪŋ]	→	keepin' ['ki:pɪn]
going ['goʊɪŋ]	→	goɪn' ['goʊɪn]
nothing ['nʌθɪŋ]	→	nothin' ['nʌθɪn]
something ['sʌmθɪŋ]	→	somethɪn' ['sʌmθɪn]

このような脱落は会話において日常的に起こるが、あまり好ましい発音ではない。*Longman Pronunciation Dictionary* (Wells 2000) には、-ing⁽⁸⁾と-in'⁽⁹⁾の発音に関して次のように記されている。

-ɪŋ ɪŋ - For Δ ɪn Δ ən, see at -ɪn'. -Note the typical late/early stress difference between phrases, such as a ₁sɪŋɪŋg ca'nærɪ, where the -ɪŋ word is a participial adjective, and compounds, such as a ₁sɪŋɪŋg ₂lɛsən, where the -ɪŋ word is a verbal noun (gerund).

-ɪn' nonstandard form of -ɪŋ ɪn ən -but after t or d usually ən -lɪkɪn'
'laɪkɪn -əɪn -eɪtɪn' 'i:t ən -ɪn

-ɪŋ と -ɪn' の発音 (*Longman Pronunciation Dictionary*)

4.2 社会言語学に見る-ing の g の脱落

デイヴィッド・クリスタル (David Crystal) は言語の変異について、「言語変異と社会階級に関して、単純な説明は決してできない」と述べた上で、その理由を「話し手の性別や場面の堅苦しさなどのほかにも影響を与える要因が関係してくるから」としている⁽¹⁰⁾。さらに、社会的要因と地域的要因の相互作用も重要なことだと記している⁽¹¹⁾。

イギリス英語における方言となまりの変異を図で表すと図1のようになる。

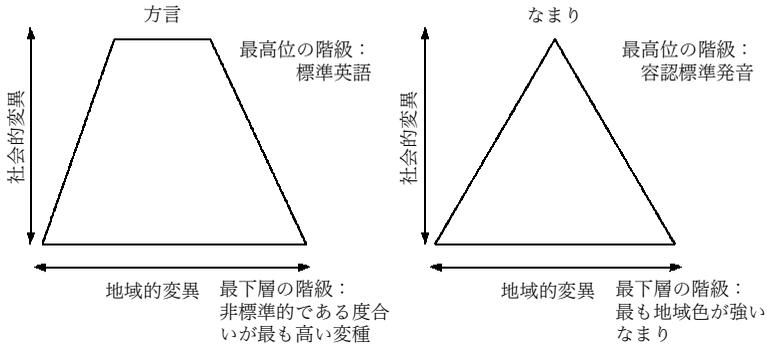


図1 イギリス英語における変異⁽¹²⁾

クリスタル (1997) が掲載したこの図は、ある話し手の社会的「位置」(縦軸)と地理的「位置」(横軸)との関係を表したものである。方言の図の頂点に位置する最高位の社会階級の話し手の場合、地域変異のごく少ない標準方言を話す。そして、なまりの頂点には RP を話す人たちが位置しており、階級の軸に沿って下へ行けば行くほど地域的なまりと方言の変異は大きくなる。最下層の社会階級では、地域的なまりと方言の範囲が最も広くなる。その例として、「頭痛」という単語が挙げられる。最高位の社会階級の話してはみな、headache という単語を用い、しかもその単語の発音は同じである。しかし、最下層の話しての場合、「頭痛」という単語は、skullache, head-wark, head-warch のみならず、sore head などといった表現も使われ、出身地に応じて発音も多様である。⁽¹³⁾

クリスタル (1992) は、『言語学百科事典』の中でゴールズワージー (John Galsworthy) の著書 *Maid in Waiting* を取り上げ、その中で交わされる会話を用いて-ing の g の脱落を紹介している。⁽¹⁴⁾

‘Where on earth did Aunt Em learn to drop her g’s?’

‘Father told me once that she was at a school where an undropped “g” was

worse than a dropped “h”. They were bringin’ in a country fashion then, huntin’ people, you know.’

-ing の g を脱落させて発音するのは、今日多くの労働者階級の言葉において典型的に見られるが、実は古い歴史がある。現在では、前述の通り、-ing の g を脱落させる発音は、非標準発音とされ、望ましいものではない。しかし、クリスタル (1997) によると、1 世紀前にはこの発音は、上層中流階級およびそれ以上の階級において「望ましい」言語上の特徴であったとされている⁽¹⁵⁾。そして、「望ましい」発音が時を追って「望ましくない」発音になった理由は、書き言葉の影響にあるとされている。というのも、英語は綴りと発音が必ずしも一致しない言語であり、-ing も g を脱落させると綴りと発音が一致しないことになる。そして、19 世紀後半には、g を発音する方が「正確」だと感じられるようになった。さらにその結果、「g を発音しない」のは不名誉なこととされるようになった⁽¹⁶⁾。

次の表 1 は、イングランド東部のノリッジ (Norwich) における 3 つの子音に関する調査結果である⁽¹⁷⁾。

表 1 ノリッジにおける 3 子音の調査

	1. ng	2. t	3. h
中流中産階級	31%	41%	6%
下流中産階級	42	62	14
上流労働者階級	87	89	40
中流労働者階級	95	92	59
下流労働者階級	100	94	61

この表の中で、1 番目にある ‘ng’ というのは、-ing に対して -in’ の現れる割合を示している。また、2 番目の t は t に対して声門閉鎖音の現れる割合であり、3 番目の h は h が脱落する割合である。ピーター・

トラッドギル (Peter Trudgill) によると、これら3つの子音は、ノリッジにおける社会階級のありさまを非常に良く現しており、中産階級あるいは労働者階級を全体として見た場合に、その人がどちらの階級に属するかを示す指標として特に重要であるとしている⁽¹⁸⁾。つまり、-ing の g を脱落するか否かによって、その人の社会的地位を察することがある程度把握できるのである。

4.3 イギリスにおけるコックニー以外の訛りによる-ing

イギリスにおける訛りには、-ing の発音に関して、興味深い特徴が存在している。前述の通り、社会階級的地位によって、-ing の g が脱落することは一般的である。しかしながら、バーミンガム (Birmingham)、マンチェスター (Manchester)、リバプール (Liverpool) を含むイングランド中西部地方では、-ing [-ɪŋ] の g を脱落させるのではなく、[-ɪŋg] と発音される。その例として、singer [sɪŋgə] や thing [θɪŋg] などがある⁽¹⁹⁾。

English Accents and Dialects (Hughes, A. & P. Trudgill 1996) に掲載されたイギリスにおける-ing の発音を表2にまとめた。

表2 イギリスにおける-ing の発音

Region	-ing/ɪŋ/の発音
Norwich	/ən/
Bristol	/ɪn/
West Midlands	/ɪn/
Bradford	/ɪn/
Liverpool	/ɪn/ or /ɪŋg/
Edinburgh	/ɪn/
Belfast	/ɪn/
Northumberland	/ɪn/

表から分るように、ほぼイギリス全土で-ing の g を脱落させて/ɪŋ/の代

わりに/m/または/ən/と発音していることが分かる。

4.4 コックニー訛りにおける-ing の g の脱落

コックニーでも-ing の g の脱落がかなりの頻度で起こり、イライザ以外にも例えばイライザの父などが多用している。コックニー話者が-ing における g を脱落させるようになった起源について、『英語物語』（ロバート＝マクラム・ウィリアム＝クラン・ロバート＝マクニール 岩崎春雄・海保眞夫・松本典久・松田隆美・長沼登代子（訳））は次のように記している。「コックニーが農業地域にルーツをもつことを示す発音上の一連の特徴がある。たとえば *eatin'* や *drinkin'* のように語尾の-ing から g が脱落するのは、大変よくみられる現象である。」「現在でも、イングランドのある地域では *shootin'*（狩猟）、あるいは *fishin'*（釣り）と発音するのが今でもふつうである。⁽²⁾」

ところが RP では、*Longman Pronunciation Dictionary* (Wells 2000) が記しているように-ing における g の脱落が非標準形であるため、このような脱落を用いることは極めてまれである。しかし、*huntin'*、*shootin'*、*fishin'* は、上流階級の年輩者たちに決まって使われる、いわば紋切型になっていて、*huntin'*、*shootin'*、*fishin'* に特別な興味を持っている人々であるとして諷刺的に描かれることも多いようである。また、*English Accents and Dialects—An Introduction to Social and Regional Varieties of English in the British Isles (Third Edition)* (Hughes, A. & P. Trudgill 1996 p. 40) によると、上流階級の年輩者たちは、動詞の語尾の-ing に対して/m/よりもむしろ/n/を用いることがある。ただし、/m/を含んで話す制限された年齢の人々（の数）と同様に、この特徴は衰退している。

『マイ・フェア・レディー』の中で-ing における g の脱落を矯正する場面は存在しないが、ここまで述べた事実から推測して、イライザの-ing における g の脱落も矯正の対象になったと考えることができる。

また、脱落とは逆に、本来語尾が-ing ではないにもかかわらず、コックニー話者が語尾を-ing として発音する特徴も存在する。『現代英文法辞典』にはこの特徴を「[ŋ] の出沒」として、g の脱落とともに掲載している。たとえば、garden は garding、kitchen は kitching、captain は capting となる。⁽²²⁾ これの例から分ることは、コックニー話者は、語尾に「あいまい母音/ə/と歯茎鼻音/n/を有する単語/-ən/」の場合、/-əŋ/と発音するということである。

加えて、RP では something, nothing, anything など語尾を/ŋ/とするところをコックニーでは、somethik, nutthink, anyfink のように/k/の音で発音することがある。⁽²³⁾

さらに、現代のロンドンの口語には、先ほど紹介したバーミンガム、マンチェスター、リバプールと同様に、余分につく子音は軽いタッチの [g] に似ることが多い。⁽²⁴⁾

4.5 『マイ・フェア・レディー』における g の脱落

4.5.1 イライザの発話

『マイ・フェア・レディー』の ACT1 SCENE3 (p. 35 ll. 20–28) には、次のようなヒギンズとイライザの会話がある。

Higgins: Well, when I've done with her, we can throw her back into the gutter, and then it will be her own business again: so that's all right. [*He is moved to a chuckle by his own little pleasantries.*]

Eliza: Oh, you've no feelin' heart in you: you don't care for nothing but yourself. Here! I've had enough of this. I'm going. [*She makes for the door.*]

(下線部・著者)

この場面は、イライザがヒギンズの家を訪れ、発音を矯正するレッスンを受けさせてくれるように言っている場面である。イライザのセリフの中に、下線が引かれている単語がある。これらは語尾に-ingを有する単語である。

イライザが語尾に-ingを有する単語のgを脱落させて発音したセリフを表3.1にまとめた。このまとめは、イライザがヒギンズ教授の指導を受けることによって、彼女の発話するコックニーがどのように変化するかということを中心としている。そのため、イライザの話し言葉を表1のように Stage 1～Stage 4までの4段階に分類している。このようにイライザのコックニー訛の発話を Stage 毎に分類することで、イライザが RPを習得する過程でコックニー訛の頻度がどのように変化していくのか分析する。

表3 各 Stage におけるイライザの状態と該当ページ

	イライザの状態	『マイ・フェア・レディー』 (Lerner 1956) における 該当ページ
Stage 1	ヒギンズの指導を全く受けていない段階	pp. 15～37
Stage 2	ヒギンズの指導を受けているが、RP未習得の段階	pp. 48～55
Stage 3	RPを習得したが、まだおぼつかない段階	pp. 56～69
Stage 4	舞踏会で大成功した後の段階	pp. 89～122

表3.1 イライザによる-ingのgの脱落

Speaking to	DVD		BOOK		Stage
	Position	ELIZA says...	Position	ELIZA says...	
Mrs. Eynsford-hill	Chapter3 5.55	...you wouldn't let 'im spoil a poor girl's flow'rs and then run away without payin'.	p.16 1.14	you wouldn't let him spoil a poor girl's flowers and then run away without <u>paying</u> .	1
herself	Chapter3 6.51	I ain't done nothin' wrong by speakin' to the gentleman.	p.16 1.33	I ain't done nothin' wrong by <u>speakin'</u> to the gentleman!	1
Pickering	Chapter3 7.11	Sir, don't let 'im charge me. You dunno what it means to me. They'll take away me character and drive me on the streets for speakin' t' gentlemen.	p.17 1.8	Oh, sir, don't let him charge me! You dunno what it means to me. They'll take away my character and drive me on the streets for <u>speakin'</u> to gentlemen.	1

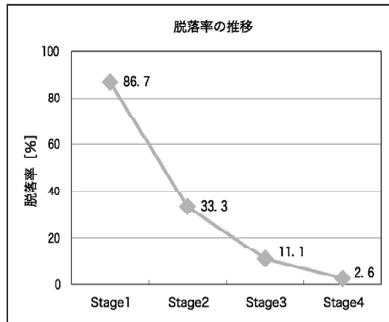
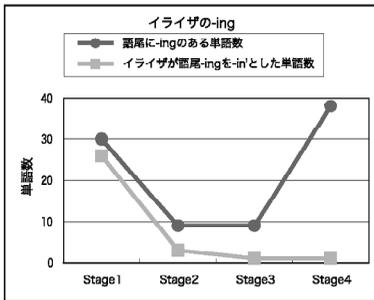
Pickering	Chapter3 7.11	Sir, don't let 'im charge me. You dunno what it means to me. They'll take away me character and drive me on the streets for speakin' t' gentlemen.	p.17 1.8	Oh, sir, don't let him charge me! You dunno what it means to me. They'll take away my character and drive me on the streets for speakin' to gentlemen.	1
Higgins	Chapter3 7.41	That ain't proper writin'. I can't read it.	p.17 1.24	That ain't proper writing. I can't read that.	1
Higgins	Chapter3 8.23	Oh, what 'arm is there in my leavin' Lisson Grove?	p.18 1.9	Oooooh, what harm is there in my leaving Lisson Grove?	1
Higgins	Chapter5 14.00	Buy a flower, sir. I'm short for me lodgin'.	p.22 1.12	Buy a flower, kind sir. I'm short for my lodgin'.	1
Higgins	Chapter5 14.09	You ought to be stuffed with nails, you ought. 'Ere, take the whole bloomin' basket for sixpence!	p.22 1.15	You ought to be stuffed with nails, you ought. Here! [<i>Shoving her basket at him</i>] Take the whole bloomin' basket for sixpence!	1
Song	Chapter6 15.42	Lots of coal makin' lots of 'eat	p.23 1.24	Lots of coal makin' lots of heat;	1
Song	Chapter6 15.54	Oh, so lverly sittin' absobloominlutely still	p.23 1.27	Oh, so lverly sittin' absobloominlutely still	1
Song	Chapter6 16.10	Someone's 'ead restin' on my knee	p.23 1.29	Someone's head restin' on my knee,	1
Mrs. Pearce	Chapter9 28.03	Oh, we are proud. Well, 'e ain't above givin' lessons, not 'im. I 'eard 'im say so. I ain't come here t' ask for any compliment and if my money's not good enough, I can go elsewhere.	p.31 1.11	Oh, we are proud! He ain't above giving lessons, not him: I heard him say so. Well, I ain't come here to ask for any compliment; and if my money's not good enough I can go elsewhere.	1
Higgins	Chapter9 28.33	Don't I tell you I'm bringin' you business?	p.31 1.21	Don't I tell you I'm bringin' you business?	1
Pickering	Chapter9 28.51	I want to be a lady in a flow'r shop 'stead of sellin' at the corner of Tottenham Court Road. But they won't take me unless I can talk more genteel. 'E said 'e could teach me. Well, 'ere I am ready to pay 'im. Not asking any favour and he treats me as if I was dirt. I know what lessons cost as well as you do and I'm ready t' pay.	p.31 1.28	I want to be a lady in a flower shop, 'stead of selling at the corner of Tottenham Court Road. But they won't take me unless I can talk more genteel. He said he could teach me. Well, Here I am ready to pay him—not asking any favour—and he treats me as if I was dirt. I know what lessons cost as well as you do; and I'm ready to pay.	1
Higgins	Chapter9 29.16	Now you're talkin'. I thought you'd come off it for a chance o' gettin' back a bit of what you chucked at me last night. You'd had a drop in, 'adn't you, eh?	p.32 1.1	Now you're talking! I thought you'd come off it when you saw a chance of getting back a bit of what you chucked at me last night. [<i>Confidentially</i>] You'd had a drop in, hadn't you?	1

Higgins	Chapter9 29.25	If you' re goin' t' make a compliment of it	p.32 1.6	Oh, if you're <u>going</u> to make a compliment of it-	1
Higgins	Chapter9 30.00	Well, you wouldn't 'ave the face t' ask me the same for teachin' me my own language as you would for French. So, I won't give more than a shillin'. Take it or leave it.	p.32 1.16	Well, you wouldn't have the face to ask me the same for <u>teaching</u> me my own language as you would for French; so I won't give more than a <u>shilling</u> . Take it or leave it.	1
Higgins	Chapter9 30.30	Sixty pounds? What are you talkin' about?	p.32 1.23	Sixty pounds! What are you <u>talkin'</u> about?	1
Higgins	Chapter10 33.31	'Ere. I'm goin'. He's off his chump, he is. I don't want no balmies teachin' me.	p.34 1.23	Here! I'm <u>goin'</u> away! He's off his chump, he is. I don't want no balmies <u>teachin'</u> me.	1
Higgins	Chapter10 34.38	You' ve no feelin' ' eart in ya! You don' t care for nothin' but yourself. I' ve ' ad enough of this. I' m goin' , I am!	p.35 1.23	Oh, you've no <u>feelin'</u> heart in you: you don't care for <u>nothing</u> but yourself. Here! I' ve <u>had</u> enough of this. I am <u>going</u> .	1
Higgins	Chapter10 34.56	'Ow do I know what might be in 'em? I' ve ' eard of girls bein' drugged by the likes o' you.	p.35 1.29	How do I know what might be in them? I' ve heard of girls <u>being</u> drugged by the like of you.	1
Doolittle	Chapter15 58.58	'Ere! What are you doin' ' ere?	p.48 1.5	Here! What are you <u>doin'</u> here?	2
Higgins	Chapter16 59.49	That' s what I been sayin' for three days an' I won' t say 'em no more.	p.48 1.26	I' ve been <u>syin'</u> them for three days, and I won' t say them no more!	2
Song	Chapter16 1.01.14	Ooooooh, ' Enry ' iggins, just you wait until we' re swimmin' in the sea.	p.49 1.24	Oooooooh, 'enry 'iggins! Just you wait until we' re <u>swimmin'</u> in the sea!	2
Horse	Chapter25 1.31.14	Come on, Dover! Move your bloomin' arse!	p.69 1.32	Come on, Dover!! Move your <u>bloomin'</u> arse!!!	3
Higgins	Chapter47 2.39.57	That' s done you, ' Enry ' iggins, it 'as. Now, I don' t care for your bullyin' an' your big talk.	p.116 1.8	Aha! That's done you, 'enry 'iggins, it 'as. Now I don't care that— [<i>she snaps her fingers in his face</i>] for your <u>bullying</u> and your big talk.	4

『マイ・フェア・レディー』（Lerner 1956）と DVD 版『マイ・フェア・レディー』を比較し、まとめたところ、表3.2のような結果になった。『マイ・フェア・レディー』（Lerner 1956）の中でイライザが発する言葉において、語尾に-ing を有する単語の総数は86語に及ぶ。そして、そのうちイライザが g を脱落させた単語の総数は31語であった。

表3.2 語尾に-ing を有する単語数と脱落した単語数

	語尾に-ing のある 単語数	イライザが語尾/m/を /m/とした単語数	脱落率[%]
Stage 1	30	26	86.7
Stage 2	9	3	33.3
Stage 3	9	1	11.1
Stage 4	38	1	2.6
全体	86	31	36



(左) グラフ 1.1 語尾に-ing を有する単語とイライザが'-in' と発音した単語数の推移

(右) グラフ 1.2 語尾-ing から-in' への変化率の推移

グラフ 1.1 は語尾に-ing を有する単語とイライザが g を脱落させて発音した単語数の推移である。このグラフから、語尾に-ing を有する単語数にかかわらず、イライザが語尾-ing の g を脱落して発音する頻度が減ったことが分かる。また、各ステージにおける g の脱落率の推移を線グラフにまとめたものが、グラフ 1.2 である。ステージ 2、およびステージ 3 は語尾に-ing を有する単語の数が少ないため、脱落率の有効性は疑問であるが、ステージ 4 では語尾に-ing を有する単語の数は 38 単語にもおよぶ。そのステージ 4 で、イライザが語尾を-ing から-in' にした単語の数は、わずか 1 単語、その率は 2.6 パーセントであった。さらに、その 1 単語というのは、イライザがヒギンズに向って怒りをぶつける場面であり、

故意に用いていることを考えると、大変な進歩であると言える。

4.5.2 アルフレッドの発話

次に、どのような条件でコックニー話者は語尾-ing の g を脱落させるのか考察してみようと思う。今度は、イライザの父親・アルフレッド = P = ドゥーリトル (Alfred P. Doolittle) の発話に注目する。

表3.3は、アルフレッドが発話した語尾-ing を含むセリフである。セリフの欄において、太字は語尾に-ing をもつ単語であることを示す。また、下線が引かれている単語は、文中のアクセント（核）である。アクセントはDVD版『マイ・フェア・レディー』で確認した。イタリック体の単語は、文中におけるアクセント（核）の置かれた語尾に-ing を持つ単語ということになる。「本」の欄における○は、『マイ・フェア・レディー』(Lerner 1956)においてgの脱落を表す-in' と記されている場合につけた。また、「DVD」の欄における○は、実際にDVD版『マイ・フェア・レディー』を再生し、脱落を確認したものである。同じく「DVD」の欄にあるハイフン（-）は、本と一致するセリフが存在していないことを表す。同一文中に2つ以上語尾に-ing をもつ単語がある場合、「本」および「DVD」の欄を単語数にあわせて設け、たとえば、語尾に-ing をもつ単語が2つの時は、「本」および「DVD」の上の欄が1つ目の単語、下の欄が2つ目の単語に該当する。

表3.3 アルフレッドが発話した-ing

セリフ	本	DVD	頁	行	発話相手
Hyde Park to walk through on a fine <i>spring</i> night;			25	22-23	Bartender
the whole ruddy city of London to roam about in sellin' her bloomin' <u>flowers</u> .	○	○	25	23-24	Bartender
	○	○			
Well, I'm willing to <u>marry</u> her.		○	26	10	Eliza
Someone else'll do the blinkin' <u>work</u> !	○	○	26	27	歌
I'm tryin' to keep 'em quite, lady!	○	-	27	24	Angry woman
They're always throwin' goodness at you;	○	-	28	13	歌

Oh, it's a crime for man to go philanderin'	○	—	28	16	歌
Oh, it's a crime for man to go philanderin' - but	○	—	28	18	歌
<u>What</u> are you talkin' about?	○	○	41	22	Mrs Hpkins
The sun is <i>shinin'</i> on Alfred P. Doolittle!	○		42	8	Mrs Hpkins
They'll go out and start supporting you!		○	42	15	歌
I'm <i>willing</i> to tell ya.			45	14	Higgins
I'm <i>wanting</i> to tell ya.			45	14	Higgins
I'm <i>waiting</i> to tell ya.			45	14-15	Higgins
And if you want the girl I'm <u>not</u> so set on havin' her back home again,	○	○	46	2-3	Higgins
and you're the last man alive to expect me to let her go for <i>nothing</i> ;			46	4-5	Higgins
I'm one of the <i>undeserving</i> poor, that's what I am.			46	19	Pickering
If there's <i>anything going</i> and I put in for a bit of it,		○	46	21	Pickering
it's always the same story: you're <i>undeserbing</i> , so you can't have it.			46	22-23	Pickering
But my needs is as great as the most <i>deserbing</i> widow's that ever got money out of six different charities in one week for the death of the same husband.			46	23-25	Pickering
I don't need less than a <i>deserving</i> man, I need more.			46	25-26	Pickering
I'm playing straight with you.		○	46	27	Pickering
I ain't pretending to be <i>deserveing</i> .		○	46	27-28	Pickering
I'm <i>undeserving</i> , and I mean to go <u>on being undeserving</u> .		○	46	28-29	Pickering
till she 's growed <u>big</u> enough to be interesting to you two gentlemen?		○	46	32-33	Pickering
Just one good spree for myself and the missus, givin' <u>pleasure</u> to ourselves and employment to others,		○	47	7-8	Pickering
I never thought she'd <u>clean up</u> so good-lookin' .	○	○	48	3-4	Eliza
<u>Good mornin'</u> , gentlemen.	○	○	48	10	Higgins
Was it him or was it not him that wrote to an old American blighter named Wallingford that was giving <u>five</u> millions to found moral reform societies,		○	100	24-26	Eliza
The bloke died and left me <u>four</u> thousand pounds a year in his bloomin' will.	○	○	100	31-32	Eliza
I say, you want to come and see me turned off this <i>mornin'</i> ?	○		101	24-25	Eliza

I'm getting <u>married</u> in the morning !		○	102	10	歌
		○			
I gotta be there in the mornin'	○	○	102	15	歌
<u>Spruced</u> up and lookin' in me prime.	○	○	102	16	歌
If I am dancin'	○	○	102	20	歌
If I am whistlin'	○	○	102	22	歌
For I'm getting' married in the <i>mornin'</i>	○	○	102	24	歌
	○				

表3.3の結果をまとめると、表3.4になる。本『マイ・フェア・レディー』のなかでは、アルフレッドのセリフのうち45パーセントの語尾-ingのgを脱落させて話すように書かれていた。しかし、実際に音声が取録されたDVDで確認すると、必ずしも本『マイ・フェア・レディー』の脱落箇所とDVDにおける脱落箇所が一致していない。これは、ラーナーが頭の中で描いた会話の調子と、映画『マイ・フェア・レディー』で演じられたアルフレッドの会話の調子が、若干異なっていたためかもしれない。

表3.4 アルフレッドの-ing (まとめ)

	単語数	脱落率 (%)
語尾に-ingのある単語数	44	—
本における脱落	20	45
DVDにおける脱落	25	57

DVDを用いて、表3.3をさらに分析する。表3.3から分るように、『マイ・フェア・レディー』はミュージカルであるため、アルフレッドが発した語尾に-ingを持つ単語の中には、歌に含まれている物がある。歌の場合、発音やアクセントが会話とは異なることがあるため、今回の分析ではそれらを除外する。加えて、DVDを主体に分析するため、本にあってDVDにないセリフも除外する。それらのセリフを取り除いて集計した結果、表3.5のようになった。

表3.5 除外後のアルフレッドの-ing

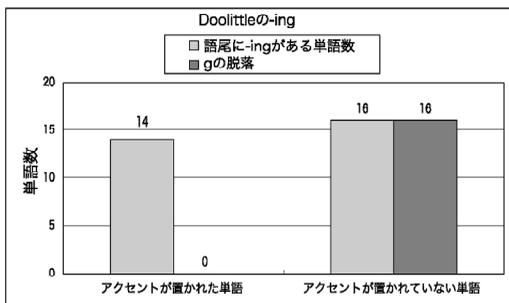
	単語数	脱落率(%)
語尾に-ingのある単語数	30	—
DVDにおける脱落	16	53

ここで、文の中で最も強いアクセントの置かれている単語と語尾に-ingがある単語に注目する。文における最も強いアクセントが、語尾に-ingをもつ単語に置かれているものは、全30単語のうち14単語あった。逆に、アクセントの置かれていない語尾に-ingを持つ単語は、16単語であった(表3.6)

表3.6 語尾に-ingを持つ単語の分類

	語尾に-ingを持つ単語の数
最も強いアクセントが置かれた単語	14
最も強いアクセントが置かれていない単語	16

文の中で最も強いアクセントが置かれた単語と置かれていない単語を比較してみると、アクセントが置かれた単語では-ingのgの脱落が一つも起きていないことが分かる。一方、アクセントが置かれていない単語は、全て-ingのgを脱落してしまっていることが分かる(グラフ1.3)。



グラフ1.3 文中のアクセントの有無によるアルフレッドの-ing

アルフレッドに限ってであるが、このグラフにより、語尾に-ing を持つ単語とアクセントの関係が明らかになる。つまり、語尾に-ing を持つ単語に文中の最も強いアクセントが置かれている場合、語尾-ing は必ず/ɪŋ/と発音される。そして、語尾に-ing を持つ単語に文中の最も強いアクセントが置かれていない場合、語尾-ing の g は必ず脱落し、/ɪn/または/ən/と発音されるということである（表3.7）。

表3.7 アルフレッドの発音条件

	語尾-ing の発音
文における最も強いアクセントが置かれた場合	/ɪŋ/
文における最も強いアクセントが置かれていない場合	/ɪn/または/ən/

表3.3に示したアルフレッドのセリフの中に、*mornin'* という単語が2回登場している。

Eliza [*her anger heightened by his presence*]: Here! What are you doin' here?

Doolittle [*sternly*] : You hold your tongue and don't you give these gentlemen none of your lip. If you have any trouble with her, Governor, give her a few licks of the strap. That's the way to improve her mind. [*He bows low*] Good mornin', gentlemen. [*Cheerfully whacking ELIZA on the backside*] Cheerio, Eliza. [*He goes out of the door in such high good spirits he cannot resist laughing out loud.*]

『マイ・フェア・レディー』ACT1 SCENE5 (p. 48 ll. 5-12) より (下線部・著者)

Freddy: Eliza, it's getting awfully cold in that taxi.

Doolittle: I say, you want to come and see me turned off this mornin'? St

George's, Hanover Square, ten o'clock. [*Sadly*] I wouldn't advise it, but you're welcome.

Eliza: No, thank you, Dad.

『マイ・フェア・レディー』ACT2 SCENE3 (p. 101 ll. 23-27) より(下線部・著者)

はじめの会話に出てくる *mornin'* には文中のアクセントが置かれていない。逆に、2つ目の会話に登場する *mornin'* には文中のアクセントが置かれている。その結果、Lerner の記述では、どちらも *mornin'* であるが、DVD の音声を聞くと前者は/mɔ:nən/、後者は/mɔ:nɪŋ/と発音されている。

4.5.3 ヒギンズの発話

最後に、RP 話者は語尾に-ing がついている単語をどのように発音しているか分析する。これにより、語尾-ing の発音に関する RP 話者とコックニー話者の発音の違いを比較する。今回は RP 話者の代表例としてヒギンズ教授の発音を取り上げることにする。

次に登場する表3.8は、ヒギンズが『マイ・フェア・レディー』の中で発した語尾に-ing を持つ単語を含む文である。表の様子は、表3.3と同様である。ただし、表3.8では、文中のアクセントを記していない。

表3.8 ヒギンズ教授が発話した-ing

	セリフ	本	DVD	頁	行	発話相手
1	Who's hurting you, you silly girl!			17	13	Eliza
2	Cease this detestable boohoing instantly or else seek the shelter of some other place of worship.			19	16	Eliza
3	A woman who utters such depressing and disgusting			19	20	Eliza
4	sounds has no right to be anywhere- no right to live.					
5	Remember that you are a human being with a soul and the divine gift of articulate speech;			19	22	Eliza

6	and don't sit there crooning like a bilious pigeon.			19	24	Eliza
7	I'd rather hear a choir singing flat.			20	14	歌
8	Chickens cackling in a barn...			20	15	歌
9	Why, you might be selling flowers, too.			20	25	歌
10	An Englishman's way of speaking absolutely classifies him.			20	27	歌
11	Arabians learn Arabian with the speed of summer lightning .			21	12	歌
12	The Hebrews learn it backwards, which is absolutely frightening .			21	13	歌
13	Do you know Colonel Pickering , the author of Spoken Sanskrit?			21	31	Pickering
14	I was going to India to meet you!			22	4	Pickering
15	Where are you staying ?			22	7	Pickering
16	No, you're not. You're staying at 27a Wimpole Street.			22	9	Pickering
17	Has she an interesting accent?			30	14	Mrs Pearce
18	We'll set her talking ;			30	19	Mrs Pearce
19	and I'm not going to waste another cylinder on it.			31	3	Mrs Pearce
20	Pickering , shall we ask this baggage to sit down,			31	22	Pickering
21						
22	You know, Pickering , if you consider a shilling , not as a simple shilling ,			32	19-20	Pickering
23						
24	Somebody is going to touch you with a broomstick, if you don't stop snivelling .		—	32	29-30	Eliza
25						
26	My dear Mrs Pearce, my dear Pickering .			34	7	Mrs Pearce
27	I never had the slightest intention of walking over anybody.			34	8	Mrs Pearce
28	the streets will be strewn with the bodies of men shooting themselves for your sake before I've done with you.			34	21	Eliza
29	you are to stay here for the next six months learning how to speak beautifully,			36	15	Eliza
30	you will be taken by the police to the Tower of London where your head will be cut off as a warning to other presumptuous flower girls.			36	24	Eliza
31	I'll take her anywhere and pass her off as anything .			37	9	Pickering
32	I find that the moment I let a woman make friends with me she becomes jealous, exacting , suspicious, and a damned nuisance.			37	21	Pickering
33	After all, Pickering ...			37	25	Pickering
34	Who desires nothing more			37	27	Pickering
35	Doing whatever he thinks is best for him.			38	1	Pickering
36	Then get on to the enthralling			38	7	歌
37	Fun of overhauling			38	8	歌
38	She has something else in mind;			38	13	歌
39	You do something else that neither			38	15	歌

40	And spend it searching for her glove			38	20	歌
41	I'd be equally as willing			38	25	歌
42	For a dentist to be drilling			38	26	歌
43	Let an insulting remark escape his lips.			39	5	歌
44	Now all at once you're using language			39	17	歌
45	And you are plunging in a knife!			39	20	歌
46	I'm a quiet living man			39	27	歌
47	Just a quiet living man.			40	6	歌
48	She'll have a booming , boist'rous fam'ly			40	15	歌
49	I'm glad to see you have some spark of family feeling left.			44	22	Doolittle
50	Pickering , this chap has a certain natural gift of rhetoric.			45	16	Pickering
51	I'm willing to tell you;			45	17	Pickering
52	I'm wanting to tell you;			45	18	Pickering
53	I'm waiting to tell you.			45	18	Pickering
54	You know, Pickering , if we were to take this man in hand for three months,			47	1	Pickering
55	Pickering , if we listen to this man another minute we shall have no convictions left.		—	47	25	Pickering
56	No use explaining , Pickering .			48	30	Pickering
57						
58	Drilling is what she needs.			48	31	Pickering
59	Much better leave her or sh'll be turning to you for sympathy.			48	32	Pickering
60	Pickering , this is going to be ghstly!			50	31-32	Pickering
61						
62	We must start from the very beginning .			51	17	Eliza
63	Does the same thing hold true in India, Pickering ;			51	23	Pickering
64						
65	the peculiar habit of not only dropping a letter like the letter aitch,			51	24	Pickering
66	but using it where it shouldn't be?			51	24	Pickering
67	Pickering!			54	33	Pickering
68	Eliza, if I can go on with a blistering headache, you can.			55	27	Eliza
69	But think what you're trying to accomplish.			56	1	Eliza
70	Think what you're dealing with.			56	2	Eliza
71	Pickering , we're making fine progress.			57	21	Pickering
72						
73	Pounding?			58	3	Mrs Pearce
74	I heard no pounding .			58	3	Mrs Pearce
75	Did you, Pickering?			58	3	Pickering

76	Pickering , I know!		—	58	6	Pickering
77	First thing in the morning we'll go off and buy her a			58	11	Pickering
78	dress.					
79	What better time to work than early in the morning ?			58	14	Mrs Pearce
80	We mustn't get her anything too flowery.			58	19	Pickering
81	Something simple, modest, and elegant is what's called for.			58	20	Pickering
82	Oh, darling, have you seen Pickering ?		—	65	13–14	Mrs Higgins
83	Oh, darling , she'll be all right.		—	65	18	Mrs Higgins
84	Help her along, darling , and you'll be quite safe.			65	22	Mrs Higgins
85	Well, she's got to talk about something .			65	25	Mrs Higgins
86	Being pinned.			65	30	Mrs Higgins
87	I told Pickering we should have taken her with us.			65	31	Mrs Higgins
88	Eliza can do anything .			74	11	Pickering
89	Are you helping Eliza?		—	75	2	Pickering
90	Rubbish, Pickering .			75	22	Pickering
91	What do you think I've been doing all these months?			75	23	Pickering
92	What could possibly matter more than to take a human					
93	being and change her into a different human being by			75	24–25	Pickering
94	creating a new speech for her?					
95	Why, it's filling up the deepest gulf that separates class from class,			75	26	Pickering
96	It was nothing .			86	5	歌
97	Really nothing .			86	5	歌
98	Never leaving us alone,			87	27	歌
99	Oozing harm from ev'ry pore,			88	1	歌
100	Now I can go to bed at last without dreading tomorrow.			89	8	Mrs Pearce
101	Good night, Pickering .			89	14	Pickering
102	I meant to tell her I wanted coffee in the morning instead of tea.			89	15	Higgins
103	Is anything wrong?			89	23	Eliza
104	Why have you suddenly begun going on like this?			90	15	Eliza
105	Colonel Pickering ?			90	18	Eliza
106	There's nothing more to worry about.			90	29	Eliza
107	Nobody's hurting you.			91	1	Eliza
108	Oh, that's what's worrying you, is it?			91	11	Eliza
109	I should imagine you won't have much difficulty in settling yourself somewhere or other-			91	13	Eliza
110	Most men are the marrying sort, poor devils.			91	17	Eliza
111	And you're not bad-looking .			91	18	Eliza
112	You've been crying and look like the very devil;			91	19	Eliza

113					
114	Tosh, Eliza, don't insult human relations by dragging all that cant about buying and selling into it.		91	31-32	Eliza
115					
116		Pickering could set you up in one.	—		
117	He'll have to pay for all those togs you've been wearing ;		92	4	Eliza
118	By the way, I was looking for something .		92	7	Eliza
119					
120	What the devil use would they be to Pickering ?		92	17	Eliza
121	Why need you start botheing about that in the middle of the night?		92	18	Eliza
122	Stealing ?		92	21	Eliza
123	That shows a want of feeling .		92	22	Eliza
124	You infamous creature, how dare you accuse me of such a thing ?		93	10	Eliza
125	You have caused me to lose my temper, a thing that has hardly ever happened to me before.		93	15	Eliza
126	I prefer to say nothing more tonight.	—	93	16	Eliza
127	And damn my own folly in having lavished my hard-earned knowledge and the treasure of my regard and intimacy on a heartless gutter-snipe!		93	22	Eliza
128	Pickering!		105	5	Pickering
129	Pickering!		105	5	Pickering
130	Here's a confounded thing!		105	13	Pickering
131	And Mrs Pearce let her go without telling me a word about it.		105	15	Pickering
132	I got tea this morning instead of coffee.		105	19	Pickering
133	I can't find anything .		105	19	Pickering
134	For God's sake, Pickering , stop being dashed and do something .		106	9-10	Pickering
135					
136					
137	They're nothing but exasperating , irritating ,		107	24	歌
138					
139					
140	Vacillating , calculating , agitating ,		107	25	歌
141					
142					
143	Maddening . And infuriating hags!		107	26	歌
144					
145	Pickering , why can't a woman be more like a man?		107	31	Pickering
146	Why do they do everything their mothers do?		108	7	歌
147	Pickering!		109	22	Pickering
148	Pickering!		109	22	Pickering

149	Why is thinking something women never do?			110	1	歌
150						
151	Straightening up their hair is all they ever do.			110	3	歌
152	Would I start weeping like a bathtub overflowing ?			110	8	歌
153						
154	Would I run off and never tell me where I'm going ?			110	10	歌
155	You've caused me enough trouble for one morning !			112	3	Eliza
156	The great secret, Eliza, is not having bad manners or good manners or any other particular sort of manners, but having the same manner for all human souls.		—	113	26–27	Eliza
157						
158	I've learned something from your idiotic notions.			114	10	Eliza
159	Yes: and you may walk out tomorrow if I don't do everything you want me to.			114	21	Eliza
160	Or would you rather marry Pickering ?			114	24	Eliza
161	And how Pickering feels.			115	9	Eliza
162	It's all you'll get until you stop being a plain idiot.			115	12	Eliza
163	If you're going to be a lady you'll have to stop feeling neglected if the men you know don't spend half their time snivelling over you and the other half giving you black eyes.		—	115	13–15	Eliza
164						
165						
166						
167	You find me cold, unfeeling , selfish, don't you?			115	16	Eliza
168	Like breathing out and breathing in.			119	12	歌
169						
170	And a bill-collector beating at the door.			120	3	歌
171	With a social climbing heiress from New York!			120	14	歌
172	How humiliating !			120	18	歌

表3.8から分かるとおり、ヒギンズは文中のアクセントの位置にかかわらず、全ての語尾-ingを/ɪŋ/と発音していることが分かる。この結果は、アルフレッドや授業を受ける前のイライザとは対照的なものといえる。これまでのコックニー話者に関する分析と、このヒギンズの結果から、上流階級では語尾-ingを/ɪn/として発音することを避ける傾向にあることが明確に現れた。

このヒギンズに関する調査結果は、4.5.1 イライザの発音分析で述べたイライザがRPへと発音を矯正する過程で語尾-ingを/ɪn/と発音しなくなった裏づけとなる。

6 まとめ

今回の研究では、私が今まで研究した『マイ・フェア・レディー』における話し言葉の中から、語尾-ingにおけるgの脱落について述べた。イライザの-ingの統計をとることによって、イライザの語尾-ingのgの脱落がRPへ矯正していく過程で、減少していくことが明らかになった。また、アルフレッドのセリフの分析により語尾-ingの発音と文中のアクセントの関係について興味深い結果が得られ、それにより語尾に-ingを持つ単語に文中のアクセントが置かれている場合、語尾-ingは必ず/ɪŋ/と発音され、文中のアクセントがない語尾に-ingを持つ単語の場合、語尾-ingのgは必ず脱落するということが推測できた。ただし、これはあくまでも『マイ・フェア・レディー』におけるアルフレッドのセリフに限定した結果である。アルフレッドに続いて、イライザの語尾-ingとアクセントの関係についても、今後分析を行って明らかにしていこうと思っている。さらに、今回の研究において、ヒギンズ教授の-ingについて分析を行ったが、このことによりイライザのgの脱落が減少した理由の裏づけがとれた。

注

- (1) Shaw, George *Bernard*, *PYGMALION*. The Bodley Head Bernard Shaw Collected Plays with their Prefaces, Dan H. Laurence, vol.4, Max Reinhardt, 1972. p. 5
- (2) Cooper, Jilly. *CLASS*. Transword Publishers Ltd., 1979. p. 297
- (3) ロバート=マクラム・ウィリアム=クラン・ロバート=マクニール 岩崎春雄・海保眞夫・松本典久・松田隆美・長沼登代子 (訳). 『英語物語』 *The Story of English*. 東京：文藝春秋 p. 414
- (4) Hughes, A. & P. Trudgill. *English Accents and Dialects—An Introduction to Social and Regional Varieties of English in the British Isles (Third Edition)*. London: Arnold, 1996. p. 2

- (5) ロバート=マクラム・ウィリアム=クラン・ロバート=マクニール 岩崎春雄・海保眞夫・松本典久・松田隆美・長沼登代子(訳).『英語物語』*The Story of English*. 東京:文藝春秋 p. 25
- (6) 竹林滋・斎藤弘子(共著).『英語音声学入門』東京:大修館書店, 1998. p. 6
- (7) 片山嘉雄・長瀬慶来・上斗晶代(共著).『英語音声学の基礎—音変化とプロソディーを中心に—』東京:研究社出版, 1996. pp.140-141
- (8) Wells. C. J. *Pronunciation Dictionary*. Longman, 2000. p.392
- (9) ——. *Ibid.* p.384
- (10) デイヴィッド=クリスタル(著) 風間喜代三・長谷川欣佑(監訳).『言語学百科事典』東京:大修館書店, 1992. p.60
- (11) ——. *Ibid.* p. 60
- (12) ——. *Ibid.* p. 60
- (13) ——. *Ibid.* p. 60
- (14) ——. *Ibid.* p. 59
- (15) ——. *Ibid.* p. 59
- (16) ——. *Ibid.* p. 60
- (17) P.トラッドギル著・土田滋訳『言語と社会』東京:岩波新書, 1975. p. 46
- (18) ——. *Ibid.* p. 46
- (19) Hughes, A. & P. Trudgill. *English Accents and Dialects—An Introduction to Social and Regional Varieties of English in the British Isles (Third Edition)*. London: Arnold, 1996. p. 63
- (20) ロバート=マクラム・ウィリアム=クラン・ロバート=マクニール 岩崎春雄・海保眞夫・松本典久・松田隆美・長沼登代子(訳).『英語物語』*The Story of English*. 東京:文藝春秋 p. 419
- (21) Hughes, A. & P. Trudgill. *English Accents and Dialects—An Introduction to Social and Regional Varieties of English in the British Isles (Third Edition)*. London: Arnold, 1996. p. 63
- (22) 荒木一雄・安井稔(編).『現代英文法辞典』東京:三省堂, 1992. p.253
- (23) ——. *Ibid.* p. 253
- (24) M. ウェイクリン・P. ライト・A. R. トマス・A. J. アイトクン・A. J. プリンズ・松村好浩訳『世界の英語 I イギリス諸島編』東京:研究社, 1983. p. 96
- * コンピューターでトランスクリプトを表記する際、Length Marksが存在しないため、Length MarksをColon [:] で置き換えることにする。

参考文献

- Bernard F. Dukore Edt. *The Collected Screenplays of Bernard Shaw*. Prior, 1980.
- Clark. J and C. Yallop. *An Introduction to Phonetics and Phonology. (Second edition)* Blackwell Publishers, 1995.
- Crystal, David. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics. (Fourth Edition)* Penguin Books, 1997.
- Crystal, David. *The Cambridge Encyclopedia of Language. (Second Edition)* Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Crystal, David. *The English Language. (2nd edition)* Penguin Books, 2002.
- Cooper, Jilly. *Class*. London: Transworld Publishers Ltd., 1979.
- Cruttenden, Alan. *Gimson's pronunciation of English (Sixth Edition)* London : Arnold, 2001.
- Jones, Daniel. *An Outline of English Phonetics* . Heffer Maruzen, 1973.
- Hughes, A. & P. Trudgill. *English Accents and Dialects—An Introduction to Social and Regional Varieties of English in the British Isles (Third Edition)* . London: Arnold, 1996.
- Learner, Alan Jay. [Adaptation and lyrics] *My Fair Lady. (1st edition)* Penguin Books, 1956.
- Lightbown, M. P. & N. Spada. *How Languages are Learned* .Oxford University Press, 1993.
- O' Connor, J. D.& G. F. Arnold. *Intonation of Colloquial English : A Practical Handbook*. London: Longman, 1961. 1973.
- Raymer, Jessica Lynn. “Pygmalion” vs. “My Fair Lady”: *A Comparison of the Vision of Two Authors and What Each Play Says to Women*. UMI Dissertation Services, 1999.
- Robert McCrum, William Cran, & Robert MacNeil. *The Story of English. (3rd edition)* BB C Books, 2002.
- Shaw, George Bernard. 倉橋健・喜志哲雄訳『人と超人／ピグマリオン』東京:白水社、1993.
- Shaw, George Bernard. *Pygmalion*. The Bodley Head Bernard Shaw Collected Plays with their Prefaces, ed. Dan H. Laurence, vol.4, Max Reinhardt, 1972.
- Sweet, Henry. *New English Grammar*. Oxford University Press, 1918.
- Patricia, Ashby. *Speech Sounds*. London and New York: Routledge, 2002.
- Pullmun. G. and W. Ladusaw. *Phonetic Symbol Guide*. University of Chicago Press,

- 1986.
- Roach Peter and Hartman James Edt. *English Pronouncing Dictionary (15th edition)*. Cambridge University Press, 1997.
- Roach Peter. *English Phonetics and Phonology (Third edition)*. Cambridge University Press, 2000.
- Roach Peter. *English Phonetics and Phonology A Practical course (Third edition)*. Cambridge University Press, 2000.
- Routledge, Matthews William & Paul Kegan. *Cockney Past and Present*. London and Boston, 1938
- Trudgill, Peter. *Sociolinguistics: An Introduction (Revised Edition)*. London: Penguin Books, 1983
- Wells. C. J. *Accents of English 2 -The British Isles*. Cambridge : Cambridge University Press, 1982.
- Wells. C. J. *Pronunciation Dictionary*. Longman, 2000.
- Wright, Peter. *Cockney Dialect and Slang*. London: B. T. Batsford Ltd., 1981.
- J.D.オコナー・G.F.アーノルド 片山嘉雄・長瀬慶来・長瀬恵美(共編訳).『イギリス英語のイントネーション』*Intonation of Colloquial English*. 東京:南雲堂, 1994.
- M. ウェイクリン・P. ライト・A. R. トマス・A. J. アイトクン・A. J. プリンス・松村好浩訳『世界の英語 I イギリス諸島編』東京:研究社, 1983.
- P.トラッドギル著・土田滋訳『言語と社会』東京:岩波新書, 1975.
- 安倍勇『英語イントネーションの研究』東京:研究社, 1963.
- 荒木一雄・安井稔(編).『現代英文法辞典』*Sanseido's New Dictionary of English Grammar*. 東京:三省堂, 1992.
- 石橋幸太郎・大塚高信・中島文雄(監修).『H・スウィート』不死鳥英文法ライブラリー1 東京:南雲堂, 1967.
- 石橋幸太郎(編集主幹).『*Question—Box Series* 第1巻 I. *Pronunciation*』東京:大修館書店, 1960.
- 石橋幸太郎 『現代英語学辞典』*Seibido's Dictionary of English Linguistics*. 東京:成美堂, 1973.
- 大塚高信・中島文雄(監修). *The Kenkyusha Dictionary of English Linguistics and Philology*. 『新英語学辞典』東京:研究社, 1982.
- 大田聡・窪菌晴夫(共著). 『音韻構造とアクセント』(日英語比較選書10) 東京:研究社出版, 1998.
- 片山嘉雄・長瀬慶来・上斗晶代(共著).『英語音声学の基礎—音変化とプロソ

- ディーを中心に—』東京:研究社出版, 1996.
- 島岡丘『カナ活用 英語のリズムとレダクション』東京:洋販出版, 1997.
- 島岡丘『中間言語の音声学』東京:小学館プロダクション, 1994.
- 杉藤美代子『音声波形は語る』大阪:和泉書院, 1997.
- 竹林滋『英語音声学』東京:研究社, 1996.
- 竹林滋・斎藤弘子(共著).『英語音声学入門』東京:大修館書店, 1998.
- デイヴィッド=クリスタル(著)風間喜代三・長谷川欣佑(監訳).『言語学百科事典』東京:大修館書店, 1992.
- 新村出編『広辞苑』第五版. 東京:岩波書店, 1998.
- 西原忠毅・谷口雅基(共著).『米語音声学の理論と実践』西南言語研究所, 2001.
- 御園和夫『英語音声学研究』東京:和広出版, 1995.
- ロバート=マクラム・ウィリアム=克蘭・ロバート=マクニール 岩崎春雄・海保眞夫・松本典久・松田隆美・長沼登代子(訳).『英語物語』*The Story of English*. 東京:文藝春秋
- 渡辺和幸『英語イントネーション論』東京:研究社, 1994.

与动词搭配的补语“上来、上去”的分类

神 谷 博

0 引 言

在学习现代汉语时，往往会遇到一些有关趋向动词搭配问题。一般表示移动方向的趋向动词的问题比较少，可是趋向动词表达的不只是移动意义，还有很多虚化意义。我想在本文中以趋向动词“上来”和“上去”的意义来看一看它的搭配功能。

1 补语位置上“上来、上去”用法的不平行性

1.0 述语和补语“上来”、“上去”的选择关系

根据对一定数量的语料的调查，我们发现造成“上来”、“上去”在作趋向补语时的不平行性有诸多因素，但是，其中最重要的因素是述语动词的句法语义特点。因此，我们把重点放在研究相关动词的句法语义特点上。为了研究“上来”、“上去”跟动词的选择关系，我们首先根据动词跟“V + 上来/上去 + NP”句式的关系，把V分为四类：

A: 可以进入“V + 上来/上去 + NP”的动词 (Va)

B: 不能进入“V + 上来/上去 + NP”的动词 (Vb)

C: 只能进入“V + 上来 + NP”的动词 (Vc)

D: 只能进入“V + 上去 + NP”的动词 (Vd)

关于“上来”、“上去”的义项⁽¹⁾:

上来: 向上。(由远而近)	把他叫上来开会。
呈现、出现。	饭菜都摆上来了。
实现。	那段话我翻译不上来。
上去: 向上。(由近而远)	跑上山去。
附着。	你把图章盖上去。

1.1 可以进入“V + 上来/上去 + NP”句式的动词

一般来说,只要具有 [+移动] 并且是“可以向上移动的”语义特征的动词 (以下记作 V [+上移]), 都可以进入“V + 上来/上去 + NP”句式。例如:

1. 搬: 移动物体的位置。

 你想法把我的箱子~上来

 冰箱~上去了

2. 插: 中间加进去或加进中间去。

 ……他便立即~上来进行针锋相对的反驳

 无论别人议起哪位时他都能~上去侃几嘴

3. 扯: 拉。

 把被子~上来点儿

 大夫就会喂他点儿毒药,叫他两眼~上去再也落不下来

4. 推: 向外用力使物体或物体的某一部分顺着用力的方向移动。

 车子拉动了,并不怎么费力,陷在坑里要~上来可不易

 ……空车~上去后,必须立即从另一头跑步下来

这些动词都可以进入“V + 上来/上去 + NP”格式。在《动词用法词典》中可以带趋向意义补语“上来”、“上去”的动词共有298个,其中都可以

进入“V + 上来 / 上去 + NP”句式的动词（以下记作 Va）有142个。可以列举如下：

安	装 / 设立
摆	安放 / 陈列
搬	移位
—	迁移
包	围绕 / 包围
抱	用手臂围住
背	用背驮
编	编织
补	补充 / 补足
插	加进中间去
搀	扶
唱	口中发出
抄	誊写
—	走进路
吵	争吵
扯	拉
冲	直闯
—	冲洗 / 冲击
抽	取出一部分
—	吸
穿	连起来
传	交
—	传导
—	发命令叫人来
吹	嘴用力出气
凑	聚集
—	接近
搭	放
—	接连在一起
—	共同抬起
打	殴打 / 攻打
带	随身拿着
—	捎带做某事
—	引导 / 领
担	挑

倒	腾挪
登	刊登
—	腿部向下用力
—	踩
递	传递
调	分派
顶	顶替
逗	引逗
端	平举着拿
堆	堆积
翻	爬过
放	处于一定位置
飞	动物
—	机器
—	飘动
盖	遮掩
赶	追
—	驾御
搞	做
搁	处于一定位置
跟	跟随行动
刮	吹
挂	挂东西
裹	
喊	叫
哄	哄骗
画	图画
换	变换
挤	挤开
夹	由两方固定
加	数学用语
—	本无添加
交	转移给
缴	交出
叫	呼唤

接	连接
—	接替
救	援助
举	往上托
—	提出
卷	弯转成筒形
开	发动或操纵
扛	用肩膀承担
拉	向自己移动
—	用力载运
流	液体流动
搂	把东西聚集
描	照底样画
拿	用手搬动
爬	用手脚移动
—	攀登
攀	抓住东西爬
抛	投出
跑	迅速前进
陪	陪伴
喷	受压力射出
捧	奉承
披	覆盖
骗	欺骗
拼	合在一起
评	评判
扑	冲
铺	摊开
骑	两腿跨坐
砌	
扔	投
捎	顺便带
伸	展开
升	往高移动
—	提高等级

收	收买/收拾
梳	梳理
送	拿去给人
一	送人走
抬	往上托
一	搬东西
踢	用脚触击
提	垂手拿着
挑	扛
挑	用杆支
一	刺绣法
跳	
贴	粘住

捅	戳
投	向目标扔去
推	使物体移位
一	用工具剪等
拖	牵引/拉
托	双手向上拿
驮	用背负载
吸	吸引
献	敬献
写	写字
绣	绣花
选	挑选
一	选举

压	压盖
一	下注(赌博)
运	搬运
造	做
站	直立
织	制布
抓	加强领导
装	放进器物内
追	追赶
坐	坐椅子
一	把锅放火上

1.2 不能进入“V + 上来/上去 + NP”句式的动词

一般来说,不具有 [+上移] 语义特征的动词不能进入“V + 上来/上去 + NP”句式。例如:

5. 爱: 对人或事物有很深的感情。

*~上来他了

*~上去一个人

6. 吃: 依靠别人或某种事物来生活。

*他现在~上来女婿了

*他现在~上去女婿了

7. 赛: 比赛。

*乒乓球队~上来了水平

*再~上去一盘

8. 烫: 因接触高温感觉疼痛或受伤。

*~上来一块皮

*~上去两个大泡

以上一些动词都不能进入“V + 上来/上去 + NP”格式。不能进入“V +

上来/上去+ NP”句式的动词（以下记作 Vb）共有 554 个。可以列举如下：

挨	靠近
—	遭受/忍受
爱	有很深感情
—	喜欢
—	爱惜/爱护
安	安排妥当
按	抑制
熬	煮
—	忍受
拔	夺取
—	使物变淳
掰	分开/折断
摆	显示/炫耀
—	摇动/摇摆
搬	拿来使用
办	办理/处理
—	创设/经营
—	采购/置备
帮	
包	承包
—	约定专用
抱	领养/送养
背	躲避/瞒
奔	走去/投向
—	为某事奔走
逼	逼迫/强索
比	比较/较量
—	对着/向着
闭	关/合
编	排列起来
变	与原来不同
—	改变
病	
拨	分出一部分

擦	摩擦
—	磨擦使干净
—	使成细丝
裁	去掉多余部分
采	摘
—	搜集
藏	
查	调查/寻找
—	翻检着找
差	错误
拆	打开
—	拆毁
搀	混合起来
尝	试味
唱	大声叫
抄	搜查并没收
—	抄手
炒	烹调
吵	声音扰乱人
扯	撕、撕下
—	闲谈
撤	除去
—	退
—	降级
—	取掉、抽出
沉	沉入水中
称	叫
称	测量
盛	容纳
吃	吃食物
—	靠他人生活
—	消灭
—	吸取
冲	用开水浇

抽	从中间取出
—	(谷穗) 长出
—	收缩
—	打
愁	忧虑
出	从内到外
—	往外拿/显露
—	出产/发生
—	发出/发泄
除	去掉
—	算法
锄	除草
穿	
传	传授
—	传播
—	传染
串	错误的连接
—	由这到那走动
闯	猛冲
凑	碰、趁
催	催促
存	保存
—	蓄积
—	储蓄
—	寄存
—	保留
搓	摩擦
搭	乘、坐
打	撞击而破碎
—	与人交涉
—	制造
—	搅拌
—	捆
—	举/提

—	放射/发出
—	付或领 [证件]
—	除出
—	割、砍动作收集
—	定出/计算
—	做/从事
—	做(体育/游戏)
—	身体动作/方式
带	含有
担	承担
—	担当某工作
掸	轻抽或扫
当	担任
—	掌管
倒	横躺下来
捣	撞击
倒	转方向
—	扔
得	得到
—	计算
等	等待
点	点击触
—	踮
—	点头
—	点播
—	查数目
—	指点
—	引着火
垫	替付钱
掉	落
—	遗失
—	减少
—	回
—	互换
跌	
叮	
盯	
钉	紧跟

—	督促
顶	用头支承
—	用头撞击
—	支撑
—	顶撞
—	担当
定	
订	约定
丢	遗失
—	扔
懂	
动	动
—	动作
—	使用
—	触动
冻	凝结
—	冷
斗	斗争
—	使动物斗
—	比赛争胜
读	发音
读	阅看
断	中断
对	对待
—	朝
—	对比
—	对正
—	搀和
蹲	
—	较长停留
多	超出
—	过分
夺	抢
—	争先取到
躲	躲避/躲藏
剝	向下砍
饿	饥
—	使受饿

发	送出/交付
—	发射
—	产生
—	表达
—	发财
—	膨胀
—	流露
—	感到
罚	
翻	找
—	推翻
—	变态度
犯	违犯
—	发作
放	解除约束
—	一定时间停止
—	放牲口
—	发出
—	点燃
—	借钱收利
—	扩展
—	搁置
—	弄倒
—	加进去
飞	挥发
费	
分	分开
—	分配
—	辨别
扶	用手支持
—	使东西竖立
该	欠
改	改变
—	修改
—	改正
盖	超过
—	建筑
赶	加快使不误时

一	轰
干	做
	担任
搁	搁置
耕	用工具翻土
雇	
刮	去掉
一	搜刮
挂	打电话
拐	转方向
一	拐骗
怪	责备
关	不使出来
一	发/领工资
管	管理
一	管教
一	担任
逛	外出闲游
跪	
滚	滚动
一	走开
过	空间/时间移动
一	经过(处理)
喝	咽下液体
合	结合
一	拆合
哄	使人高兴
花	耕费
划	拨水前进
一	刻、擦过去
划	
化	融化
还	归还
一	回报别人
换	交换
一	兑换
回	回来
一	掉转

混	搀杂
一	蒙混
活	生存
挤	紧紧靠拢
一	压出孔隙
寄	递送
夹	夹杂
剪	
减	数学用语
一	降低
讲	商议
降	落下
一	使落下
一	灌溉
教	
嚼	
搅	
叫	发大声
一	称为
接	托住
一	迎接
揭	取下
一	拿起
解	打开
借	借进
一	借出
紧	用力收紧
进	从外到里
卷	风卷
掘	刨/挖
开	打通
一	[队伍] 开拔
一	举行
看	守护/照料
砍	断开
看	诊治
烤	
嗑	磕打

啃	咬
扣	减去
哭	
拉	割
落	丢在后面
捞	不正取得
理	整理
立	站立
晾	
淋	滤
留	停留
一	保留
搂	搜刮[钱财]
漏	
一	遗漏
落	掉
一	下降
抹	擦
一	按向下移动
埋	用土等盖住
买	
卖	
迷	
描	重复涂沫
摸	暗中进行
磨	摩擦
一	磨而使锋利
一	纠缠
一	消耗时间
抹	擦
磨	把粮食弄碎
一	掉转
拿	掌握
闹	喧哗
一	发泄[感情]
一	发生事情
一	干/搞
撵	赶走

捻	用手指搓
碾	使物体破碎等
念	上学
拧	搓
一	掐
扭	掉转
一	揪
一	身体左右摇动
弄	设法取得
挪	转移
怕	害怕
拍	用手掌打
一	拍摄
一	发电报等
排	排成行列
一	排演
一	用力除去
派	分配
跑	逃走
一	为某事奔走
一	离开应在位置
一	液体挥发
泡	浸放液体中
一	故意消磨
赔	赔偿
一	赔本
配	调合
捧	双手托
碰	试探
批	文章予以批评
一	批判
劈	分开
一	分裂
一	过分叉开腿等
飘	在空中飘浮
评	评论
破	使损坏
一	换成零的

扑	拍打
沏	
气	生气
掐	用指甲按
抢	抢夺
敲	轻打
一	敲诈
撬	
切	
请	请求
一	邀请
劝	
嚷	喊叫
一	吵闹
让	给别人
一	请人接受招待
绕	迂回
认	认识
扔	丢掉
揉	用手擦或搓
一	团弄 [面]
撒	放开
赛	比赛
散	散布
一	排除
扫	打扫
杀	弄死
一	战斗
筛	过滤 (除液体)
晒	照射太阳
闪	闪避
上	添补
一	上课
烧	烹调方法
赊	买卖延期付款
射	用推力等送出
一	放出
审	审查

一	审讯
渗	液体慢慢透浸
生	生育
省	节约
一	免掉
拾	捡
使	使用
试	试验
收	接受
守	防守
一	看守
输	运输
一	败
数	查点数目
摔	倒下
一	扔
一	摔打
涮	
睡	
顺	使方向一致
撕	
缩	收回
一	后退
锁	缝纫方法
塌	凹下
摊	烹饪方法
一	分担
弹	由弹性射出
一	弹棉花
探	试图发现
一	向前伸出
躺	
烫	因高温而受伤
一	使衣物平坦
掏	把东西拿出来
一	挖
逃	逃跑
一	逃避

淘	除去杂质
套	模仿
—	引出真话
剔	刮肉
—	往外挑
—	剔除
提	提取
—	谈
—	提议/提举
剃	用刀刮去毛发
替	代替
填	塞满凹处
舔	
调	配合
挑	用细长物拨
—	挑拨
贴	贴补
听	听从
停	止住/中止
—	停留
通	无堵塞
—	使不堵塞
偷	
投	寄给人
透	透过
—	暗地里告诉
突	冲
—	往外鼓
涂	抹去
吐	从嘴里出来
吐	从嘴里涌出
推	磨粮
—	推委
退	向后移动
—	退还
褪	脱
吞	咽下

—	并吞
脱	皮肤等脱落
—	取下/除去
拖	拖延
弯	屈曲
玩	玩耍
—	做文体活动
喂	给东西吃
—	送到嘴里
问	请人解答
—	慰问
握	用手拿或抓
吸	喝
洗	去脏
—	冲洗相片
下	到低处
—	卸除
吓	吓唬
掀	打开盖子
献	表现给人看
想	思索
歇	休息
修	修理
—	兴建
学	学习
压	压制
—	搁着不动
轧	碾
腌	用盐浸渍食物
演	表演
咽	吞下
养	养活
—	饲养或培植
—	生育
—	养神
摇	摇摆
咬	

赢	得胜
邮	邮寄
扎	捆
—	摔倒
凿	打孔/挖掘
扎	刺
铡	用铡刀切
炸	轰炸
摘	取(果实等)
—	选取
长	成长
招	引来
找	找零钱
照	照射
—	照镜子
治	医治
—	消灭
煮	
住	居住
抓	划
—	捉拿
转	改变方向等
—	不直接地送
转	旋转
—	绕着移动
赚	获得利润
装	装配
撞	猛然碰上
追	追究
捉	
走	挪动
钻	造窟窿
—	穿过
—	钻研
做	制造
—	做事

1.3 A类动词与B类动词的区别

“上来”最基本的意义是“由低处到高处并由远处到近处来”，即“向上和趋近”，又由此引申出“呈现；出现；实现”义。“上去”最基本的意义是“由低处到高处或由近处到远处来”，即“上移和离远”，由此引申出“附着”义。A类动词和B类动词能否带表示趋向意义的“上来”、“上去”应该从动词Va和Vb本身的意义是否可以和趋向意义相容来看，我们发现能进入“V+上来/上去+NP”句式的Va都含有一个共同的语义特征[+上移]。所谓[+上移]指的是“某物由于某种动作由低处的甲点移动到高处的乙点(甲→乙)”。Va和这种趋向意义的“上来”、“上去”结合时，它们的意义上一定要相容。由这一点来看，“V+上来/上去+NP”句式中的V可以改写为Va(即V[+上移])，“V+上来/上去+NP”句式也可以相应地改写为“Va+上来/上去+NP”。例如：

9. 包：围绕；包围。(不单独做谓语。)

敌人从四方~了上来

我军从两路~了上去

10. 抄：从侧面或较近的小路过去。

他从小路~上来了

你们从侧面~上去

11. 调：调动；分派。

保卫科长老徐从各车间抽~上来十几个人

现在想~上去的排大队呢

12. 刮：[风]吹。

土都~上来了

把纸片~上去了

相反B类动词(Vb)一般是不具有[+上移]义的，即V[-上移]。比如：

13. 包：把整个任务承担下来，负责完成。

14. 愁: 忧虑。
15. 犯: 抵触; 违犯。
16. 扔: 抛弃; 丢。

这种 V [-上移] (即 Vb) 是不能进入“V + 上来/上去 + NP”格式的。

1.4 A类动词 (Va) 的再分类

对于可以进入“Va + 上来/上去 + NP”句式的 A 类动词, 我们能够以其意义来进行再分类。比如可以从 Va 本身意义或者跟它搭配的“上来”、“上去”的意义来分类。如果对 Va 类动词做意义分析的话, 大概无法用几个意义来概括该类动词。因此, 我们应该从和 Va 类动词相组合的“上来”、“上去”的意义来对 Va 类动词进行分类。

“上来”自身的主要意义是“向上; 出现; 实现”, “上去”自身的主要意义是“向上; 附着”。由此义项我们可以把“上来”、“上去”的意义归纳为三类: 1、向上移动; 2、实现; 3、出现、呈现。分别把它们记作 Va₁、Va₂、Va₃。

1.4.1 Va₁ “向上移动”

“向上移动”是物体的移动方向可以是“由低处到高处”。例如:

17. 搬: 移动物体的位置 (多指笨重的或较大的)。

你想法把我的箱子~上来

冰箱~上去了

18. 扯: 拉。

把被子~上来点儿

大夫就会喂他点儿毒药, 叫他两眼~上去再也落不下来

19. 登: 腿和脚向脚底的方向用力。

这么陡的坡, 你能把车~上来吗

翠屏把那捆麻绳和绑带斜挎肩上, 手抠脚~了上去

20. 挂: 借助于绳子、钩子、钉子等使物体附着于高处的一点或几点。

把你的衣服也~上来

“电影夫妻店”这块牌匾是我替李前宽、肖桂云~上去的

1.4.2 Va₂ “制作”

“制作”是使某种计划、设想等成为事实。例如:

21. 安: 装; 设立。

你把那个零件先~上来

似乎可以随时把脑袋摘下来, 再~上去

22. 搞: 做; 干; 办; 弄。

首先得把人们的劲头~上来

这样才好啊, 要大胆地把遗传学~上去

23. 砌: 用和好的灰泥把砖、石等一层层的垒起。

~上来一道墙

把这两块砖~上去

24. 造: 做; 制作。

这么简单的句子也~不上来

造预算的时候把出差费也~上去

1.4.3 Va₃ “处置”

“处置”是把事物或物体处理好。

25. 摆: 安放; 陈列。

冠家的酒饭~上来, 他就更佩服了冠先生

把果盘~上去

26. 冲: 冲洗; 冲击。

随着~上来的厚厚潮水的退回, 狼狈地出现在沙滩上。

木筏被~上岸去了

27. 写: 用笔在纸上或其他东西上做字。
 小题不属于写, 大题又~不上来, 只好等等看
 安德罗波夫没让速记员用打字机打, 而是自己亲笔~上去的
28. 坐: 把锅等放在炉火上。
 把锅~上来
 把水壶~上去

1.4.4 小 结

综上所述, 我们根据与A类动词 Va 相组合的“上来”、“上去”的意义对 Va 进行分类。因此我们可以相应地把“Va + 上来/上去 + NP”句式细分为三类:

- 1: Va 为 [+上移]:
 Va₁ + 上 + 来/上去 + NP
- 2: Va 为 [+制作]:
 Va₂ + 上来/上去 + NP
- 3: Va 为 [+处置]:
 Va₃ + 上来/上去 + NP

并且可以进入这三种句式中的 Va 的移动方向是双方向的, 即既可以“由近而远”也可以“由远而近”。

1.5 只能进入“V + 上来 + NP”句式的C类动词 (Vc)

一般来说, 只要具有移动语义特征的并且包含 [+趋近] 或 [+制作] 或 [+处置] 意义的动词都可以进入“V + 上来 + NP”句式。例如:

29. 捞: 从水或其他液体里取东西。
 下人们说, 是井里~上来的……
30. 冒: 向外透; 往上升。
 我的气一下子~上来了

31. 翻: 翻译。

那句话我~不上来

32. 学: 模仿。

这套动作我怎么也~不上来

以上例句中29和30是实质性的移动, 31和32则是虚化的移动。以上一些动词Vc只能带“上来”作补语, 而不可以带“上去”作补语。在《动词用法词典》中可以带趋向意义补语“上来”或“上去”的动词共有298个, 其中只能进入“V+上来+NP”句式, 不能进入“V+上去+NP”的C类动词Vc有72个。列举如下:

拔	外拉/抽出
一	吸出
背	背诵
编	创作(歌词)
一	捏造
变	表演(戏法)
补	补养
猜	
裁	剪断成部分
采	开采
盛	放东西
喘	
吹	(风等)流动
催	使变化加速
打	编织
一	舀取/买
逮	捉捕
带	附带/带动
倒	转移
点	指定
钓	
叠	
顶	下面拱起
读	上学

对	使东西配合
翻	反转
一	翻译
捡	拾取
讲	说
一	解释
叫	雇
砍	扔出去打
考	考试
抠	挖
拉	拉乐器
捞	由水中取出
练	练习
骂	斥责
冒	往外升
摸	用手探取
一	试着了解
念	读
捏	用手指夹
弄	做
漂	浮在液体上
起	弄出来
取	拿到身边
烧	加热

生	燃烧
收	取回
一	收获
算	计算数目
谈	说话或讨论
弹	敲打
淘	从深处舀出
提	带出犯人
挑	挑选
挖	掘
吸	吸收
想	回忆
学	模仿
压	逼近
要	希望得到
阴	云彩遮住
游	在水里行动
造	假编
招	使人来
着	燃烧
找	寻找
织	编织
抓	用手握
走	走路/步行

1.6 只能进入“V + 上去 + NP”句式的D类动词 (Vd)

一般来说,只要具有移动语义特征的并且包含 [+离远] 或 [+附着] 意义的动词都可以进入“V + 上去 + NP”句式。例如:

33. 绑: 用绳、带等缠绕或捆扎。

这根绳子也~上去

34. 补: 添上材料; 修理破损的东西; 修补。

把这块布~上去

35. 撒: 放开; 发出。

~上去一层盐

36. 踏: 踩。

张丽珍觉得是到了鬼门关, 只要~上去随时会掉到江水里

以上一些动词 Vd 只能够带“上去”作补语, 而不可以带“上来”作补语。

在《动词用法词典》中可以带趋向意义补语“上来”或者“上去”的动词共有 298 个, 其中只能进入“V + 上去 + NP”句式, 不能进入“V + 上来 + NP”句式的动词 Vd 有 84 个。现列举如下:

按	压 (不持续)
一	压 (持续)
绑	捆扎
包	裹东西
拨	使东西移动
补	添上 / 修理
擦	涂抹
踩	用脚踏
插	刺入、挤入
缠	缠绕
抄	抄袭
乘	计算法
穿	穿衣服
闯	闯练
搭	支 / 架
一	凑上 / 加上

打	撞击
一	建筑
一	涂抹
一	揭 / 凿开
戴	
挡	拦住
一	遮蔽
登	爬
点	加点
一	液体下落
垫	加厚
订	定计划
钉	固定
一	缝住
堵	
缝	

盖	打上 (印)
刮	涂抹
喊	大声叫
糊	粘
混	苟且的生活
记	记录
加	增加
浇	液体落
一	灌注模子内
看	视 (估计)
扣	盖
捆	
拦	阻拦
抹	涂抹
抹	把墙面弄平
拧	转

趴	
配	补足
碰	击撞
劈	纵面破开
拼	豁出去
泼	用力撒
染	
绕	缠绕
洒	
撒	散布
塞	填入
上	涂(上漆)

刷	
拴	
算	计算进去
锁	锁门
踏	睬
套	罩在外面
一	用套拴系
提	指出或举出
添	增加
填	填写
听	听声音
捅	揭露

涂	抹颜色
捂	遮盖住
写	写作
印	
用	使用
砸	打/捣
栽	种
照	拍摄
蒸	
种	种植

1.7 Vc 和 Vd 两类动词的区别

从“上来”和“上去”的基本趋向意义来看，“上来”的意义是：1、向上(由远而近)；2、出现、呈现；3、制作。而“上去”的意义则是：1、向上(由近而远)；2、附着。从这些意义上看，可以和它们相组合的动词在意义上应该是相容的。由此可见，只能与“上来”或“上去”相组合的动词应该具有 [+上移] 义。并且，它们的 [+移动] 只是单方向的，即与“上来”相组合的动词 Vc 只具有“由远而近、处置、制作”性的 [+移动] 义，而与“上去”相组合的动词 Vd 则具有“由近而远、附着”性的 [+移动] 义。例如：

37. 翻：上下或内外交换位置；歪倒；反转。

石队长肚中的煮白薯都要~上来，口中漾着酸水

38. 捡：拾取。

他从楼下~上来一件衣服

39. 点：再许多人或事物中指定。

京剧的剧目我可~不上来

40. 翻：翻译。

那句话我~不上来

41. 弄: 做; 搞。

麻烦你~两碗面条上来

42. 想: 回想; 回忆。

他都说了些什么, 我怎么都~不上来

以上六个例句中的动词都是只能和“上来”相组合的C类动词。例37和38是“由远而近的向上移动”义, 例39和40是“处置、呈现”义, 例41和42是“制作”义。

43. 按: 用手或指头压。

~上去电铃就响

44. 洒: 使 [水或其他东西] 分散地落下。

~上去一点花露水

45. 擦: 涂抹。

你把这点药水~上去

46. 盖: 打上 [印]。

用一颗图章形式, 似乎随意~上去, 真是别出心裁

以上四个例句中的动词都是只能和“上去”相组合的Vd类动词。例43和44是“由近而远的向上移动”义, 例45和46则是“附着”义。

1.8 Vc 和 Vd 两类动词的再分类

对Vc、Vd两类动词, 我们可以直接借用“上来”的趋向意义“由远而近地上移”、“处置”、“制作”义和“上去”的趋向意义“由近而远地上移”, “附着”义来分类。即把只能够带趋向补语“上来”的动词Vc分为三类: Vc₁ [+上移 (由近而远)]; Vc₂ [+处置]; Vc₃ [+制作], 把只能够带趋向补语“上去”的动词Vd也可以分为两类: Vd₁ [+上移 (由近而远)]; Vd₂ [+附着]。

1.8.1 Vc 的再分类

请先看 Vc [+上移 (由远而近)] 类动词及其例句:

47. 拔: 把固定或隐藏在其他物体里的东西往外拉、抽出。

~上来一根木桩

48. 喘: 急促呼吸。

一口气没~上来

49. 捏: 用拇指或别的手指夹。

~上来一小粒沙金

50. 起: 把收藏或嵌入的东西弄出来。

把窖里的白薯~上来

以上例句中的动词 Vc 都可以进入“V + 上来 + NP”句式, 其动词都包含有一个语义特征 [+上移]。我们可以把这种 Vc 中的动词分为一类, 记作 Vc₁, 由此我们可以把 Vc₁ 进入“V + 上来 + NP”所构成的句式写为“Vc₁ + 上来 + NP”。

请先看 Vc [+处置] 类动词及其例句:

51. 翻: 翻译。

那句话我~不上来

52. 点: 再许多人或事物中指定。

京剧的剧目我可~不上来

53. 挑: 挑选。

从知识青年办事处~上来两个人

54. 阴: 天空中云层多, 不见太阳。

天~上来, 阳光被云遮住

以上例句中的动词 Vc 都可以进入“V + 上来 + NP”句式, 其动词都包含有一个语义特征 [+处置]。我们可以把这种 Vc 中的动词分为一类, 记作 Vc₂, 由此我们可以把 Vc₂ 进入“V + 上来 + NP”所构成的句式写为“Vc₂ + 上来 + NP”。

请再看 Vc [+制作] 类动词及其例句:

55. 翻: 翻译。

那句话我~不上来

56. 生: 使柴、煤等燃烧。

炉子里的火~上来了

57. 学: 模仿。

这套动作我怎么也~不上来

58. 织: 编织。

我~不上来这种花样

以上例句中的动词 Vc 都可以进入“V + 上来 + NP”句式, 其动词共同包含的语义特征是 [+制作]。我们可以把这种 Vc 中的动词分为一类, 记作 Vc₃, 由此我们可以把“V + 上来 + NP”句式相应地改写为“Vc₃ + 上来 + NP”。

1.8.2 Vd 的再分类

请先看 Vd [+上移 (由近而远)] 类动词及其例句:

59. 踩: 脚底接触地面或物体。

兔子屎从房顶上滚下来, 落得到处都是, 圆滚滚的, ~上去就要摔跤

60. 打: 建造; 修筑。

先把南墙~上去

61. 趴: 胸腹朝下卧倒。

这个沙发床~上去挺软和的

62. 洒: 使 [水或其他东西] 分散地落下。

~上去一点花露水

以上例句中的动词 Vd 都可以进入“V + 上去 + NP”句式, 其动词都含有一个语义特征 [+上移 (由近而远)]。我们可以把这种 Vd 中的动词分为

一类，记作Vd₁，由此我们可以把Vd₁进入“V + 上去 + NP”所构成的句式写为“Vd₁ + 上去 + NP”。

现在看 Vd [+附着] 类动词及其例句：

63. 搭：支；架。

~上去一块木板

64. 戴：把东西放在头、面、胸、臂等处。

急得李梅亭说不出话，黑眼镜取下来又~上去

65. 钉：把钉子捶打进别的东西；用钉子、螺丝钉等把东西固定在一定的
位置把分散的东西组合起来。

难道为了钉个木条，~上去几颗钉子，还有必要去找人商量吗

66. 扣：器物口朝下放置或覆盖别的东西。

~上去一个盖子

以上例句中的动词 Vd 都可以进入“V + 上去 + NP”句式，其动词都含有一个语义特征 [+附着]。我们可以把这种 Vd 中的动词分为一类，记作 Vd₂。由此我们可以把 Vd₂ 进入“V + 上去 + NP”所构成的句式相应地改写为“Vd₂ + 上去 + NP”。

1.9 结

综上所述，对于 Vc、Vd 动词，我们根据与其相组合的趋向补语“上来”、“上去”的意义把它们分别进行再分类：Vc₁ [+上移（由远而近）]，Vc₂ [+处置]，Vc₃ [+制作]；Vd₁ [+上移（而近由远）]，Vd₂ [+附着]。并且也可以相应地把“V + 上来 + NP”句式和“V + 上去 + NP”句式根据动词小类细分为五类：

1: Vc₁ 为 [+上移（由远而近）]: Vc₁ + “上来” + NP

2: Vc₂ 为 [+处置]: Vc₂ + “上来” + NP

3: Vc₃ 为 [+制作]: Vc₃ + “上来” + NP

4: Vd₁ 为 [+上移（而近由远）]: Vd₁ + “上去” + NP

5: Vd₂为 [+附着]: Vd₂ + “上去” + NP

V_c类动词与V_d类动词的主要区别在于,前者只能进入“V + 上来 + NP”句式,后者只能进入“V + 上去 + NP”句式。造成这一区别的根本原因在于它们所包含的语义特征不同,V_c只可以是 [+上移 (由远而近)]、 [+处置]、 [+制作] 义的,V_d只可以是 [+上移 (而近由远)]、 [+附着] 义的。这说明可以进入“V + 上来 + NP”句式和“V + 上去 + NP”句式的动词的趋向只能是单向的,即或者是由远而近或者是由近而远。

注

(1) 动词用法词典

参考文献

- 《吕叔湘文集》 商务印书馆
 朱德熙 (1982) 《语法讲义》 商务印书馆
 陆俭明 (1993) 《陆俭明自选集》 河南教育出版社
 史有为 “下来”还是“进来”? 《汉语学习》1994-3
 蒋国辉 “来”、“去”析——兼论话语的第二主体平面 《求是学刊》1988-6
 《现代汉语词典》(修订本) 商务印书馆
 《倒序现代汉语词典》 商务印书馆
 《汉语同义词反义词对照词典》 汉语大词典出版社
 《动词用法词典》 上海辞书出版社
 《现代汉语动词大词典》 北京语言学院出版社
 『中日辞典』 小学館
 『中日大辞典』(增訂第二版) 愛知大学

韓国と北朝鮮における言語規範の比較

——「分かち書き」を中心に——

文 嬉 眞

はじめに

韓半島（以下、朝鮮半島とする）は、1945年に北と南に分断されて以来、約60年という歳月が経過している。この長い歳月にわたって南北は時間的・空間的な対立関係を続けているのだが、最近の動向を見ると、両域の敵対関係が表面的であれ、今までの緊張関係から徐々に平和的な方向へと転換しているように見える。それは、両域間の様々な分野での交流が行われ、その中で例えば、スポーツ大会等が開催されると両側の選手に対しての暖かい応援や拍手が贈られる姿をしばしば目にする点で、両域の和解ムードを窺い知ることができる。

そのみならず、韓国側でも国家機関や研究機関のレベルで「南北間統合」に関する方案が政治、経済、社会、文化、教育などの各分野から多くの報告書や研究論文という形で出されている⁽¹⁾。このような方案の中には韓国と北朝鮮が一民族一国家一体制として統合されるという基本前提のもとでシミュレーションされたものが多く見られる。そのような方案には両域の南北分断体制に伴う社会の変容から生まれた思考方式や生活様式などの異質問題に対する模索方法が多く取り扱われている。

その一方で、両域における言語の異質化問題に対する議論も学者や関

係者らによって行われているが、その議論の内容は概ね、現在南北両域で使われている言語の相違点を究明しているものが多く、その問題の窮極的な解決策までには至っていないような印象を受ける。そのことは、そもそも南北両域の言語は同一言語から出発していることもあり、今なお両国民の意思疎通の手段方法は韓国・朝鮮語でもってある程度は可能であるという基本認識があるためと推察される。そのために、南北両域における言語の異質化は努力すれば克服が可能であるという考え方が一般的となり、そのような視点からそれを問題視するほどの重要性が他に比べて低く捉えられている傾向を見せている。

その場合、拙稿⁽²⁾にも取り挙げた2003年9月16日付の『朝鮮日報』の記事が再び重要性を帯びてくる。それは、「南北の言語の疎通、日増しに困難になる」という見出しの記事である。その記事を簡単にまとめれば、「北朝鮮の教科書を翻訳と合わせて読まないで、非常に解かり難いことになっている」という内容である。また、同新聞には「南北語文交流委員会が4ヶ月間調査した結果、北朝鮮の初・中・高等学校の教科書の内容中、相当な部分を翻訳しなければ理解できないほど北朝鮮と韓国との間には言語の違いが顕著にあらわれている」と記されている。すなわち、同一言語を使用していた韓国と北朝鮮が「60年」という分断体制を経過すると、南北両方に言語の異質化がますます進んでいるという、現在進行形の言語変化の状況が浮き彫りにされている。そして、更なる歳月の経過を伴えば伴うほどますますその異質化が進み、今以上の深刻な問題が浮上することは間違いないと予想されるのである。

上述のような「南北分断」体制下における言語の異質化という問題の意識から出発し、本稿は、その異質化には空間的・時間的な断絶だけでなく、両域がもつ言語に対する見方、すなわち言語観の相違によって形成された言語規範が、言語の異質化に影響を与える点に注目し、それを解明しようとするものである。両域における言語の異質化問題、特に言

語規範の相違に関しては、綴字法・分かち書き・発音法・文章符号などの側面から比較・検証が行われなければならない。だが、本稿では韓国・北朝鮮の言語規範の体制および「分かち書き」について比較分析することにとどめ、その他の側面については、別稿に譲る。その際、この分析によって両域言語間の相互理解を深めると同時に、その異質化問題の解決策を見出すことをも、そのねらいの一つとしている。

1. 言語規範の歴史の変遷

歴史上で見れば、ハングル表記に関する最初の言語規範は1446年公布された「訓民正音(훈민정음)」にあらわれている音節表記法である。それは以下のようにになっている。

終聲復用聲 ○連書書唇音之下 則爲唇輕音 初聲合用則並書
終聲同 ·一ㄱㅌㅍㅈ 附書初聲之下 丨ト丨ヨト 附書於右
凡字必合而成音 左加一點則去聲 二則上聲 無則平聲 入聲
加點同而促急……

(終聲は初聲をまた使用する。○を唇音の下に書くと唇輕音になる。初聲と一緒に書くときは並べて書く。終聲も同じことである。·一ㄱㅌㅍㅈは初聲の下に書き、丨ト丨ヨトは右に書く。文字は必ず合成してから音になる。右に一点を加えると去声で、二点を加えると上声で、点がなければ平声で、入声は点を加えるところは同じだが音が速い。)

然ㄱㅇㅈㅌㅍㅈㅊㅅㅈ八時可足用也

(しかし、八文字のㄱㅇㅈㅌㅍㅈㅊㅅㅈで十分に足りる)

以上がハングルの音節を書く方法に関する最初の規範であるが、創制された当時のハングル表記法は非常に厳格であった。だが、朝鮮王朝社会では歴史的に長い間、吏読による漢字語に慣れていた朝鮮王朝の官吏や支配階層にとって見れば、その漢字語を全面的にハングルに代えて使うほどの理由や必要性を有しなかった。そのため、ハングルは漢字語の陰に存在していた文字であったのである。その一方で、王宮内では、国王を始めとして主に女性たちの間でハングルが便利な意志伝達的手段として使われていたこともある。19世紀末に至るまで支配階層のハングルに対する無関心によりハングル表記法に関しては混乱した状況が続いた。しかし、20世紀初め、朝鮮は開国とともに開化の波が押し寄せてくることによってハングルに対する国民の再認識が始まった。

先ず、その第一歩として1905年に池錫永(지석영 1855～1935)が国文実施に関する上訴文である「新訂國文」を提出した。その内容は、①国文(ハングル)を広め、これを使用すること、②子音は撫と○をなくし14字にすること、③母音は「,」をなくし、丨と一を合わせて二という新しい字を作ること、④濃音はㅍ、ㅑ、ㅓ、ㅕとして表記すること、である。しかし、彼の提案は、反対され施行されなかった。

そして、歴史上初めて綴字法という名前で発表されたのは、1912年朝鮮総督府が採択した普通学校の教科書のために定めた基本原則である。

- ①京城語(경성어)を標準とすること
- ②表記法は表音主義に因るが、発音と関係が遠い歴史的綴字法などは避けること
- ③漢字音で成り立っている言葉を諺文で表記する場合には、従来の綴字法を採用すること

以上のような朝鮮総督府の綴字法は、朝鮮半島で発表された最初のハ

ングル綴字法ではあるが、朝鮮人が主体的に関わって積極的に作ったものでないため、その内容が充分ではなかった。

その後、現在の綴字法の根幹となる朝鮮語学会による「ハングル綴字法統一案」が1933年10月29日に制定・公布された。この「ハングル綴字法統一案」は、朝鮮語の書き言葉の規範化の土台を完成したということになる。つまり「ハングル綴字法統一案」により、朝鮮語は言語の規範化が可能となり、それを通じた全国的な意思疎通がより自由かつ便利になるきっかけを掴んだのである⁽³⁾。1933年の「ハングル綴字法統一案」は総論3項目、各論7章65項目によって構成されている。その構成は、以下のようになっている。

総論

- 一、ハングル綴字法は、標準語音を表記するが、それを語法と一致するようにすることが原則である。
- 二、標準語は現在の中流社会で使われているソウルの言葉とする。
- 三、文章の各単語は分かち書きをするが、助詞はその語の後につけて書く。

各論

- 第1章 子母音
- 第2章 声音に関すること
- 第3章 文法に関すること
- 第4章 漢字語
- 第5章 略語
- 第6章 外来語の表記
- 第7章 分かち書き

付録

1. 標準語

2. 文章符号

以上が1933年の「ハングル綴字法統一案」の構成であるが、現在の韓国・北朝鮮の綴字法の基本原則とさほど変わらない。つまり、南北両域とも言語規範の出発点は同じであるということである。その後、朝鮮語学会では1936年「査定した朝鮮標準語集」、1941年「外来語表記法統一案」⁽⁴⁾をを発表して言語規範の統一事業が一段落することになる。

だが、韓国および北朝鮮は1945年「民族解放」と1948年実質的な「南北分断」以降、それぞれの言語規範による言語政策が展開されることによって言語の異質化を招くことになる。

2. 現在の言語規範の比較

韓国では1933年の「ハングル綴字法統一案」をそのまま使用してきたが、1946年改正した「ハングル綴字法統一案」が確定された後、何度かにわたる改正作業後、1988年に政府レベルでの綴字法が確立された。正にこれが1988年1月14日文教部（現教育部）によって公布された「ハングル綴字法」である。すなわち、韓国では「ハングル綴字法統一案」以降、実質的に一回の綴字法の改正が行われたということである。

その反面、北朝鮮では、1933年の「ハングル綴字法統一案」以降、4回にわたって綴字法の改正が行なわれた。それを簡単に列挙すると、以下の通りである。

1948年1月「朝鮮語新綴字法」、朝鮮語文研究会

1954年9月「朝鮮語綴字法」、科学院朝鮮語および朝鮮文学研究所

1966年6月「朝鮮語規範集」、国語査定委員会

1987年5月「朝鮮語規範集」(修正版)、国史査定委員会

「ハングル綴字法統一案」と「朝鮮語新綴字法」の相違点に関する詳細は拙稿⁽⁵⁾に触れておいたので、ここでそれについての説明は省くことにする。以下では韓国の1988年「ハングル綴字法」と北朝鮮の1987年「朝鮮語規範集」の綴字法条項を比較することにする。両側の綴字法の目次は概ね以下のようになっている。

〈1988年「ハングル綴字法」〉

- 第1章 総則
- 第2章 子母
- 第3章 音声に関すること
- 第4章 形態に関すること
- 第5章 分かち書き
- 第6章 その他のこと
- 付 録 文章符号

〈1987年「朝鮮語規範集」〉

- 総則
- 第1章 朝鮮の子母の順番およびその名称
- 第2章 形態素の書き方
- 第3章 語幹と語尾の書き方
- 第4章 合成語の書き方
- 第5章 接頭語および語根の書き方
- 第6章 語根および接尾語の書き方
- 第7章 漢字語の書き方⁽⁶⁾

以上が「ハングル綴字法」と「朝鮮語規範集」の綴字法に関する体制である。上述した両側の規定の中で、「ハングル綴字法」には分かち書きと付録に文章符号が含まれているが、「朝鮮語規範集」にはそれが規定されていない点は注目に値する。つまり、韓国では「音に関すること」と「形態に関すること」が体系化されているが、北朝鮮では「形態の構成」を中心にして記述されている。1987年「朝鮮語規範集」の付録に分かち書きが第5章にわたって掲載されている。そして、最近発表された分かち書きについては2000年2月『朝鮮語文』(国語査定委員会)の「朝鮮語分かち書き規範集」がある。

3. 韓国と北朝鮮の「分かち書き」の比較

3-1. 「分かち書き」規範の変遷

朝鮮語において分かち書きが始まったのは1897年4月7日「独立新聞」創刊号からである。

모도 언문 으로 쓰기는 남녀 상하귀천이모도 보게 흠이요 쓰 귀절을 쟈여 쓰기는 알아 보기 쉽도록 흠이라……국문을 알아보기가 어려운건 다름이 아니라 **첫**지는 말마디을 쟈이지 아니하고 그저 줄줄너려 쓰는 까닭에 글씨가 어휘 부터는지 아리 부터는지 몰나서 몇번 일거 본후에 야 글씨가 어디부터는지 비로소 알고 일그니 국문으로 쓴편지 혼장을 보자하면 한문으로 쓴것보다 더되 보고 쓰 그나마 국문을 자조아니 쓴⁽⁷⁾고로 셔틀어서 잘못봄이라

上記の귀절とは現代の어절(語節)と同じことであり、一つの単語の単位で分かち書きをしているが、助詞は前の単語に付けて書いてある。

このことは現代の分かち書きの基本原則と一致する。ところが、冠形詞は後の単語につけて書くことが普通であったようである。

現在の韓国・北朝鮮の言語規範の基本となった1933年の「ハングル綴字法統一案」では分かち書きについて第7章の5項目に分類し簡単に言及されている。その概ねの内容は、以下のようになっている。

①単語は各々分かち書きをするが、語尾は前の単語と分かち書きしない。

집으로만, 아버지는／했으니, 노래한다／찍은, 놀이야

②補助的な意味をもった用言はその右の用言と分かち書きしない。

걸어가다, 열어보다, 먹어버리다, 보아오다

③次のような言葉はその前の単語と分かち書きしない。

i 할수가, 갈바를, 될터이다, 없는줄은, 가는이

ii 하는대로, 될성싶은, 될듯한, 하는체

④名数詞はその前の単語と分かち書きしない。

한개, 두자루, 한채, 두사람

⑤数をハングルで書く場合には十進法によって分かち書きをする。

이만 오천 칠백 사십 삼

現在、韓国の1988年「ハングル綴字法」は第5章で5節10項目に分類(8)されている。

北朝鮮の場合、1954年「朝鮮語綴字法」の規定によれば、総則として「単語は各々分かち書きをするが、助詞および語尾は前の単語に付けて書く。」とある。これは、基本的に「ハングル綴字法統一案」や韓国の「ハングル綴字法」と同様の内容となっている。だが、その中では幾つかの例外が述べられている。その例外の内容は、以下の通りである。

①分かち書きをする場合

- ・直接、語根または語根の次の語尾〈아, 어, 여〉があり、続いて〈하다〉がある場合：좋아하다, 공부하다, 반듯하다
- ・語根に直接〈되다〉、〈시키다〉がある場合：학습시키다, 공부되다
- ・語根に〈지다〉がある場合：전방지다, 옹어지다
- ・漢字語の単語で次のような接頭詞または接詞・語尾として認められる場合：과학원, 중공업, 전산원
- ・次のようなものは分かち書きしない：금강산, 함경도

②分かち書きをしない場合

- ・幾つかの単語で成り立っている固有名詞：조선 민주주의 인민 공화국
- ・人の名字と名前：리 순신, 을지 문덕
- ・年月日は年、月、日を各単位として分かち書きをする：2004년 9월 10일

北朝鮮では1954年「朝鮮語綴字法」の規定以降、1966年の「朝鮮語規範集」を採択しており、分かち書きについての基本的な考え方は変わっていないのだが、「特殊な語彙部類は分かち書きをしない」とする分かち書き廃止を強化している。そのため、分かち書きをしないで付けて書くものが顕著にあらわれる。このような「朝鮮語規範集」の制定および一部分の分かち書きの廃止には金日成の個人的な判断が基準として大きく作用している。1966年5月14日に北朝鮮の言語学者との談話で金日成は以下のように教示したことがある。⁽⁹⁾

우리는 앞으로 띄어쓰기를 잘 고쳐 사람들의 독서력을 올릴수 있도록 하여야 하겠습니다. 내가 그전에도 몇번 이야기하였지만 띄여쓰기에

서는 글자들을 좀붙이는 방향으로 나가야 합니다. 가령 〈사회주의건설〉이라고 쓸때에 〈사회주의건설〉이라고 붙여 써야지 〈사회주의건설〉⁽¹⁰⁾이라고 띄여쓰면 독서능률이 오르지 않습니다.

すなわち、金日成は読書の能率を高めるために、分かち書きを減らす方向が好ましいと述べている。例えば、従来通りだと〈사회주의 건설(社会主義 建設)〉と分かち書きをするが、読書能率のためには〈사회주의건설(社会主義建設)〉と書いた方がよいということである。その教示により1966年「朝鮮語規範集」には分かち書きをしない規定が非常に多く出てきている。ところが、1987年「朝鮮語規範集」の「分かち書き」の規範は5章23項目に大幅に減少した。だが、その規範には細分化された規定が追加され、75項目へと膨れ上がった。

つまり、1966年の分かち書きの規範で非常に多くの単語に分かち書きの中止を行なったために、逆に1987年の規範には分かち書きをするものを増やし、2000年「朝鮮語規範集」の分かち書きの規範では、総則および9項目に改定した。分かち書きをしないものが大幅に減ったということである。

3-2. 現行の「分かち書き」の比較

現在、両域で使用されている分かち書きの規範を比較する際、それを理解しやすくするために最近の規定、つまり韓国の1988年「ハングル綴字法」、北朝鮮の2000年「朝鮮語分かち書き規範」⁽¹¹⁾を取り上げて検討してみることとする。

最初に、南北の分かち書きの基本原則を比較すると次のようになる。

[韓 国] 総則第2項：文章の各単語は分かち書きをすることが原則である。

[北朝鮮] 第1項：単語は一つの単位として分かち書きをすることが原則で、特殊な語彙部類は付けて書く。

南北両域の分かち書きの基本単位は「単語」である。しかし、北朝鮮の場合は「特殊な語彙部類は付けて書く」という例外規定を設けて、基本原則を定めている。この原則のために韓国は、「単語」を判断することが分かち書きの大前提になるが、北朝鮮は「特殊な言語部類」に該当する項目を詳細に覚えなければならないという点で、それを学ぶ人々にとって負担を掛ける形になる。

[韓国] 第41項：助詞はその前の言葉に付けて書く。

[北朝鮮] 第1項：토 (助詞および語尾) は前の単語に付けて書き、次の単語とは分かち書きをする。

助詞は、一般的に文法上では一つの「単語」として分類されている。従って、分かち書きの基本原則である「各単語は全て分かち書きをする」という規定からすると、本来ならば助詞も分かち書きをしなければならない。しかし、前に挙げた「独立新聞」以降、今日まで助詞を前の単語に付けて書いてきたし、今後もそれは変わらないと考えられる。つまり、助詞を前の単語に付けて書くことは例外ではなく、基本原則の中に含まれると認識した方がよい。すなわち、韓国の分かち書きの基本原則は、「全ての単語は分かち書きをするが、ただし助詞はその前の言葉に付けて書く」と解釈できる。北朝鮮の토は助詞と語尾を含む用語である。北朝鮮では助詞や語尾を単語としてみなさないために、上記のような規定は不要であると思われる。この規定は韓国と異なる点である。1987年の「朝鮮語規範集」にはこのような項目がなく、今回初めて規定されたものである。

[韓 国] 第42項：依存名詞は分かち書きをする。

아는 것이 힘이다. / 나도 할 수 있다. 먹을 만큼 먹어라.

第43項：単位をあらわす名詞は分かち書きをする。

한 개, 한 마리, 한 자루, 한 채

ただし、順番を表す場合や数字と一緒に使われる場合に付けて書くことができる。

第45項：二つの単語をつなげる役割の単語や列挙をあらわす意味の単語は分かち書きをする。

국장 겸 과장, 청군 대 백군, 이사장 및 이사들

[北朝鮮] 第4項：不完全名詞は前の単語に토（助詞および語尾）があっても付けて書き、その後の単語は分かち書きをする。

아는 것이 힘이다. 고기는 물을 떠나서는 살 수 없다.

不完全名詞《등, 대, 겸》は前単語とは分かち書きをし、略語間にある場合は付けて書く。

사과, 배, 복숭아 등 과일이 많다.

서재 겸 응접실로 쓰는 방

上述した韓国の分かち書き42、43、45項は、厳密に言えば不要な条項であると思われる。なぜならば、依存名詞、単位名詞、単語をつなげる役割の겸, 대, 및などは、既に一つの単語として存在するので、別の条項を設けて説明しなくても単語別に分かち書きを行なうからである。そして、依存名詞は自立性が弱いため、前の単語とともに一つの単位のように認識される傾向があるため、分かち書きを行なう上で、注意を喚起させる目的もあると思われる。

この反面、北朝鮮では不完全名詞（依存名詞）は分かち書きをせずにそのまま書く。しかしながら、등, 대, 겸は北朝鮮でも韓国と同じよう

に、前の単語と分かち書きをすることを原則としている。つまり、北朝鮮では不完全名詞の分かち書き方法に2種類が存在するという一方で、その表記方法を区別する必要があるということである。

[韓国] 第44項：数詞を書くときは만(萬)単位で分かち書きをする。

십삼억 사천이백오십칠만 칠천구백삼십팔

13억 4257만 7938

[北朝鮮] 第7項：①正数は백, 천, 만, 억, 조などを一つの単位として分かち書きをし、1から99までの数字は一つの固まりと考え付けて書く。

팔백 사십이 (842), 구천 오백 삼십 (9530), 마흔 여덟 (48)

②수, 여, 몇, 여러などが数詞や名詞に続いて量的な意味を表すときには分かち書きをしない。

수백명, 수십여개, 몇천명, 여러사람

1933年の「ハングル綴字法統一案」では、基本的に十進法によって分かち書きをすると規定されている。これを韓国では「万単位」で分かち書きをすることと改定した。また、その総則で「文章の各単語は分かち書きをすることが原則である」と規定したところからみると、これは例外的な規定である。しかし、数字が大きくなった場合、十進法による分かち書きの方法では長く書かれた数字をすぐに把握するのに時間が掛かるので、便宜上このような規範の改定を行うことは妥当であり、規範の改定に融通性を持たせる必要がある。

北朝鮮の場合、1933年の「ハングル綴字法統一案」の原則にしたがっているが、99までの数字を一つの固まりと考えて百未満の数字だけは分かち書きしないと規定されている。両側の原則について詳しくみる

と、以下のようにになっている。

[韓 国] 第48項 : 姓と名前、姓と号などは分かち書きせず、これに
付け加える呼称語、官職名は分かち書きをする。

이명희, 서화담, 채영신 씨, 이지현 선생,
충무공 이순신 장군

ただし、姓と名前、姓と号を明確に区別する必要がある
場合には分かち書きをすることがある。

第49項 : 姓名以外の固有名詞は単語別に分かち書きをする
ことが原則だが、単位別に分かち書きをすることが
ある。

대한중학교 / 대한 중학교,
한국 대학교 사범 대학 / 한국대학교 사범대학

第50項 : 専門用語は単語別に分かち書きをすることを原則
とするが、分かち書きをしないこともある。

만성 골수성 백혈병 / 만성골수성백혈병,
중거리 탄도 유도탄 / 중거리탄도유도탄

[北朝鮮] 第5項 : 国家名と政党、社会团体、機関、企業の名前、職
制名、大衆運動、事変、会議名などは分かち書き
をしない。

조선로동당, 조선인민민주주의공화국,
김일성사회주의청년동맹

第6項 : 姓名、職名の後に付く呼び名、呼称は分かち書き
をしない。

심인철선생, 리옥금아주머니, 이선생

第8項 : 学術用語は助詞や語尾があっても分かち書きをし
ない。

미리답히기, 지내바숨, 내리켜기, 깊이심기, 함께살이
동물

韓国では、固有名詞や専門用語の場合でも分かち書きの基本原則を守ることが一般的であるが、上記のように名詞の特殊性を考慮して分かち書きをしなくてもいい場合がある。ところが、人名の場合は例外的に分かち書きをしないことを原則とする。その反面、北朝鮮では固有名詞や専門用語は全て分かち書きをしないことが原則である。上記した項目以外にも分かち書きをしないことを認める規定がある。だが、それはあくまでも例外規定であって、原則は以下で見られるように分かち書きをする。

[韓 国] 第46項：単音節に構成されている単語に続けて付く場合には分かち書きをしなくてよい。

그때 그곳, 좀더 큰것, 이말저말, 한잎 두잎

第47項：補助用言は分かち書きを基本原則とするが、場合によって分かち書きをしなくてもよい。

불이 꺼져 간다／꺼져간다

어머니를 도와 드리다／도와드리다

일이 될 법하다／일이 될법하다

上記のような韓国の規範とは異なって、北朝鮮では分かち書きを認める規定は全くない。

[北朝鮮] 第3項：二つ以上の単語が結合して一つの意味を表す言葉は品詞が違ってても助詞や語尾があっても分かち書きをしない。

강성대국, 천리마대고조, 조직사상생활규범

第9項：①時間、空間の意味を抽象的にあらわしながら格の意味を助ける後置詞的名詞、앞, 뒤, 위, 아래, 밑, 곁, 옆, 끝, 안, 밖, 속, 사이, 가운데, 어간, 때などは助詞や語尾が付いてない名詞、代名詞、数詞に付けて書く。

인민들속으로 들어 간다

조국과 인민앞에 맹세한다

해, 달, 날, 곳, 년, 놈, 자もこれに準ずる。

③前の名詞、代名詞を再び意味する 자신, 자체は前の単位に付けて書く。전체, 전부, 전원, 일행, 일가, 일동, 모두, 스스로もこれに準ずる。

지구자체가 돈다, 로동자전체가 일떠섰다,

려행자일행은 휴식도 없이 걸어 갔다

北朝鮮では2000年2月に分かち書きに関する規範集を出して、従来の複雑で細分化された分かち書きの規定を緩和している。しかしながら、北朝鮮は未だに分かち書きの規範に例外を多く設定していることは事実である。従って、それを学ぼうとする人々にとってその規範を習得するには時間を要すると思われる。

おわりに

以上のように、韓国と北朝鮮の60年という時間的・空間的・地域的な分断状況によって生まれる言語の異質化問題、すなわち南北両域がもつ言語観の相違によって形成された言語規範が、同一言語の異質化に影響

を与えている点に注目し、それを解明しようと試みた。特に、本稿では南北両域の言語規範における歴史的変遷および「分かち書き」の規範について比較分析した。

現在、韓国と北朝鮮が使用している現行の言語規範の土台が完成するのは、1933年の「ハングル綴字法統一案」である。その後、南北両域ともに何度かにわたる言語規範の改定を繰り返し、韓国は1988年「ハングル綴字法」、北朝鮮は1987年「朝鮮語規範集」を規定するに至っている。そして、この両側の言語規範における「分かち書き」について詳しく比較分析を行なった。この分析の結果、北朝鮮の場合は金日成の教示が言語政策だけでなく言語規範の変化にも大きな影響及ぼしていることが明らかになった。そして、北朝鮮では2000年2月に複雑で細分化された分かち書きを以前よりは簡単なものに改定した。しかし、北朝鮮は分かち書きの規範に例外を多く設けているがために、韓国の分かち書きの規定と比較して見ると、「分かち書きを行なわない」規定が非常に多く存在することを明らかにしている。つまり、同一言語の時間的、空間的、地理的分断という諸要素によって、両地域の人々にとっては相互の言語についてますます読み・書きし難い方向へと進んでいるのは、確かである。

注

- (1) 고려대학교이중언어학회, 「남북한 언어의 통일문제 토론」, 『이중언어학회지』 7, 고려대학교이중언어학회, 1990
- (2) 拙稿, 「分断国家における言語の異質化」, 愛知学院大学, 『語研紀要』第29巻第1号, (2004年), 169~186ページ参照
- (3) 高榮珍, 「韓国語の辞書編纂と書き言葉の規範化」, 慶應義塾大学, 『言語・文化・コミュニケーション』 19, (1997年)
- (4) 조오현, 김용경, 박동근, 『남북한언어의이해』, 도서출판역락, 2002
- (5) 拙稿, 174ページ
- (6) 조오현, 김용경, 박동근, 前掲書92ページ

- (7) 1897年4月7日付けの「独立新聞」の論説に掲載された。
- (8) 기주연, 『한글맞춤법안내』, 박이정, 2001년, 99~115페이지
- (9) 北朝鮮では金日成がいうことを「教示」といい、金正日がいうことを「指摘」と言う。
- (10) 『第2次金日成教示』、1966年5月14日
- (11) 조오현, 김용경, 박동근, 前掲書306~312페이지

参考文献

- 고려대학교이중언어학회, 「남북한 언어의 통일문제 토론」, 『이중언어학회지』 7, 고려대학교이중언어학회, 1990
- 기주연, 『한글맞춤법안내』, 박이정, 2001년
- 이은정, 『한글 맞춤법 표준어 해설』, 대제각, 1988
- 윤종혁, 김정래, 김창환, 한만길, 『南北韓實質的統合段階의 教育統合方案研究』(人文社会研究会合同研究叢書2002-11)、統一研究院、2002年
- 남성우, 정재영, 『북한의 언어생활』, 고려원, 1990
- 조오현, 김용경, 박동근, 『남북한언어의이해』, 도서출판역락, 2002
- 高榮珍, 「韓国語の辞書編纂と書き言葉の規範化」, 『言語・文化・コミュニケーション』 19, 慶應義塾大学, 1997年
- 文嬉眞, 「分断国家における言語の異質化」, 『語研紀要』 第29卷第1号、愛知学院大学, 2004年

A memoir of two pioneers: Leon Pettitt and Margarett Gale

Daniel DUNKLEY

This brief article celebrates the life and work of the first two full-time native-speaker teachers of English in the General Studies Department of AGU. They were my colleagues when I first joined the staff in September 1990, and along with Janet Bland (who worked here from 1990 to 2000) and me formed a team of four during my first few years here, until Margarett's untimely death in 1994.

On a personal level both Leon and Margarett left a strong impression. I remember Leon as a calm, avuncular person with a reserved but friendly manner. He always seemed to be dressed in a tweed jacket and to carry the minimum of baggage. He never gave the impression of being in a hurry, and was always ready to stop and exchange a few words on current events. He had been around AGU so long that he knew all the Japanese staff. His command of Japanese was very impressive and effortless, and he would always help me out if I was short of an idiom.

Margarett Gale, like Leon, was a genial and friendly person. On the other hand she was more of an energetic academic, who always seemed to be working on a research project or writing a text book. Like Leon, she had a long acquaintance with AGU and its staff, and socialized equally with her English-

speaking and Japanese colleagues. She was an enthusiastic teacher and was always trying out new ideas : my enduring image is of her making her way towards her classroom with some difficulty, so encumbered was she by bags and an armful of copied material or English newspapers for students to work on.

How did these two contrasting teachers come to be at AGU? To answer that question I got in contact with both Leon and with Margarete's widower Ronald, and thanks to their cooperation the following historical sketch has been made possible. Quotations from their communications are marked LP for Leon Pettitt and RG for Ronald Gale.

The two pioneers' association with AGU was considerably longer than their period of full-time employment as lecturers in the General Studies Department. Leon Pettitt was officially a full-time teacher of English in the General Studies department for a period of nine years from 1988 until his retirement in 1997. However his association with the university goes back nearly a further twenty years. Similarly, Margarete Gale's appointment lasted from 1984 to 1994, but she had professional contacts with AGU students and staff for at least four years before her appointment in Nagoya.

Leon Pettitt

Leon had arrived in Japan from his native England as a young man in his twenties in 1951, when the cities consisted of little more than makeshift buildings punctuated by construction sites, populated by a nation only just emerging from a daily struggle for survival. On the other hand, the standard of living was on the rise: the Korean war of 1950–53 kept Japanese factories busy supplying goods to the American and Korean armies. As a result “by the end of 1951 Japanese industrial production was roughly what it had been 20 years previously.” (Storry

1982,254)

In those days, Leon recalls, “all university students wore their school uniforms and the most popular form of footwear was the *geta*.” (LP) Fortunately following the end of the American occupation in 1952 he witnessed the “economic miracle” of the 50s and 60s.

Having come to Tokyo as a missionary his most urgent need was to learn Japanese. One way he did this was to exchange lessons with an English professor from Waseda University. Another method was less academic: visiting the public baths: “I used to go to the *sentō* every night to soak in the very hot water and practice my Japanese.” (LP) Thanks to a combination of talent for the language and high level of motivation, he made rapid progress, and before long he was assigned the job of teaching newly arrived missionaries. He married one of his students, Daphne, and they traveled extensively in Japan, a project which was made easy by their not starting a family for ten years.

It was the arrival of two sons in the late sixties and the consequent need for an increased income which led Leon to move out of Tokyo in search of teaching work. The family settled in Nagoya. Coincidentally one of his neighbors was a teacher at the AGU Dental School near Motoyama, and this contact led to the founding of a writing class for teachers at the Dental School who needed to write academic papers in English.

Fortunately for Leon, the Dean of the Dental School, the late Jiro Hasegawa, firmly supported the inclusion of English abstracts and whole English articles in the school’s Dental Science magazine, and set up a foreign language editorial committee to supervise this activity. Leon was the obvious choice for an English language consultant for this project, and was officially employed from 1985. He became interested in dentistry, and built up an unusual expertise in the science itself, as well as the vocabulary, both English and Japanese.

It was not surprising that when the General Studies department was looking

for a second native speaker teacher to join Margarete Gale- who had been at AGU since 1984- Leon's name came up. He had excellent Japanese, a good relationship with AGU and extensive teaching experience. Although he found the large classes a challenge, he persevered, using his good Japanese to explain the main points he was making.

In 1990 Leon decided to accept an offer of a one-year teaching contract at the Institute of International Studies in Monterey California, teaching Japanese translation studies. He and Daphne would have been happy to stay on in the U.S., where both their sons were attending university, had a suitable post been on offer. However, they finally decided it would be better to continue at AGU, and fortunately his health allowed him to work until reaching retirement age in 1997.

The Pettitts have now returned to their native England and live quietly in Leicester, although Leon is in considerable demand as a lecturer. "I receive many invitations to do presentations on Japan, the Japanese people, their culture and language." (LP) There cannot be many lecturers with a longer direct experience of their subject.

Margarete Gale

Margarete's contact with Japanese came about in a completely different way from Leon's. When Margarete was a child her family lived for a time in Tokyo. "Margarete attended an international school and acted as interpreter for her mother who stuck firmly to English." (RG) In this way Margarete became used to Japanese customs and achieved proficiency in Japanese.

Later, Margarete studied education at Texas University and finally returned to teach in Tokyo. Happily she met Ronald Gale in 1978 in London and they married, making their home in Edinburgh. Margarete became a lecturer in

English at Edinburgh University, while Ronald was a lecturer in Economics at Dundee College of Technology a few miles away.

At this point AGU enters the story. In 1979 Professor Koide, the Principal of AGU visited Edinburgh university with a party of no less than 200 students and staff to take a Summer English course, and to pay an official visit to the university. Naturally someone with Japanese language ability and experience of living and teaching in Japan was needed. After one year as adviser in which the course “was all a wonderful success” (RG) she became Course Director, a position she continued to hold even after moving to Japan.

The summer periods were busy and rewarding, but Margarete and Ronald grew dissatisfied with life in Edinburgh, even though it is a beautiful city. The winter weather was harsh, and the conditions of Margarete’s teaching contract at Edinburgh University were far from ideal. The Gales decided to set up a home in Canterbury, a pleasant historic city not far from London.

However, Margarete and Ronald had not finished with Japan. They decided to try living in Japan again, and after some enquiries in Tokyo, Professor Akaike of AGU introduced Margarete to the General Studies department and she was offered a full-time position here, in 1984.

Margarete’s teaching method was very much in touch with the communicative school of thought. She used English as much as possible in the classroom, encouraged her students to speak as much as possible (in the days when the courses were only entitled “reading” and “writing”), and did not confine herself to the teacher’s podium. “She was constantly moving around the classroom speaking to individual students, encouraging and assisting them”. (RG) In addition, she was a vigorous producer of teaching material and made texts “with jokes, pictures and cartoons”(RG). She had a passion for English literature, as is shown by her text book “A Kaleidoscope of English Life and Literature” (1989). In the introduction she states “The aim of this book is to

provide a starting place for teachers to walk on the familiar ground of literature, while at the same time branching off onto paths of current foreign language teaching techniques” (Gale and Nomura 1989, iii). Her other book was a detective story “The Mystery Club” (1991).

Not satisfied with teaching and materials production alone, she was also engaged on a Ph.D. course in Linguistics at London University. In addition, when the English curriculum was reformed in 1992, she produced many ideas for attractive and relevant courses. Faced with these signs of innovative energy, it was therefore distressing for all her colleagues to see her fighting illness in 1993 and 1994. The department of English held many meetings to discuss how best to cover for the classes she had to miss, and to ensure that her income would not be affected.

The last time I met her was at a farewell lunch at a nearby Chinese restaurant in Nagakute in July 1994. She reported that she had thyroid problems, but she looked very weak, and it was not a great surprise when we were informed that she passed away with her husband by her side just three months later, on 4th October 1994.

Thanks to these two pioneers, and the good impression they made on their Japanese colleagues and superiors, the General Studies Department has continued to employ native speakers. In fact the number of teachers has grown steadily, from two in 1988 to four in 1990, then to seven by 2000. Indeed this has occurred without any increase in student numbers. Moreover, the number of elective classes (some of them the brainchildren of our two pioneers) mainly in conversation but also Media English, TOEIC preparation and seminars assigned to native speakers has increased. Present and future native speaker staff are indebted to these two pioneers and to the lifelong effort they made to understand the culture in which they were living.

Bibliography

- Storry, R. 1982 *A Short History of Modern Japan* Harmondsworth: Penguin
- Gale, M., and Nomura 1989 *A Kaleidoscope of English life and Literature* Tokyo: Kenkyusha
- Gale, M., and Nomura 1991 *The Mystery Club* Tokyo: Kenkyuusha
- Pettitt, Leon: personal communication: email July 3rd 2003
- Gale, Ronald: personal communication: email March 16th 2003

愛知学院大学語学研究所規程

(名称・所属)

第1条 本研究所は愛知学院大学語学研究所（以下「本研究所」という）と称し、愛知学院大学教養部に設置する。

(目的)

第2条 本研究所は建学の精神に則り、外国語の総合的研究につとめ、外国語教育の向上を目的とする。

(事業)

第3条 本研究所は下記の事業を行う。

- (1) 外国語及び外国語教育に関する組織的研究
- (2) 外国語教育活動の調査と分析
- (3) 研究成果の発表及び調査・分析の報告のための研究所報の刊行
- (4) その他設立の目的を達成するために必要な事業

(組織)

第4条 本研究所の所員は本学教養部語学担当の専任教員から成る。

(役員・任期)

第5条 本研究所に次の役員をおく。

所長1名、副所長1名、委員若干名

任期はいずれも2ヵ年とし、再任を妨げない。

(所長)

第6条 所長は、所員会議の議を経て、学長これを委嘱する。

- 2 所長は本研究所を代表し、運営全般を統括する。

(副所長)

第7条 副所長は所員会議の議を経て、所員の中から研究所長これを委嘱する。

- 2 副所長は所長を補佐する。

(運営委員会)

第8条 本研究所に運営委員会をおく。

- 2 運営委員会は、所長、副所長、委員から成り、所長は運営委員長を兼務する。運営委員会の規程は別に定める。

(所員会議)

第9条 本研究所に所員会議をおく。

- 2 所員会議は全所員をもって構成し、その過半数の出席をもって成立する。
- 3 所員会議は所長が召集し、その議長となる。但し、全所員の4分の1以上の請求があった場合、その請求より2週間以内に所長は所員会議を開催しなければならない。

(経費)

第10条 本研究所の経常費は愛知学院大学の年間予算をもってこれにあてる。

(規程の改正)

第11条 本規程の改正は、全所員の3分の2以上の賛同をえ、教養部教授会の議を経て、学長の承認をうることを要する。

附 則

本規程は、昭和50年4月1日より施行する。

本規程は、平成11年2月12日より改正施行する。

『語研紀要』投稿規定

(投稿資格)

第1条 本誌に投稿する資格をもつ者は、原則として、語学研究所所員とする。

(転載の禁止)

第2条 他の雑誌に掲載された論文・研究ノート・資料・翻訳は、これを採用しない。

(著作権)

第3条 本誌の著作権は当研究所に、個々の著作物の著作権は著者本人に帰属する。

(インターネット上の公開)

第4条 本誌はインターネット上でも公開する。

(原稿の形式)

第5条 投稿に際しては、つぎの要領にしたがって、本文・図および表を作成する。

- (1) 原稿は、原則として原稿用紙または、フロッピー入稿とする。(フロッピー入稿の場合プリントアウトを一部添付する。)
- (2) 本文の前に、別紙で、つぎの3項目を、この順序で付する。
 - (i) 題名および執筆者名
 - (ii) 欧文の題名および執筆者名
 - (iii) 論文・研究ノート・資料・翻訳の区別
- (3) 原稿の欧文箇所は、手書きの場合、すべて活字体で書く。
- (4) 図は、白紙または淡青色の方眼紙を墨書し、縮尺を指定する。
- (5) 写真に、文字または印を入れるときは、直接せずに、トレーシング・ペーパーを重ねて、それに書き入れる。

(6) 原稿は、原則として、刷り上り18ページ（和文で約16,000字）以内とする。

(原稿の提出)

第6条 投稿希望者は、運営委員会の公示する提出期限までに、同委員会に提出する。締切日以降に提出された原稿は、掲載されないことがある。ただし、申込者が、所定の数に達しないか、または、それを超える場合には、同委員会がこれを調整する。

(原稿修正の制限)

第7条 投稿後の原稿の修正は、原則として、これを行わないものとする。やむをえない場合は、初校において修正し、その範囲は最小限にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されたときは、追加費用を個人負担とすることがある。

(校正)

第8条 校正は、原則として、第2校までとし、本文については執筆者がこれに当り、表紙・奥付その他については、編集委員がこれに当る。

(抜き刷り)

第9条 抜き刷りは、論文・研究ノート・資料・翻訳各1篇につき、30部までを無料とする。これを超える分については、実費を執筆者の負担とする。

付則

1. 本規定の改正には、語学研究所所員の3分の2以上の賛成を要する。
2. 本規定は、平成3年4月12日から施行する。
3. 本規定は、平成13年4月27日に改正し、即日施行する。
4. 本規定は、平成14年5月9日に改正し、即日施行する。
5. 本規定は、平成14年10月15日に改正し、即日施行する。

申合わせ事項

- ◇ 第1条の「投稿する資格をもつ者」には、運営委員会が予め審議した上で投稿を認めた非所員を含むことができる。
- ◇ 運営委員会が、非所員の投稿の可否を審議対象とするのは、以下の場合である。
 - (1) 語学研究所所員との共同執筆による投稿
 - (2) 語学研究所所員が推薦する本学教養部の外国語科目担当非常勤講師（本学非常勤講師と学外者の共同執筆も含める）の投稿
 - (3) 語学研究所の講演に基づいて作成されたものの投稿
- ◇ 上記 (1) (2) (3) に該当する投稿希望者がある場合は、運営委員会を開いて投稿の可否を決定し、その投稿希望者に通知する。
- ◇ 投稿原稿の掲載に際しては、次のようにする。
 - 上記 (1) (3) の場合は原稿料および抜き刷りは1篇分とする。
 - 上記 (2) の場合は抜き刷りは1篇分とし、原稿料は支払わない。
- ◇ 第4条に関連して、本誌は国立情報学研究所が電子化した上でインターネット上に公表し、利用者が無料で閲覧できるものとする。
- ◇ インターネット上の公開は第28巻第1号から適用する。

語学研究所第8回講演会

日時：平成16年6月15日(火) 14時50分～16時20分

会場：学院会館ホール（1階）

講師：横田和憲 金城学院大学教授

演題：多彩なアメリカ英語——地域・エトス・民族

語学研究所第19回研究発表会

日時：平成16年12月10日(金) 16時30分～18時00分

会場：学院会館 会議室

研究発表

司会 石川一久 教授

1. 伊藤彰浩 助教授

「有標性理論に基づいた英語属格の教授とその効果」

司会 中里信一 教授

2. 鈴木健仁 助教授

「ヘルダリーンのオーデ「ガニユメート」について」

執筆者紹介 (掲載順)

- 堀 田 敏 幸 (本学教授・フランス語担当)
近 藤 浩 (本学助教授・英語担当)
伊 藤 彰 浩 (本学助教授・英語担当)
山 本 茂 美 (本学非常勤講師・英語担当)
相 川 由 美 (本学非常勤講師・英語担当)
坂 本 久 生 (本学非常勤講師・フランス語担当)
金 子 輝 美 (本学非常勤講師・英語担当)
戸 谷 鉦 一 (本学非常勤講師・英語担当)
矢 野 矢容衣 (本学非常勤講師・英語担当)
神 谷 博 (本学非常勤講師・中国語担当)
文 嬉 眞 (本学非常勤講師・韓国語担当)
Daniel Dunkley (本学外国人教師・英語担当)

語学研究所所員一覧

英 語

- 石川 一久 (委員)
 ○伊藤 彰浩
 大島 直樹
 近藤 勝志
 ○近藤 浩
 清水 義和
 田中 泰賢
 都築 正喜
 山口 均
 吉井浩司郎 (副所長)
 六田 正孝
 若山 浩
 Gert Michael Buresch
 Erin Burke
 ○Daniel Dunkley
 John Hopkinson
 Jane A. Lightburn
 Russell L. Notestine
 David Pomatti

ドイツ語

- 糸井川 修 (委員)
 鈴木 健仁
 中里 信一
 福山 悟

中国語

- 勝股 高志
 朱 新建
 藤原 輝三 (委員)
 前山慎太郎

フランス語

- 稲垣 正巳
 尾崎 孝之 (委員)
 ○堀田 敏幸 (所長)

(○印は本号執筆者)

編集後記

今年度は「語研紀要」が第30巻となりますように、発行30周年を迎えたこととなります。昭和50年12月の創刊号を見ますと、論文4篇と翻訳1篇が掲載されております。ただ残念なことに、現在この五人の執筆者は全員この教養部には残っておられません。年月の経つ早さに驚かされるばかりではありますが、こうして30年の長きに渡り研究成果の発表する場を持てたことに、感謝したい気持ちで一杯であります。

今回は論文10篇、研究ノート1篇、資料1篇の、合計12篇の玉稿を掲載することができました。ところが、最初に原稿をお寄せいただいた時には15篇という数になり、やむなく他の研究機関に発表雑誌をお持ちの先生三人には、そちらへ掲載をお願いすることになりました。改めてお詫び申し上げる次第です。中でも六月に語研主催の講演会でお話をいただいた、横田和憲金城学院大学教授のアメリカ英語についての論文も割愛することになり、断腸の思いを致しております。

ところでアメリカと言いますと、いまだにイラク戦争が終わる気配すらありません。前号でもこの編集後記で触れたのですが、世界は今やテロ事件の連続であります。イスラエルとパレスチナ、アフリカのスーダンでの内戦、そしてロシアの北オセチア共和国における学校での人質襲撃事件など、目を覆いたくなるような惨状を呈しています。

アテネ・オリンピックでは大事件は起こりませんでした。来る春には愛知学院大学の近隣で万博が開催されます。第一回が1851年のロンドン万博、そして日本の初参加が1867年のパリ万博であります。こうした歴史ある祭典が有意義なものとなり、我が語学研究所もこれに負けないような国際的英知のもとで、紀要発行30周年を機会にますます発展することを願うばかりであります。

(堀田敏幸 記)

平成17年1月10日 印刷
平成17年1月15日 発行 **(非売品)**

愛知学院大学教養部 語学研究所 所報
語研紀要 第30巻第1号 (通巻第31号)
編集責任者 所長 堀田敏幸

発行所 愛知学院大学 語学研究所
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12
Tel. 0561-73-1111~5番

印刷所 株式会社 あ る む
名古屋市中区千代田3-1-12
Tel. 052-332-0861(代)

CONTENTS

ARTICLES

- Baudelaire, labyrinthe du remords..... Toshiyuki HOTTA (3)
- Fathers and Sons in Dickens's Novels Hiroshi KONDO (31)
- A Factor Analysis on the English Language Test in a Japanese
Nationwide University Entrance Examination Akihiro ITO (47)
- A New Study of Japanese American Literature From
Viewpoint of "Trip" and "Map"
—Throughout The Works Written By Kren Tei Yamashita—
..... Shigemi YAMAMOTO (61)
- A Perspective to Language and Gender in a Gender-equal Society
..... Yumi AIKAWA (83)
- Des éléments orientaux dans la pensée de Marguerite Yourcenar
— À propos de « Les yeux ouverts » — Hisao SAKAMOTO (103)
- Copulative Sentences as Metonymic Expression .. Teruyoshi KANEKO (121)
- Modifiers of Characters in *Wuthering Heights* Koichi TOTANI (143)
- A Study of the *g* Dropping of Higgin's and Eliza's Speeches
in *My Fair Lady* Yayoi YANO (173)
- The category of "ShangLai" and "ShangQu" as verb complements
..... Hiroshi KAMIYA (205)

NOTES

- A Study of Language Standard in North and South Korea:
For Focus in Writing with a Space between Words Hi Jin MOON (227)

MATERIALS

- A memoir of two pioneers:
Leon Pettitt and Margarett Gale Daniel DUNKLEY (247)